

506
1281



始



506-1284



最後の

線

(編後)

アルツイバアセフ著
長岡義夫譯

新潮社出版

大正

13. 2. 4

購求

最後の線（後編）

アルツイバアセフ作
長岡義夫譯

水溜りは白雲の小片のやうに光つてゐた。枝の垂れ下つたアカシヤの姿は、水溜りに映つて、夜の雨に打たれた黄葉は、風に弄ばれながら、生物のやうに漂うてゐる。雨の後では總ての物が明るく見えて、四邊は何となくがらんとしてゐた。

チーシユは見慣れない外套を纏ひ、小さな上靴を穿いて、大通りを歩きながら呟つた。

「商人の奴め、錢もよこすまい……斯う歩き廻つては肺炎になつて了ふ……畜生！」

風邪を引き込んで、どつと病床につき、長い間夢みてゐた生活から遠く離れて、此の陰鬱な濕々した街に、たつた一人で死ぬのかと思ふと、チーシユは激しい惱みに捉はれるのであつた。彼は自分といふものが、喉に涙の流れるほど、小さな、不幸な、そして無益な人間に思はれてゐるのかつた。

「生涯これなんだ……俺は何うなるんだらう！」

小さな大學生は譯が解らなくなつた。彼とても學課に追はれ、破れた上靴を穿いて泥濘の中を駆け廻り、空しく幻影を描いて、意義も足跡もなく死んで了ふために生れたのではあるまい。それでは餘りにつまらな過ぎる。彼とても矢張り人間である。

何故人間は聰明な感傷的な思想家にのみ、生活が有意義であると思つてゐるのだらう？
彼チーシュの如き知識階級の人間が餓え凍えて、明日と云ふ日を氣遣うてゐるのに、社會を益さないばかりか、害毒まで流してゐる莫迦者共は、それぞれ満足な日を送つて、有らゆる高尚な理想を蛇蝎視してゐる。チーシュの如き人間が苦痛によつて贏ち得た幸福も、先づ斯ういふ厚皮動物に利用されて了ふのだ……容易く利用されて了ふのだ。人類が虚偽の祈禱を獻げてゐる豫言者や、敢て犠牲となる事を厭はぬ勇者は幾人ともなく倒れる。愚なる畜群は彼等の屍に添うて前進する。彼等は、自分の血液で幸福の煉瓦を洗ふために生存してゐるやうなものだ。けれども彼等によつて築かれた建物のの中では、勝ち誇つた豚の群が侮蔑するやうに鼻を鳴らしてゐるばかりだ。さうではあるまいか？ 歴史は思想や文字に對する殉教者の事蹟である。勝者の位置に立つた『凡庸』の記載である。富や、新しい計畫や、宏大な建築物や、美しい女や、名譽や、豪奢は、悉く愚かなる動物に屬してゐて、チーシュの分前は悲歎や缺乏や苦痛ばかりなのだ。過去は斯うであつたが、未來とてもこれと變りはあるまい。併し何時まで経つても此のまゝなのであらうか？ これは怖ろしい言葉である。總ての人に對する死と最後は此處にある。併しその時になつたら、總てが莫迦らしくなるだらう。誰が正義で、誰が正當になる？ キリスト教徒であらうか？ ロスチャイルド一族であらうか？

併し小さな大學生は勇氣を奮ひ起した。彼は質問さへ許すことが出来なかつた。何故なれば質問が既に疑惑である。一分間の疑惑は、彼が信じ敬する總てのものを、暗黒の方へと導いてゆく。

『何の事だ！』彼は自分を説得するやうにこんな事を考へた。『豚は勿論自分より幸福である。併し自分が豚と共に、何時まで経つても變らないでゐると言ふのか？』

總てに無頓着な内部の聲は、彼が最早この毛皮に慣れ、既にこれを喜び、慰安の中にその偉大を信じようとしてゐる事を物語つてゐる。併しチーシュは猶ほも悪意の考へを追うた。『何時まで斯うではあるまい。』哀傷に萎れかへることもなく、彼は氣を勵まして、冷たい泥水をはね返した。『何時かは新しい時代が来る……新しい人達が出る……知識と才能が生活を征服する……その時になつたら、どんなにいいだらう！ なんだらう！ 永遠の貧窮に憤慨してゐた不幸な大學生の生活などは想像もつくまい……さうなれば哀傷だの、破れた上靴だのといふものは、ありやしない……人類は自由になる、幸福になる、晴々とした顔になる。』

チーシュは狂信者のやうに執拗く齒を喰ひしばつて、再び壁高に繰り返して言つた。『さうなるんだ、さうなるんだ！』

彼は此の光輝ある未來を、高い廣々とした天空の下の晴れた一日のやうに想つた。その時に雨が降つたり、寒氣や泥濘や生理上の苦痛があらうとは到底考へられない。楽しい日の光輝は「永遠」から彼の心を照らす。哀傷はその光りの中に融けて、勇敢な心が湧いて来る。水のはねる音さへ上靴の下に心地よく響いた。

併し小さな大學生が、頸の短い額の狭い商人のツレグロフと、藝術家や哲人のやうに明るい顔をした新時代の人々とを胸の中に比較した時、彼は飛び立つて射落された小鳥のやうに失心したほど、兩者の間の甚だしい懸隔を覺り、數千年の戦闘や苦惱の想像が判然として來るのであつた。

「さうなるんだとも。勿論さうならざるを得まい……併し何時の事だらう？ その時になつたら、絶えず苛々して、破れた上靴を穿き、見窄らしい外套を纏うた小さな大學生が何處にあるだらう？ 何處を搜したつて居ないかも知れない。彼を思ひ出してさへ滑稽になるかも知れない。」

チーシュは譴責の眼を上げて、白い空を見た。其處には灰色の果しない雲が眼に見えぬほど動いてゐた。彼はそれを見て苦笑した。不意に憎惡の心が燃え上つた。

「併し光輝ある幸福や、黄金時代や、未來の人類は、侮辱せられた小さな大學生の苦痛に値するであらうか？ 自分は哀れな不幸な人間だ。それにも拘らず未來の人類の幸福ばかり考へてゐる。恰も自分自身の唯一の幸福が其處にありでもするやうに幻影を描いてゐる。自己一個の事などは氣にもかけない。他人の事よりも、自己自身を考へるやうにしたら、今よりは幸福な月日が送れたかも知れない。未來の幸福なる人々よ……貴方がたはどんな人達だらう？ まさか小さな大學生に對して知らん顔もすまい。私の苦痛を買つて呉れるだらう。私の幻想を辯明して呉れるだらう。貴方がたが生に歡喜するまでには、數ふるにも足らぬ小さな夢想者を、なほ幾人となく要するのだ。流血と苦痛とを要するのだ……未來の幸福な人達の爲めとしては、餘りに高價ではあるまいか、餘りに犠牲が大き過ぎはすまいか？」

此の考へはチーシュさへ喫驚したほど、突然に湧いて來たのである。彼にとつては全く思ひもかけぬ事だつた。彼は最も尊い物を侮蔑し、最も聖なるものを嘲弄したやうな氣がした。小さな大學生は惶急しく氣を紛らした。

「キリール・デミートリエヴィチ！ お前は感傷的になつた。濕氣のために氣まで濕々して來たのかも知れない。矢張り自分の財布を肥やしたいんだらう……そんなら商賣を始めるがい。さもなければ保安警察へでも入るんだ。さうして人道の理想などは、もつと根氣のい

い人間に委せて了へ……畜生！ お前は三度も呪はれるんだぞ！」

此の悲劇的な呪咀の聲は誰に向けられたのだか分らない。けれども小さな大學生の胸は憎悪に震へて來た。雨水は上靴の中へ入る。粘々した不愉快な濕氣は長靴や襟を襲うてくる。チーシュは屈辱と憎悪から泣き出しさうになつた。

彼は大通りの外れまで來た。濁つた下水は黄色い落葉を浮べて、渦を巻き、音を立てながら、夏の間、大學生のミーシュカとダヴィチェンコが住んでゐた横路の方へ流れてゐた。チーシュは放心したやうに、其方へ曲らうとした。けれども二人が疾うに街を去つて了つた事を思ひ出して眉毛を擧めた。

『幸福な奴等だ！』苦しい美望の念が彼の頭腦を掠めた。

彼は大都會や、馬車の列や、鋪石路を絶間なく流れる眞黒な人波や、大劇場の入口や、大學校の古い建物や、電車の響きや、無数の電燈の反射に照らされた夜の空を想ひ浮べた……それ等はどれほど彼から遠く隔つてゐたらう。

冷たい雨水は足下にはねる。穴だらけな上靴の中に潰れる。風は哀れなアカシヤに吹く。濡れた屋根や垣根は煌々と光る。何となく退屈である。物悲しい。

何か慰藉を求めたい。チーシュは無意識に自分を説得し始めた。

『實際何うしたと言ふんだらう？ 何の事だ？ 此處にだつて書物もあるし、劇場もあるではないか。併し問題は退屈といふ事にあるんだ。そんなら人間か？ それとても同じ事だ。すべての人を識つてゐる譯でも、見た譯でもない……そんなら誰が悪いんだ？』

チーシュは相識の教授や文學者や大學生や畫家を並べて、彼等の平凡な退屈な顔を注意深く見くらべた。そして腹立たしげに罵つた。

『どれもこれも氣の利かない面をしてゐる……畜生！』

これは更に哀傷の情を起させた。世界は空虚になつてくる。

『神経が弛んだのだ。』チーシュは斯う思つた。『俱樂部へでも寄つてみようか？』

彼はドクトル・アルノリヂイとでもいいから暫く話したかつた。坐睡をしてゐてもいいから、生きた人間の顔を見たかつた。單に希望したばかりでなく、何か企てる必要があつたのである。

併し俱樂部の入口はがらんとして薄暗かつた。玻璃扉が雨に汚れた窓は白く光つてゐた。門番部屋の後方からは、兵卒の料理や安煙草や襤褸や穢ない老爺の匂ひがする。掛釘には一つも帽子が見えなかつた。

チーシュには、これが酷く不幸のやうに思はれた。彼は信じられぬやうに屏風の中を覗い

た。門番は青い花模様のある更紗の穢ならしい枕に俯伏したまゝ、眠つてゐた。そして黄色い爪の歪んだ穢ない踵が、チーシュを迎へるやうに突き出てゐた。彼は恰も罪人のやうに、爪先を立てながら屏風をはなれて、こつそりと扉を閉めた。彼は門番が眼を覺まして、自分が退屈してゐる事や、相手を捕へたがつてゐる事を推察されるのが、何となく體裁が悪かつたのである。

チーシュは濕氣が襟まで這ひ上つて來ないやうに、肩を高く上げながら、再び泥濘の中を歩き始めた。もう商人の子供を教へに行くより他には仕様がなかつた。

二

教室の内部は薄暗くて泥だらけだつた。子供達は今方まで、雨の中を駆け廻つてゐたのだらう。床の上には生々しい泥足の跡があつて、彼等の濕つた着物は、雨に濡れた犬のやうな匂ひがする。チーシュは巻煙草を吹かし、頭を振つて、自分にも子供達にも興味のない中世紀の挿話を氣がなささうに續けた。

小さな大學生は時々自分の考へが數千露里の彼方へ飛んでゐるのに氣がついた。彼は思はず身體を震はして、氣遣はしげに聲を張りあげた。併し彼の熱心も忿怒に變つて了ふほど、

愚なる子供達は冷淡である。以前の無氣力は斯うして直ぐに訪れて來る。若し光輝ある十字軍の講義をしてゐるチーシュの聲を側の方から聞いた者があつたら、小さな大學生が屍に詩篇でも読みあげてゐるのかと思ふかも知れない。

リーザが蒼白い顔をして、陰影のやうに入つて來た。

「今日は！」チーシュは嬉しさうに言つた。「お退屈でせう？」

リーザは不思議さうに——喫驚したやうに彼の顔を見て、彼の手を優しく握つた。そして平生の席に腰を下した。

チーシュは講義を續けたが、窓際に黙つて腰掛けてゐる少女の方を、時々盜むやうに見た。蒼白い水の光は彼女の瘡せた面に落ちた。無邪氣な眼は、灰色の寂しい空を悲しさうに見詰めてゐる。

「たゞの身體ぢやないんだ！」小さな大學生は斯う思つた。

彼はリーザの身や魂に唾を吐きかけながら、羞恥もなく街中に擴つてゐる不愉快な風聞の事を思ひ出した。まだ今日の事である。厭に若装をしてゐる、淫奔な、だらしない肥つた宿の主婦は彼に言つた。

「ほんたうですよ、あの娘が身持なんですとさ……呆れるぢやありませんか……あんな小さ

な娘がさ。」主婦は斯う言ひながら、リーザが自分の髻でもあるやうに意地悪く笑つた。
小さな大學生はむつとした。情を知らぬ愚な奴等だ！ 彼等は少女を憐れむかほりに、泥
濘の中に頭ごと沈めようとしてゐるのだ。

「沈めて了ふのだらう。」チーシュは憐れみと悲しみで一杯になつた。

不思議な事である。小さな大學生が心から侮辱してゐる男に彼女が身を委せてから——辯
解のしやうもない事を爲出来してから、チーシュは以前の侮蔑的な疎遠どころか、リーザに
對して深い憐憫の情や、尊敬に似たものさへも覺えるのであつた。恰も墮落と同時に重みが
ついて來たやうなものである。以前は感かしく見えた彼女の無邪氣な眼も、小さな大學生
には殉教者の清らかな悲しい瞳のやうに思はれて來た。

最早純潔でない彼女の美しい肉體に對する自分の情慾的な眼付に氣がついた時、彼は激く
悲しかつた。これとても不思議なことである。偏見のない聰明なチーシュは、既婚の女に會
てこんな眼を向けたことがなかつた。彼等は決してこんな不純な好奇心を起させない。此
の汚ららしい想像に氣がつくと、チーシュは妙に熬熱になつて、大袈裟な敬意さへリーザに
示した。彼は何でもよいから彼女を助力してやりたかつた。そしてその術を知らないのが
惱ましかつた。

「如何です？」彼は訊いた。

リーザは喫驚したやうに彼の方を見た。物を言はれる度に怖ろしい皮肉の意味を感じて、
彼女はすべての人を怖れてゐるらしかつた。

「何ともありませんわ……」彼女は直ぐに答へた。

「早く冬になればいいですね……この濕々した時候は一番不愉快ですよ。」心から彼女に好
感を與へようとして、チーシュは言葉を續けた。

「さうですわね……」リーザは物靜かに答へて、悲しい眼を白い秋の空に隠すやうに、窓の
方へ顔を反付けて了つた。彼女は暫く放つて置いて貰ひたさうである。

チーシュは口を噤んで、苦しさうに煙草を吐き出した。蜘蛛の巢のやうに細い悲痛の糸が
彼の胸の周圍に纏れた。

「我々は相互に皆な他人なんだ。他人を勞つたり、慰めたりする事も知らない。皆な孤獨な
んだ、そして不幸なんだ。けれども自分の悲しみを他人に煩つ事は出來ない。」

脂ぎつた顔が扉口に現れて、歌ふやうな聲で言つた。
「リーザ！ お父さんがお呼びだよ、おいで……」

此の呼聲には別に驚くほどの物もなかつた。併しチーシュも、リーザも、子供達さへも、

同時に何事かを直感したのであつた。チーシュは狼狽して巻煙草を落した。子供達は手帳を置いて、訝しげに姉の顔を見詰めた。リーザは自分の席から動かなかつた。けれども彼女の手は震へてきた。

『早くおいでな！』母は斯う繰り返して、扉の蔭に隠れた。

數分間は苦しい沈黙の中に過ぎた。チーシュは少女の顔を見るのを怖れた。子供達は物好きさうな意地悪さうな眼を彼女から放さなかつた。リーザは怖ろしい内部の緊張の中に、依然として白い空を見詰めてゐる。窓外では雨が再び嘯いて、曲りくねつた急流が窓硝子の上を走つてゐた。少女は遂に身體を動かして、暫くは愚圖々々躊躇つてゐたが、漸く椅子から立ち上ると、誰にも眼を呉れずに、元氣なく教室から出て行つた。

チーシュは狼狽へて彼女を見送つてゐたが、聽て譯の解らないほど物狂ほしい聲で子供達を怒鳴りつけた。

『さア、まだ出来ないんですか？ 私は待つてゐるんですよ。』

子供達は冠毛が額の上に立つて、忽ち形相の怖ろしく變つた彼の顔を、喫驚したやうに見て、惶急しく手帳の上に眼を落した。

長い沈黙が続いた。と、一つ置いた隣の部屋から、胸を壓するやうな聲が聞えてきた。チ

ーシュは不安さうに耳を欬てた。そして子供達に聞かすまいとして、大袈裟な聲で、新規の問題を書取らせた。彼の胸は苦しかつた。彼は恰も子供が虐められてゐるのを眼にしなが

ら、それを庇ひ兼ねてゐる時のやうに羞かしかつた。突然大聲が家中に響き渡つた。何か騒ぎが始つたらしい。それが一時鎮つたかと思ふと、愕きと痛みに充ちたりーザの絶望的な金切聲がする。これと同時に、ある力に捉はれた小さな大學生は、何をするといふ自覺もなしに、教室の中から跳び出して行つた。子供達も書物を投げ出して、狂氣の如くに彼の跡を追うて行つた。

チーシュは顔を掩うて逃げて来るリーザに客間で突き當つた。彼は昂奮して、針雀のやうに髪を亂しながら、商人のツレグロフに跳び掛つた。

『何をなさる！ 羞かしいとお思ひなさい！』彼は忿怒と悲痛を帯びた甲高い聲で叫び出した。此の時小さな大學生の胸は顫へてゐた。

脂だらけな下著一枚で、背廣服を脱いだ、頸の短い、肥満したツレグロフは、氣息を喘ま

せて、牡牛のやうに身體を揺ぶりながら、狂人のやうに血走つた眼で、突然自分の眼前に現れて来た小さな大學生の顔を見詰めた。

の顔は蒼ざめてきた。眼は眼窠から剝き出た。唇は顫へながら動いた。

一六

『貴様は何だ？』彼は家中に響く位の嘎れ聲で叫んだ。『矢張り貴様も娘を……畜生！ 出てゆけ！ 叩き殺すぞ！』

チーシュの鼻先には、悪夢で見たやうに大きな、紫色に腫れ上つた鼻面が突き出てゐた。彼は肘先で無意識に身體を隠しながら、辛くも聲をあげる事が出来た。

『貴方は……私を……』

何か壊れたやうな音がする、吠えるやうな聲が聞える……雪崩のやうなものが彼を踏みつける。小さな大學生は再び鬼のやうに叫んで、自覺を失ひ、視覺を失つて、狼狽した恐怖の中に前室へ跳び出した。頭の上では物狂ほしい叫聲がする……誰だか彼を突きとばして、外套の袖を通す時間も與へない。彼は人間の掌の中で藻掻いてゐる小猫のやうに、自分が抵抗しがたい力の中にあるのを意識した。そして何故か片方の上靴を手に下げたまま、突然宅地の水溜りの中に現れて來た。彼の帽子は後方から抛り出されて、轉がりながら泥濘の中に落ちた。扉はびしやりと閉された。チーシュは冷たい小雨に濕つた白い空の下にたつた一人残されたのである。

彼は漸く正氣にかへつた。

手足はぶる／＼顫へて、全身はづき／＼痛んだ。彼は不體裁と凌辱と絶望とを沁々と感じた。小さな大學生は自分の肉體上の無力を今日ほど痛切に感じた事はなかつた。彼の記憶の中には、何故かダヴィデニコの逞しい體軀が浮んで來た。そして彼が此處に奇蹟的に現れて來る事を惱ましいほど執望し始めた。

耳が全くがんとして、手足のぶる／＼顫へる哀れなチーシュは、自分の上靴を水溜りの中に置いて、兎に角それを穿いた。そして顫へる手先で帽子を拾ひ上げて、長い間見窄らしい外套の袖で拭うてゐた。見る影もなく泥水に濡れた彼の唯一の古帽子は、何故かチーシュの唇が顫へて、周囲のあらゆる物を疊らせながら、悲しい涙が兩眼に溢れて來たほど、自分に對する限らない憐憫の情で、彼の胸を引き裂いたのである。

彼は力なく握拳を固め、唇をひき結んで、無我夢中に宅地から駈け出して行つた。勝手な入口階段の上に集つてゐたツレグロフ家の召使達は、拍手と哄笑とで彼を見送つた。

三

リーザは涙で濡れた枕に顔を埋め、美しい頭髮を散らして、寢臺の上に横はつてゐた。片方の足からは上靴が落ちた。黒い靴下を穿いた哀れな美しい足は寢臺から垂れ下つてゐる。

雨に濡れた黄色い花園に面して窓の一つある小さな部屋は、何となく居心地が悪かつた。洋机ヤンキの上の書物や、壁の繪端書や、モスリンで簡単に裝飾された姿見は、滑稽な感傷的な眼をしてゐる。すべての物は質素で平凡で、單純な思想や、無邪氣な媚や幻と共に、小さな娘の生活といふものを物語つてゐた。

悲しみは無言の絶望の中に寢臺の上に竦すくんでゐる婀娜ななやかな女の姿から流れて來た。一人として彼女の部屋へ入つて來る者はなかつた。父は氣分が悪いので、汗をかき、襟の破れた襯衣シヤツを著、紫色になつて、山のやうに横はつてゐた。悲しみに憔悴せうすいれ果てた母親は、涙に濡れた喫驚したやうな顔をして、扉の中を覗くと、手を振りながら行つて了つた。頭髮の薄い肥満した彼女は、自分の頭腦かみを突然に襲うた取返しかたがひのつかない不幸に當惑して、聖像に十字を切つたり、手を打つたり、小聲で何か呟つぶやいたりしながら、何にも解らずに、家の中をおろ／＼してゐた。

「神様！ マリア様！ 何事で御座いませう。何うなる事で御座いませう。私のリーザは……リーザニカは……」

母の眼前にはリーザの生れた時分の事や、薔薇色の小さなリーザニカを抱いた時分の事が判然はつきりと浮んで來た。彼女は碧い愚かしい眼を見開いた、麻疹はしかも煩つた、小さな可愛い手で、

當時はまだ若くて美しかつた自分の顔を打つた……あの時分は彼女も無心だつたらう。

「神様！」

リーザは何にも見なければ周圍まわりの事も知らず、枕に俯伏したまゝ泣いてゐた。顔はすつかり涙に濡れて、頬を打たれた跡はすり剥けてゐた。併し彼女はその痛みさへ感じなかつた。すべては胸の中に消えて了つた。たゞ物狂ほしい悪夢のやうなものがあつて、弱々しい考へはその中に頼りなく旋動してゐる。

眼前の眞赤な霧の中には、父親の眼れぼつたい大きな顔が見える。彼女には全く見慣れない顔である。彼女は殆んどそれと氣がつかなかつた。リーザは臆ろげながら今の出來事を思ひ返した。彼女には、父親が何處まで識つてゐるのだから解らなかつた。恐怖と羞恥はにかみに茫ぼんつとして、父の言葉を聴きとる事が出來なかつた。彼女はたゞ直ぐにも裸體はだかにされて、自分の素肌を鞭打たれるやうな氣がしてゐた。聽て父は氣息いきを喘せまませ、暫くの間は凝じと口を噤しんで、狂人のやうな眼を斜き出しながら、何うしてやらうかといふやうに、彼女の顔を見詰めてゐた。リーザは後退りもしないで、縛められたやうに立つてゐた。彼女は殺されるのではあるまいかと思つて、遂に一言も口を利かなかつた……突然野郎やろうな怖ろしい言葉——聞き苦しい悪口が彼女の顔に吐きかけられた。少女は眼を見開いて、溜息を吐きながら後退りした。

「まア、そんな事を……」彼女は恐怖に理性を失つて、子供のやうに哀れつぽく言つた。此の叫聲は父を背後から突き飛ばしたやうなものだつた。父親は腕を振りあげて、力まかせに彼女の頬を殴つた。

暫くの間、リーザは自覺を失はないばかりだつた。聽て両手で顔を掩ひ、金切聲をあげて、物狂ほしい叫聲や、泥濘のはねるやうに彼女を追うて来る口ぎたない罵詈の急雨を背後に聞きながら、何處へ行くともなく、無我夢中で逃げ出してつた。

彼女は自分の部屋で我にかへつた。恐らく一時間や二時間は、無我の状態の中に過ぎたのであらう。聽て今起つた怖ろしさを了解したやうに、リーザは周圍を見廻して、狂氣のやうなヒステリイに震へながら、枕に顔を埋めてつた。彼女は寢臺の背部を掴み、全身を屈め、髪の毛を引き捲つて、枕や腕に噛みついてゐたが、暫くすると甲高い聲をあげて、そのまゝ動かなくなつてつた。

歎息は胸を痛めた。彼女は怖ろしい静寂のなかで、身動きもせず横はつてゐた。霧は彼女の周圍にこもつてゐる。彼女にとつて此の世界に残されてゐるのは、すべてが終つてつたといふ自覺ばかりである。

彼女は何にも想像する事が出来なかつた。この先き何うなる事か分らなかつた。たゞ自

分といふものが破滅した事と、平和な過去へ歸る道のない事ばかりが分る。未來は死のやうな空虚である。

「もう生きてはゐられない！」リーザは懶い静寂の中に獨言を言つた。これは當然な、明瞭な事のやうに思はれた。

水に洗はれた粘土質の岸や、渦卷の流れと共に、雨水に溢れて黄色く濁つた川が、堅く閉ざした彼女の眼前へ、何處からともなく流れて来る。リーザは黄色い冷たい水底に、自分の全身が沈んでゐるやうな冷寒さへ覺えた。胸の中は絶望的に鎮つて来た。過去の事や、様々な些事や、遠い太陽や、緑の花園や、懐しい貴い物や、もう永遠に見られない物などが、夢のやうに思ひ出される……彼女は不圖急にミハイロフの事を思ひ出した。

怖ろしい胸の衝撃は彼女を戦慄せしめた。リーザは狂氣のやうな悲痛の中に全身を震はした。彼女はもう彼にさへ會へない事を識つた。そして斯う考へると、顫へるやうなデリカシイと絶望とが、リーザの胸を捉へるのであつた。彼女は両手を胸に當て、殆んど堪へられないやうな愛情の溢れの中に身を沈めてつた。

「あの人のためだ！」判然とした考へが、彼女の頭腦にちらりと閃いた。自分がこんなに不幸なもの、こんなに苦しい思ひをしてゐるのも、皆な男のためだといふ怖ろしい歡喜は、彼

女の胸を戦かせるのであつた。

三

構はない。彼女はもつと苦しうとした。男のためであるのなら、汚辱と羞恥の涯へでも赴かう。自分はあの人を愛してゐるのではないか。彼女は彼の愛のやうに大きな幸福に對しては、まだく自分の苦しみが足りないやうにも思つた。リーザは若し男が此處にゐて、すべてを見てゐたら、斯うした事は何にも起らなかつたらうとも思つた。

彼の胸に跳びつきたい。全身を男に寄り添うて、自分のすべてを男の意志に委せたい。男は屹度彼女を憐れんで、彼女を愛撫して、彼女を抱き締めて呉れる。そして彼女は永遠に彼と——彼一人と、一緒にゐるのだといふ殆んど無自覺的な希望が、暫く彼女の胸に湧いてゐた。全身を貫き、心の奥底までを開いてゐるやうなデリカシーを感じると同時に、リーザはどれほど男が自分を愛撫して呉れたかを、思ひ出した。彼から受けた胎兒に就いての怯々した、けれども太陽の小さな斑點のやうに明るい秘密の考へは、何處か胸の中に顫へてゐた。これはリーザの全身に楽しい心地よい羞恥の紅が溢れて、暫くの間は彼女が總ての事を忘れて了つたほど思ひがけないものであつた。

併しこんな幸福を夢みてゐる事が、彼女は間もなく怖ろしくなつて來た。彼は普通外れて美しい男であるのに、自分はこんなに小さな、愚かな、質樸な……

從順を悲しみと愛に充ちた小さな胸は、苦しいほど締めつけられた。たゞ一つの考へが込み上げながら擴がつてくる。

「構はない……もう幸福になれないでもない。男が自分を愛してゐなかつたにしても、此後自分を愛する事が出来ないにしても構はない……捨てられてもい……自分に唾を吐きかけようが、侮辱を與へようが、打擲を加へようが構はない。捨てられたら死ぬばかりだ。それは當然だ。分りきつてゐる。併し、少しでも男にとつて自分が必要である間は生きてゐよう。すべてに従はう。すべてを堪へよう。」

彼女は枕に獅噛みついて、腫れた憔悴れた顔を涙に濡らしながら考へた。

「戀しい、戀しい……私の戀しい人……」

そしてそれ以上は何にも考へる事が出来なかつた。

四

チーシュは氣息を喘ませ、何かぶつ／＼呟いて、堪へられないほど烈しく鼓動する胸を鎮めようと努めながら、大通りを走つて行つた。小鳥のやうな鋭い顔は火照つて、眼は途方に暮れたやうにきよろ／＼してゐた。全身が震へてゐる。

四邊はもう暗くなつた。うす青い夕闇は降りつゞく雨に煙つて、大通りを包んでゐた。哀れなアカシヤは憔悴した哀傷の幻のやうに頂垂れて、濕つぽい霧の中に朦朧と融けてゐる。どろ／＼した泥濘の中に沈んだ廣場の方には灯が輝いて、海のやうに廣い水溜りの中に映えてゐた。通行人は襟の中に隠れて、上靴で雨水をはねかしながら、稀れに向うの方からやつて来る。チーシユは誰にも注目しなかつた。彼は此の世界にたつた一人の、虐げられた、誰にも不必要な不幸者だつたのである。

平生のあらゆる理想は一時に彼の頭腦から飛び去つて了つた。彼は悪夢にでも襲はれてゐるやうに、哄笑や叱聲や侮辱や打擲が八方から降りかゝつて来るのを意識した。恰もすべてが顔を反向け、すべてが意義を失つて了つたやうに思はれる。たゞ判然としてゐるのは、彼等が自分の襟頸を掴んで、小猫のやうに投げ出したといふ堪へられない自覺である。彼はその雄々しい激發と共に、たゞ哀れで滑稽であつたのだ。燃えるやうな快感と共に肥満した商人の喉を引摑んで、壁の處へ壓しつけて、あの不愉快な面を張り倒してやりたかつた——腕のつゞく限り張り倒してやりたかつた……彼の胸には自分の無力に就いての絶望的な自覺や、すべての言葉と慰安に對する生理上の憎惡と同時に、粗暴な腕力や力強い拳骨に原因する鋭い悲痛の情が蟠つてゐた。

幾度この粗暴な力は彼を道路に留めたらう。併しこれほど激しい行動を、斯うも無造作に起させた事は一度もなかつた。

それは滑稽でもあつたし、無様でもあつたし、愚かしくもあつた。それは聽苦しい逸話の印象を産んだほど、彼をして哀れな少女の防禦に向はせた美はしい感情とは聯絡がなかつたのである。

チーシユは氣息を詰らせた。彼は顛へた唇を狂氣の如くに噛みしめ、拳を握りかためて、何の考へもなく水溜りの中をびちや／＼歩いて行つた。そして無意味に繰り返して言つた。

「俺の顔を、俺の顔を……俺の顔を殴りやがつたんだ。あゝ……」彼は絶望的に唸り聲を出した。この時彼に聲を掛けた者があつた。

チーシユは身顛ひをした。彼は立ち上つて、自分の前に突立つてゐる會計官ルイスコフのひよろ長い灰色の姿を、長い間それとも識らずに見詰めてゐた。

「今晚は、キリール・ヂミートリエヴィッチ！ 何處へお出掛けです？」ルイスコフは捻れた口髭の濕つた、元氣のない眼をした、馬のやうに長い顔に、強ひて優しい微笑を浮べながら訊いた。うす青い夕闇に包まれた彼の顔は、雨の透らぬ外套の頭巾の下に、死人の顔のやうに延びてゐた。

「僕ですか？」チーシュは無意識に訊きかへした。「僕は家へ歸る所です……」

これが他の日の事だつたら、彼はルイスコフに呼びとめられた事を驚いたかも知れない。二人は餘り親密でもないので、お互に一言三言より話したことはなかつた。併し今日は何うでもいゝ。彼はルイスコフの濡れた冷たい手を握りながら、呆然と鋪石路の真中に佇んでゐた。

「私の所へちよつと寄つて下さいませんか？ 私は直ぐ近くに住んでゐます……」此の機會を心から喜ぶやうに、ルイスコフは忙しく言葉を續けた。

「これはまた何のためなのだらう？ 何うしたと言ふんだらう？」チーシュは別に熟考する事もなく、依然として自分の事を考へながら、こんな事を思つてゐた。

「來て下されば私も母も非常に愉快です……貴方とは古い馴染みぢやありませんか……お茶でも飲みませうよ……いゝでせう！ とうからさう思つてゐたのですが、御迷惑でせうと思ひましてね……」

「何だつて此の男は俺に引つついて來るんだらう。何の事だ！」小さな大學生は悲しさうに斯う思つた。彼の眼前には同じ光景が何時までも消えずに見えてゐた。彼等は狗兒のやうに自分を引摺み、自分を突出し者にして、自分の唯一の古帽子まで泥濘の中へ抛り出した

のだ。自分は何にも復讐する事が出來ない。自分の毆打された所は皆なが見てゐた。どうで皆なに知れて了ふだらう。

「私は來て戴きたいんです……ほんたうに……貴方の御意見は！」ルイスコフは何とかかとか言つて、自分の濡れた冷たい指先から、チーシュの手を放さなかつた。

チーシュは多忙であるからと言ひたかつた。けれども彼は不可解な無頓著な心に捉はれて了つた。彼は殆んど無意識に承諾した。

「どうぞ、私の家は直ぐ其處です、ほんの二三歩ですよ。私は非常に愉快です……どれほど私が喜んでゐるか、貴方には到底信じられますまい……」實際チーシュが驚いたほど、ルイスコフは心から嬉しさうに急ぎ始めた。

何故か彼はルイスコフに機嫌をとられるのが羞かしくなつてきた。併し、それと同時に氣が安まりもした。小さな大學生は突然、自分のやうに虐げられた人間さへも、ルイスコフの眼から見れば矢張り卓越した人物である事を知つたのだ。

二人は歩いて行つた。二人は言葉も交はさなかつた。併しチーシュには話せなかつたのである。彼は最も堪へ難い數千の出來事の中に、自分の屈辱を経験してきた。今日の出來事は忘れ得ぬ、取返しつかない事のやうに思はれる。今後幾年たつにしても、事實は矢張り事

實として残るのだ……假令一分間にせよ、彼が哀れで滑稽であつたら、それは彼が哀れで滑稽である事になるのだらう。此の考へには堪へられない。時々チーシュは最早生きてゐられないやうな氣持になつた。併し彼から見れば、自殺は自分に親しみのない最も忌むべき考へなので、彼は此後の問題を考へる事を怖れて、霧のやうなものの中に迷ひ込んで了つた。

ルイスコフはチーシュに餘り遠く思はせまいとして、一步々々に惱みながら先へ急いだ。そして小さな大學生になるべく乾いた場所を譲つて、自分は馬鹿正直に水溜りの中を歩いて行つた。

日は全く暮れて、二人が家に著いた時分には、四邊はもう蒼白くなつてゐた。哀れな陰鬱な顔をした小さな傾斜した家屋の側面は、一面の水溜りに溢れた人氣のない街を、視力の鈍つたやうな窓でちつと見詰めてゐる。垣根の下には、雨に濡れたブライヤン草が元氣なく項垂れ、雨は間斷なしに噺いて、遠くの方には寂しい人影が朦朧と見えてゐた。すべての物は哀れで、濕つぽくて、四邊は何となく物悲しかつた。暗い窓には灯も見えない。此の街には人が住んでゐないのであるまいか。

チーシュの頭脳には無意識にこんな考へが浮んだ。會計官とか、郵便局長とか、始終賑れ面をしてゐる子澤山の寺男とか、三留の恩給を貰つてゐる退職官吏の妻とか、収入もなしに暮

してゐる平民のやうに、無意義な植物の生活を運命づけられた哀れな人間でもなければ、こんな寂れた街の、雨に濡れた垣根やブライヤン草の中の、天井の低い薄暗い家に日を送る事は出来ない……大きな心と相當の頭脳を有する男は、こんな呪はれた處に暮す位なら、寧ろ牧場か樽の中にも宿るだらう。

ルイスコフが何か頻りに謝罪しながら、急いで洋燈を點してゐる間に、チーシュは雨の透つた外套を無意識に脱いで、それを何かの箱の上に置いた。そして所在なく部屋の真中に突立つてゐた。

洋燈は徐ろに燃え出した。破れた更紗木綿の覆布がついてゐる赤塗の古風な椅子や、埃に曇つた硝子屏の中に色硝子の茶碗が見える大戸棚や、模様のある窓掛や、窓闌の上にある摘花や、葉形飾のついた框の中にある褐色の寫眞は、品位もなく客を出迎へるやうに、煙つた薄闇の中から現れて來た。羽蒲團や埃や洋燈の油の、腐れたやうな匂ひがする。低い天井は煤けた梁の上の十字架と共に、直ぐ頭の上に懸つてゐる。虐々とした貧しい生活は周圍を取巻いてゐる。

「どうぞ、掛けて下さい……」ルイスコフは早口に言つた。「私は直ぐ來ます……サマワールをね……ちよつと待つてゐて下さい。」

彼は惶急しく駈け出して行つた。けれどもチーシュはまだ自分自身にかへらないで、何うして此處へやつて来たのかも解らずに、止むを得ず洋机の傍に腰を下して、室内を見廻し始めた。彼は寫眞を見ようとさへした、併し其處には兩手を膝の上に置いて、背後に貧相な妻を伴うた、官吏や平民の色の褪せた同じやうな顔が見えるばかりだつた。小さな大學生は平生のやうに痙攣を浮べながら、顔を反付けて了つた。

ルイスコフは、隣室で誰かと話してゐた。何處かにサマワールの煙突が落ちて、鋭い音を立てた。木片の燃える匂ひがした。チーシュは胸苦しくなつた。そして先刻の出来事が更に痛々しく思ひ出された。何よりも思ひ出して怖ろしかつたのは、商人の袖に掴みかゝりもしないで、敢て身を防がうとしなかつたばかりか、それに氣が付きさへしなかつたことである……恰かも他人に殴られた所で、自分には何事も爲し得ない程、それが既に當然な事でもあるやうに。併し更に怖しかつたのは、片方の上靴を下げて、沂濤の中に轉げた自分の帽子を無心に見ながら、白痴然と水溜りの中に佇んでゐた自分が、最早拭ひ得ぬ醜態に思はれてならなかつた事である。此の瞬間の記憶が胸に湧いて來ると、小さな大學生は頭腦が重くなるばかりの汚辱に沈むのであつた。

ルイスコフは緑青の湧いたサマワールを持つてやつて來た。彼は茶盆を手にして、魚のや

うに愚かしい眼をした、貧相な、面長の老婆を連れて來た。

チーシュは漸く、我にかへつて、躊躇ふやうに立ち上つた。ルイスコフはサマワールを洋机の上に置いて、不器用に言つた。

『私の母で……これが即ち……』

『これが即ち』の意味は不明瞭である。『私の所にはこんな母親があります』といふのだから、それとも他の意味なのだか解らなかつた。

チーシュは矢張り躊躇ふやうにして挨拶した。彼は、手を差し出さねばなるまいと思つたが、差し出しはしなかつた。老婆は喫驚したやうに眼を剥き出しながら、彼の挨拶に返答した。そして何時までも驚いてゐるやうな眼をチーシュから放さずに腰を下した。

チーシュは彼女と何か話さねば悪いと思つた。

『貴方の息子さんの所へ寄りました。』胸を壓しつけられたやうな聲で、彼は何故か聲高に言つた。

老婆は暗い眼を瞬いた。

『お母さん！ 貴方に言つておいでなんですよ。』ルイスコフは顔も見ずに言つた。

老婆は矢張り喫驚したやうな眼で彼の方を見た。

「嬉しう御座います……ほんたうにお禮を申し上げますよ。」彼女は顔を延ばしながら言つた。

思ひがけなくも彼女の眼は急に輝いてきた。魚のやうな濁りの中には、表情に似たものが現れた。

「サーシニカも満足で御座います。彼は何時も一人きりで、お友達も御座いません……これからはどうぞ被^い来^らつて下さいまし。」

彼女は妙な所で挨拶をして、頭を上げながら、喫驚したやうに瞬きをした。

「いえ、何う致しまして……私だつて非常に……」チーシュは呟いた。

魚のやうに暗い眼の生々した光りは、段々に燃えて來た。老婆は三時間位も續けさうな口調で話しながら、小さな大學生の顔を取入るやうに見詰めてゐた。

「貧乏暮しで御座いますから、お客様も致しません。何うにも仕様が御座いませんよ。月給は僅かですし……サーシニカは十二留^{ループル}とります。上げて下さる御約束ですが、とてもそれでは足りません。けれどもサーシニカは佛様で御座いますよ。私のやうなお婆さんを養つて呉れて……若いので御座いますから、お友達と散歩に位は行きたいんでせうが……身體も健康な方では御座いません。まア、何うにか暮して居ります。餓死しないのが何よりで御座

いますよ。」

老婆はチーシュの顔を睨^{はんや}りと見た。そして恰かも彼が惨^{あじ}めな生活状態を聴くために、ルイスコフの家でも訪問したやうに、様々な事を話した。チーシュは聴いてゐるのが辛^{つら}かつた。そして彼等の貧窮の罪が自分にでもあるやうに間が悪かつた。ルイスコフは頂^{うた}垂^たれたまゝ、洋机の處に腰掛けてゐて、客の方は見もしなかつた。

「死んだ彼の父は三十八年の間、お役所に勤めて居りました……冷^{ひん}性^{せう}で御座いましたが、寒い日でも、雨の降る日でも、頭巾で耳を包んで、出掛けて行きました。ほんたうに几帳面な人で御座いましたよ。御役所の方でも知つて下さつて、死んでからも……年金を三留下さいます。」

老婆が此の三留を自慢してゐるのだから、それとも不平を言つてゐるのだから、チーシュには譯が解らなかつた。會計官の生活から見て、三留は實際大金なのであらうか？ 雨の降る日も、嚴寒の日も、頭巾で耳を包んだまゝ、三十八年の間毎日同じ役所へ行き、生涯一つ椅子に腰掛けて、他の運命を夢みる事もなしに、足跡もなく死んで了つた哀れな書記の姿を、彼は眼前にまざくと見るやうな氣がした。滑稽雜誌にでもなければ、こんな人間は何處にもあるまい。擦り切れた會計官の椅子に腰掛けてゐた人間——兎に角人間には人間である——

一の一生には、何となく物怖ろしい所があつた。

『まア、斯うして暮らしてゐますが……近頃は物價が高くなりましてね！ 何處まで行つても、際限がありませんよ……サーシャに何か就職は御座いませぬかね……ひとつお友達にでも奔走して下さいませんか。』

老婆は、再び頭を下げて、返答を待つやうに、ちつとチーシュの顔を見詰めた。チーシュは『奔走してみませう。』と言はうとした。けれども彼は奔走すべき先方が全然ない事を思ひ出した。彼は當惑して、申譯なさうに眼を反らして了つた。そしてさも同情に堪へないやうに肩を縮めた。

突然ルイスコフが彼を自由にして呉れた。

『お母さん！ そんな事を言つては御迷惑ですよ。』彼は眼も上げずに呟いた。

老婆は喫驚したやうに彼の顔を見た。聽てチーシュの方を見て、眼を瞬きながら黙つて了つた。ルイスコフは指先で洋机掛の縁を弄つてゐて、客の方は見なかつた。

怖ろしく自由になつたり、放心したやうに愚圖々々したりしてゐる彼の動作には、何となく腑に落ちない所があつた。洋杖を振りながら大通りを歩いて、不可解な高處から、堪へられないやうに世界を侮蔑してゐるルイスコフとは、全く別人のやうである。何か煩はしい考

へが、彼の頭腦の内部に亂れてゐるのだらう。

彼等は暫く口を噤んでゐた。チーシュは薄い茶を匙で掻き廻して、ぐしやくした檸檬の一片を、何故か注意深く手にとつた。

ルイスコフは漸く心を定めたらしい。彼はさも氣樂さうに身體を動かして微笑つた。そして胸騒ぎに顫へた聲で言つた。

『キリール・デミートリエヴィチ！ 貴方に少々お願ひがあるんですが。』

『何ですか？』

『御覽になつて下さい……私は此處に……その、なに……短篇小説を書いて見たんです……貴方の御意見を聴きたいんですが……暇な時間があるもんですから……此處に……』

彼は斯う言つて、顔を赤らめながら黙り込んだ。チーシュも何故か狼狽へて、矢張り顔を赤くした。併しルイスコフの顔には、チーシュが——止むを得ずではあるが——物優しく返事をしたほど、羞恥や恐怖や希望や哀願やの情が浮んでゐたのである。

『何うして……私は喜んで……たゞ私には批評は出来ませんがね。』

ルイスコフは急に元氣づいて、両手を振り動かした。

『いえ、何を仰有るんです！ 貴方は讀書家ですし、それに大學生ぢやありませんか。見て

頂くやうな方が誰もいないんです……此處で同僚に読んで聽かせましたが、その男は非常に気に入つたと言つてゐましたよ。」

ルイスコフは暫く氣息を休めた。けれどもチーシュの顔を見て、此の小さな大學生が會計官などの稱讚などには心も止めてゐないのを知ると、早口に言葉を續けていつた。

「私は子供の時分から斯ういふ趣味がありました……その後、暇な時間はありましたけれど……私は貴方が……」

「では、見せて下さい。讀みますから……」チーシュは承諾した。

ルイスコフは更に顔を赤らめた。彼は急所々々を強めるために、自分で朗讀して見たかつたのである。彼は斯ういふ機會を待つてゐたのだ。そのうへ彼の頭腦には、チーシュが此の小説を剽竊するかも知れないといふ愚かしい考へが閃いた。

「直ぐ讀んで下さいますか？ 赦して下さい……私は自分で讀みます……私の原稿は餘り綺麗な方ぢやないんですよ……どうも役所にゐては、清書する時間がありませんからね。」

「結構ですとも。」逃げるにも當るまいと思つて、チーシュは承諾した。

ルイスコフは急に身體を揺ぶつて、背廣服の釦を外づした。そして何時も持ち歩いてゐる自分の小説を懐中から取り出した。それは表装に白い込物のついてゐる、學校用の、水色の、

薄い手帳だつた。

チーシュは手帳を見た。そして何故か羞かしくなつた。

「では讀んでも構ひませんか？」まだチーシュの承諾を信じないやうに、ルイスコフは斯う言つて溜息を吐いた。

「どうぞ！」

ルイスコフは洋燈を近づけ、洋机掛の皺を延ばして、額へた指先で手帳を擴げた。彼は幾度か唾液を飲み込んだが、聽て切れぬな聲で讀み始めた。

「戀——アレクサンドル・ルイスコフ作」

小さな大學生は視線を落した。そして彼が讀み終るまでは、もう上を向かなかつた。

ルイスコフは激しく胸を騒がした。彼の聲は躍り、唇は干乾びて、顔には汗や赤い斑點が浮んできた。霧のやうなものが眼を曇らせて、彼は朗讀するのが困難なのであらう。始終まごまごしては、手を振つて、故意の不注意を偶然の不注意に思はせようとした。

「此處はまだ訂正してありませんでした。」

彼は斯ういふ小説を讀み上げた。——得も言はれぬほど氣高い青年があつた。彼は貧しい會計官だつた。彼の額は眞白で、栗色の柔かい髪が垂れ下つてゐた。彼は某伯爵家の令嬢に

戀した。當時令嬢は何故か田舎の街に目を送つてゐた。氣高い青年は偶然彼女に逢つて、魅力のある容貌と高潔なる精神とで彼女の心を奪つて了つた。そして令嬢の奢侈生活や、彼女を取巻いてゐる貴族達の凡庸を、喰ひ入るやうな諷刺で攻撃した。チーシュはかなり狼狽したが、それが街の著名な人々——署長や會計長やアルブローフ——である事は、苦もなく推察する事が出来た。

伯爵令嬢は我が主人公に戀さうとした。けれども深淵は二人の仲を裂いて了つた。此の美しい青年の抱擁に身を委せれば、どれほどの幸福が彼女を待つてゐるか——令嬢にはそれが解らなかつたのである。そしてH老公爵との結婚を選んて了つた。

或る日の事である。青年は伯爵家から晩餐の招待を受けた。彼は如何なる意味の招待か知らなかつた。然るに食後、伯爵は令嬢の婚約を發表した。美貌と白衣に照り輝く令嬢は、我が主人公の方へは眼も呉れないで、自分の婚約者の唇に接吻した。青年の胸は堪へ難い屈辱と悲痛の情に塞つた。彼の心臓は堪へられなくなつて遂に破裂して了つた。如何ほど偉大なる人物の傍を自分達は通つてゐたか——彼等一同は此の時になつて漸く知つたのだ。令嬢は悔悟の涙を流しながら、哀れなる青年の屍の上に泣き崩れて、たつた一度の、そしてこれが最後の接吻を與へた……作者が主人公を蘇生させたいばかりの、そして作者が實際涙

に潤んだ眼を瞬いたばかりの接吻を與へたのだ。

物語は青年の墓に間もなく數株の枝垂柳が生えて、喪服を著けた見馴れぬ美しい婦人が、其處に草花を携へて來ては、得らるべくして、得られなかつた幸福に涙を流すといふ事で終つてゐた。

『けれども枝垂柳は悲しい唄を彼女の耳に囁いてゐた……』ルイスコフは、顫へ聲で斯う讀み終へて、恰かも逃れ得たやうに黙り込んで了つた。

チーシュは激く羞かしかつた。

彼は自分の頬が火照つてゐるのを感じて、物語が終りに近づいて行くのを恐怖の中に意識した。ルイスコフの聲が顫へてゐる事や、何にも見えこそしないが、彼が緊張した眼で見詰めてゐる事や、干乾びた唇を痙攣的に舐つてゐる事で、小さな大學生は、此の小説が會計官の一身にとつて重大なる物であり、一生涯の度量であり、生活の破産か勝利かといふ大問題である事を知つた。明かに彼の胸は、恐怖と羞恥と驕傲と希望に充たされてゐる。彼を得意にさせるのも、落膽させて了ふのも、自分の一言で十分だ。

此の物語が心臓の血で書かれた事や、哀れな會計官の生活には、過去にも未來にもあり得べからざる果敢ない幻想に充たされてゐる事は明かである。惨めな會計官の椅子にあつて、

小額の領收證や田舎坊主の貯金帳などを取扱ひながら、祕かに華やかな生活や、詩的な戀愛や、輝くやうな幸福の幻影を描いてゐるのは彼自身なのだ。

人間の靈のこれほど眞實な緊張から、斯うまで愚劣な作品が生じたかと思ふと、チーシュは不思議で堪らなかつた。どんな事があるにしても、彼の靈は痛み苦しみ、會計官生活の悲劇から逃れて、力強い緊張の中に祕密の幻想を編み出したのだ……感激や苦痛と共に紙の上に注がれたのだ。而かも其の悲劇はどれほど貧弱な愚劣な物だつたらう。

小さな大學生は、何とか言はなければなるまいと思つた。沈黙の刻一刻がルイスコフの胸を惱まし、事態を益々錯雜ならしめるのを識つた。けれども頭脳には何にも浮んで來なかつた。

『莫迦らしい！』たゞ腦髓の中ではこんな考へが旋轉してゐた。

彼はルイスコフが怖ろしく緊張しながら、恐怖と希望に呆然として、自分の返答を待ち置けてゐるのに氣がついた。自分の一言には、ルイスコフの一生よりも大きな意義があるのだらう。彼には罵倒を加へるだけの勇氣がなかつた。

彼は無意識に原稿を掴んで、表題の所を読み返した……彼は何か思ひつくまで時を延ばしたかつた。チーシュは二三ヶ處読み返す必要があるやうな顔をして、巻頭と巻尾に眼を通し

た。次には中程の處を見て、再び終りのページをめくつた。併し何にも考へは浮んで來なかつた……もう時を延ばす事は出來ない。なほ暫くはページの上を愚圖々々辿つてゐたが、三度最後の頁を読み返すと、小さな大學生は身體中に汗をかいて、硝子でも置くやうに、原稿を注意深く手放した。そしてルイスコフの方も見ずに、巻煙草を喫ひ始めた。

彼は頬骨の上に赤い斑點の浮んだルイスコフの蒼白い顔や、薄い頭髪の粘りついてゐる汗だらけな額を横の方に見た。

小さな大學生が原稿を読み返してゐる間、ルイスコフの胸は、恐怖や羞恥や驕傲や希望や綱望や——人間の胸が意識し得べき有らゆる感情を経験してゐた。最初原稿を朗讀し終へた時、彼は取返しつかない醜態を演じたやうな氣になつた……自分の小説が嘔氣を催すほど愚劣な物に思はれた。併し偉大なる人物を取扱つた小説である事を、チーシュが直ぐに理解するのは明かである。また作中の氣高い主人公が自分である事を理解して、非常なる敬意を自分に拂ふ事も明かである。彼の頭脳には、動搖し感激したチーシュが彼の方を向いて、『これは貴方の事なんですか？』とか『ほんたうに貴方が書いたんですか？』とかいふ言葉さへ浮んで來た。斯う言つて、小さな大學生——ほんたうに自分を理解し、自分を評價し得べき此の敏感な青年は、屹度自分の手を握るに違ひない。併し自分は頭を振つて、慎ましやかに微

笑を洩らさう。

四二

『さうですか、お解りでしたか。私の生活にはどれほど寂寥と苦痛が多いでせう。併し我々（勿論我々偉大なる人物とは言ふまい）は賞讃や報酬を期待してはいけません。』

驕傲と幸福のあまり、ルイスコフの心臓は破裂しないばかりだつた。

併しチーシュは眼を止めて、一つ處を繰り返し／＼読んでゐる。勿論彼は感動して、驚異の眼を見張つてゐるのだ……と、先きを読み出した……感動したのなら、何うして先きが読めるだらう？ それでは感動しなかつたのだらうか？ ルイスコフの胸は萎れて、額には冷たい汗が溜つた。彼は遠火で炙られてゐるやうな気がした。そして彼の心は極端な感激と絶望との間を、宛ら分銅のやうに揺れ動いてゐた。

『さう……』チーシュは不得要領に言つた。

彼の聲を耳にすると、ルイスコフは身震ひして、知覺を失つたやうに呆然とした。併し呆然としながらも、怖ろしい緊張の中に、チーシュの言葉を待つてゐた。靈も肉體も彼の言葉や表情を脱すまいとして、迎へるやうに延び上つて來た。併しチーシュは口を利かなかつた。

『い……い……い……いかゞですか？』ルイスコフは狼狽へながら、強張つた舌を動かした。そし

て全く自分にも思ひがけない程すら／＼と言ひ加へた。『勿論これはつまらない物です。言はば試作なんです……貴方の御意見を伺ひたいんですが。』

彼は冷靜を装はうと努めた。併し生か死かの賭物が動いてゐるやうに、彼の顔には斑點が燃えてゐた。小さな大學生は巻煙草を詰めて、信じ難い程の力を奮ひながら言つた。

『解つてゐるでせうが……勿論、此處らは、その……』

ルイスコフの心はヴァイオリンの絃のやうに張つた——少しでも不注意に觸れたら直ぐに切れて了ひさうである。

『例へば……主人公が散歩の途中で伯爵令嬢に逢ふ處などは……概していゝですが……』

ルイスコフは激しく頭を振つた。彼の胸には判然と其處の文章が浮んで來た。勿論作中の白眉だと思つてゐた處なのである。

『要するに貧弱な小説です。』他に言葉もなかつたので、小さな大學生は突然に言つた。

ルイスコフの眼前では有らゆる物が旋動し始めた。全身の血液は彼の顔面に進つた。彼は冷たい深淵の中へでも飛び込んだやうな氣持がした。

『作家になるには、第一に文學的教養のある人とならなければなりませんよ。』チーシュの聲が何處か遠くの方に聞えた。『恐らく貴方は碌に本も讀まないいでせう。往來のロマンス以

外には何にも知らないのなら、その通りにお書きなさいな。伯爵令嬢は何です？ 作家は自分の知った範圍の事を書いておればいゝんです。貴方は、上流社會の人を一人として親しく見た事はありませんまい。』

ルイスコフの黄色い長い顔は灰白色で蔽はれた。小さな大學生は物優しく話さうと努めたのであるが、會計官は何もかも覺つて了つた。彼の小説には何等の價值もないのだ。彼には何等の才能もないのだ。彼は作家となる事も出来ずに、今迄通り貧しい生活を送つて、哀れな書記のまゝ死ななければならぬのである。有らゆる幻影は滅して了つた。彼は今日まで此の幻影のために生きてゐたのだ。幻影の後方には事實の蒼ざめた顔が現れた。網壁の端に辛くも支へられてゐた岩石のやうなルイスコフは、その晩から身體を自由にして、下へ下へと不可抗的に轉げていつた。

彼にはチーシュの言つてゐる事が餘りよく解らなかつた。併しあれほど得意になつて小説を持ち歩いてゐたことも、自分達の中に大文豪があるのにも氣がつかないでゐる周圍の人々を、あれほど侮蔑的に見てゐた事も、全く夢に過ぎなかつたのだ。どれほどの熱望や思索や構成を経験したらう。みんな徒勞だつたのだ。愚かしい努力だつたのだ。笑ふべき仕事だつたのだ。

ルイスコフは最後の力を奮つて、何物かを掴みながら、怯々と低い聲で訊いた。

『併し貴方は此處をお褒めになつたぢやありませんか。』

チーシュは顔を赤らめた。彼は自分が先刻小心であつた事を羞かしく思つた。そして自分とても不幸な人間である事や、自分の生活が極端なものである事や、今日は酷く侮辱せられたのである事を想ひ起した。

まア、それはお愛想ですよ。』彼は復讐でもするやうに鋭い聲で言つた。『正直に言へば其處だつて他所同様に愚劣です……天分は誰にでもある譯ぢやありません……そんな道樂はお止めになさい！』

ルイスコフは頂垂れた。

小さな大學生は不可解な苛立ちを覺えて、原稿を引摺んだ。彼は容赦もなく原稿を剥ぎとつて、嘲弄と思はれるばかりに、其の貧弱さ加減を説明しながら、部分々々の文章を聲高に読み上げ出した。

ルイスコフは、小さな大學生に自分の胸を剥ぎ取られるやうな氣がした。彼は長い黄色い顔を俯向かして、一言も解らずに、たゞ黙然と聽いてゐた。彼は總てが愚である事を、今となつて初めて理解したのである。自分の小説の一語々々は、頬打ちでもされるやうに自分の

顔を突いた。彼はたゞ身震ひしながら、低く頂垂れてゐた。

併し小さな大學生はもう夢中だつた。彼はルイスコフの原稿を投げ出して、文學の話をはじめた。そしてこれを話すのに熱情と感激とを以てした。

「ねえ、君！ 才能——何といふ力だらう！ 何といふ美だらう！」彼は斯う叫んだが、不圖ルイスコフの様子が變なのに心づいた。

小さな大學生は手振りを止めて、ちつと會計官の顔を見詰めた。

毛髪の長い、吹出物だらけな、色の褪せた、彼の長い顔は愈々頂垂れて來た。執拗く下を見詰めてゐる彼の眼には、怖ろしい絶望に似たものが潜んでゐた。兩手は痙攣的に洋机掛を引摺んでゐた……恰かも何物かを掴まうとするやうに。

「莫迦らしい！ 何をそんなに悲しんでゐるんです？」チーシュは狼狽へながら言つた。「全體貴方は眞面目に考へてみたんですか……誰でも作家になれる譯のものぢやない……まるで他に仕事がないやうだ。文學を除いても、面白い仕事は幾らでもあります。生活は様々です。人間は自分の好きな生活を送つてゆけばいい。失望する事はありません……ほんたうに可笑しい……若し私が知つてゐたら……」

ルイスコフは灰色の顔を上げて、さも落著きはらつてゐるやうに、チーシュの方を朦りと

見た。そして言つた。

「私にとつて……どんな生活があります？」

小さな大學生は再び狼狽した。彼は初めて見るやうに、ルイスコフの顔を凝視して、餘り吹出物の多いのに驚かされた。そして實際、生の意義とか美とかいふ文字を用ふべき場所でない事を識つた。ルイスコフ一家にとつて、どんな美があるだらう？ どんな意義があるだらう？ 英傑にとつては社會のために死ぬのも愉快だらう。何故なれば、英雄的な死の中には幸福がある。併し土壤を肥やすために死んで了へると、人間に向つて言ひ得る人があらうか？ 兎に角社會から見れば、數百萬の平凡な無能な人間も、英傑同様に必要なものである。哀れな愚鈍な無意義な人間がなかつたら、美といふものは此の世界に存在すまい。英雄や先導者は彼等の屍を煉瓦として、宏大なる建物を築き上げるのだ。自分といふ肥料の上に、赫たる人物の偉業を開花せしむるため、彼等は腐敗すべき運命を有つてゐるのではあるまいか。肥料となるために生れた人間はどれほど多い事だらう。彼等はどんな報酬を受けこゝる？ さうだ。これは事實だ——生は偉大であり、美麗であるが、決してルイスコフ一族の爲めにあるのではない。

彼は羞恥と憐憫の眼でルイスコフの顔を見詰めて、側面から其處に自分自身の姿を見出し

た……何故か餓死する事を厭うて、意義も歡喜もなく、推糞の上に蠢いてゐる、天分のない、平凡な、餓ゑ凍えた、小さな大學生の姿を見出したのである。彼の胸には惡寒が走つた。彼は呆然として口を噤んで了つた。

ルイスコフも口を噤んで、執拗く洋机掛を見詰めてゐた。水色の手帳は開かれたまゝ、彼の眼前に横はつてゐた。

『何の爲めだ？』小さな大學生は苦しさに考へた。『才能は貴い、先導者は力強い、チクン族の戦闘は偉大である。併し我々小人は美なる者に、強力なる者に、才能ある者にならうと焦つてゐる。誰が我々の間に選擇を行つたのだ？誰が自分やルイスコフを偉業の礎にする權利を有つてゐるのだ？莫迦らしい運命だといふのか？我々は運命を望まない！』

小さな大學生は喉を締めつけられるやうに息苦しくなつた。突然靜寂の中に怯々した聲が響いた。

『サーシニカの小説は餘程高く賣れますかね？』

チーシユは身震ひして、周圍を見廻した。魚のやうに暗い無心な眼をした黄色い長い顔が彼女を眞面に見詰めてゐた。

彼女は何にも知らないのだ。ルイスコフが朗讀した時、彼女はたゞ自分のサーシニカが、これほど量のある物を書いた事に感動して了つた。そしてチーシユが批評を加へた時にはチーシユの言葉が自分のサーシニカにとつて、有利であるか、不利であるかといふ事はかり考へてゐた。

チーシユは恐怖と當惑の眼で彼女の顔を見詰めた。彼女の眼はチーシユを威嚇した。息子の手記や幻想は、みんな自分の事や、自分の周圍に起つた事である。併し舞臺は主要な人物や祕密や悲劇と共に、彼女から果しなく隔つてゐるものだつた……彼女とても人間である。

此處に激く不合理な事があつた。人類によつて造られた、宇宙と理性との間の有らゆる調停に、こんな哀れな人間一個の存在が、死の宣告を與へてゐる事だ。チーシユの脳髓の内部では、何物かが物靜かに動搖した。けれどもまだ其の運動を突き止めないうちに、たゞ魚のやうな暗い眼を前にした本能的な恐怖を覺えて、小さな大學生は自分の席から荒々しく立ち上つて了つた。

ルイスコフも徐ろに立ち上つた。

五

宅地は墓の中のやうに眞暗だつた。雨は今方やんで、濕つぽい風が烈しく吹いてゐた。け

れども烈風がチーシュを襲うてゐる事や、外套の裾を吹き捲つてゐる事や、冷たい雫を顔に吹きつけてゐる事や、街角の泥濘ぬかるみの方へ吹き飛ばさうとしてゐる事は分らない。二三歩先きは何にも見えなかつた。遠く警察署のあたりには街燈が寂しく光つて、僅かに人の眼を眩くらましてゐた。家屋も闇の中では白色に見える。両側には樹木の巨大な幻影が眞黒に聳えて、毛深い腕を物狂ほしく振り廻してゐた。それは、暗闇くらやみの中を歩いて行く小さな大學生の上に蔽おほひ被かさつて来るやうで、彼の頭上で威嚇するやうに動揺しては、胸を壓しつけるやうに騒さわめていてゐた。また姿の見えぬ男が屋根の上を駆け廻つてゐるやうに、亜鉛板とんぱんは物怖ろしい響きを立てゝゐる。

街は見えなかつた。眼前には祭壇の黒幕が張り詰めてあるやうで、時々は盲目めくらになつたやうな氣持さへした。四邊よこには生の幻影すら見えなかつた。息苦しい部屋々々の天井や壁の蔭に、物怖ろしい烈風の暗夜から隠れて、有らゆる處に人間が睡眠を食つてゐるのかと思ふと不思議である。

チーシュは家へ歸りながら、眞黒な地球の表面にたつた一人取り残されたやうな氣がした。そして永遠に固定せられた不動體の上を歩いてゐるのではなくて、無限の空間と暗黒の方へ非常な速度で物狂ほしく進んで行く極めて不安定な物の上うへにゐることを初めて判然はつぜんと意識

する事が出来た。

『兎に角……地球の上うへにゐるのは怖ろしい！』烈風の中で滑つる々した泥濘に倒れまいとしながら、彼は何故かこんな事を考へた。

不圖彼は今朝の新聞で英國皇帝の戴冠式の記事を読んだ事を思ひ出した。

四邊は風と雨と泥濘ばかりで、足の下は土塊である。空には果しない闇が懸つて……何となく怖ろしい。遙か空の彼方では何物かが激動して、暗闇の中で嚴かに仕事を續けてゐるのだ。それ故に、存在してゐるのは小さな灯の一點——多寡の知れた果敢ない土塊ばかりであつて、太陽が何處かに輝いてゐようなどとは思ひもつかない。其處には人形芝居の舞臺のやうに、皇帝や、皇后や、貴族院議員や、衆議院議員や、印度王や、濠洲やニュージランドや加奈陀や亞弗利加植民地の統治者の小さな姿が現れて来て、寶石を散りばめた金箔の衣裳の、眼にも見えない位の人形が、裾を引き摺り、杖の頭を掲げながら歩いてゐる……人形の小さな顔は瞬間的な莊嚴と品位に充ちてゐる……彼等は其處で重大な事件を實行するのだ、滑稽な冠を爪のやうに被かつた小さな皇帝を、小さな肘掛椅子の上に掛けさせるのだ……玩具のやうな寺院の小さな鐘樓では、玩具の鐘を烈しく撞き鳴らす。大砲を射つ、一人前の人間の積りつみでゐる小人國の群衆が雜鬧する……併し此處の無限の空間では、不可解な運動と永遠

の闇黒が四邊を征服してゐる……小さな皇帝はもう玉座に就いてゐるが、此處は雨と風と泥濘ばかりで、戴冠式とは何等の聯絡もない……地球は空間を廻轉してゐる。そして滑稽な小人國の戴冠式や、暗闇の中を走つてゐる小さな大學生には無關心である。

「戴冠式……大英國の皇帝……ふう、全く莫迦らしい事ばかりだ！」チーシュは不可解な哀傷を覺えて、泥濘に滑り込んだり、帽子を抑へたりしながら、無意識にこんな事を考へた。「要するに莫迦らしいぢやないか！ 自分も莫迦だ……併しそれは問題が違ふ！ それでは何が問題なんだ？ 莫迦らしい！ 兎に角地球の上にあるのは怖ろしい！」

暗闇の中で小さな大學生の眼は、鎧屏のあかるい透間に惹かされた。それは闇のなかで燈火信號のやうに光つてゐた。此の家には騎兵少尉のクラウゼが住んでゐるのだ。チーシュはひよろ長い莫迦の士官が、此の明るい部屋にたつた一人坐りこんで、何事かを思案してゐることと思つた。

チーシュの神経も恐らく今日は餘程昂ぶつてゐたのだらう。顔色の蒼ざめた男が寂しく坐つて、ひとり思案に暮れてゐる事が、チーシュは急に物怖ろしくなつた。彼は黒い肩毛を屹度びくく動かしてゐるだらう。明るい部屋にせよ、暗い部屋にせよ、白い假面を被つた變人は、現在世界の隅々に何百萬人となく坐り込んでゐるのだ。萬人に無關心な謎のやうなもの

のは、假面の透間を覗いてゐる。彼等は何事かを思案してゐるのだが、チーシュにはそれが解らない。此等の謎めいた人間の思案から、極めて微細なものは、文字や言葉となつて、果しなく現れるが、餘は一瞬間も経てば、神祕の國へと永遠に去つて了ふ。

「畜生！」濕つぽい風と物音に充たされた闇の底を、物怖ろしさうに見詰めながら、チーシュは暗闇の中で罵つた。それは闇の中を何處へか走つて行く小さな人間を、八方から取巻いて了つたのである。

六

騎兵少尉クラウゼの宿には、二本の蠟燭が點つてゐた。而かも奇妙な置き方である——今方まで骨牌を戯つてゐたやうに、二本とも骨牌机の兩隅に並んでゐた。

棒のやうに眞直な騎兵少尉は、洋机の傍に坐つてゐた。ナウーモフは部屋のなかを歩いてゐた。頭髮を振り亂した彼の影は、壁の上を忙しげに走つた。彼は始終蠟燭に横腹を向けてゐた。それ故に眼の凄く光つてゐる横顔ばかりしか見えない。それは怖ろしい惡意の表情を彼の面に加へた。

「私には解らない。」騎兵少尉は冷やかに言つた。「貴方自身が生を可能としてゐるのに、何

故他の人間が生きてゐては不可ないんです？ 人生が無意義であるといふ事は、私も貴方と同意見です。併し同じ事だ……それを承認してゐる貴方さへ生きてゐるのであるもの、否定してゐる連中が生きてゐるのに不思議はない！」

「私ですか？ 私は自分の理想が私一個の生命より重大であるから、生きてゐるまでのことですさ。」

「何ですつて？」

「私は自分の理想に支配されてゐると言ふんです。自分の思想を全世界に宣傳するために、有らゆる自分の責任を果して、最後の言葉を口にしなければ、さう容易くは死ねません。單に生が苦痛だとか、自分一人には満足を與へないが、生はその本質に於て幸福の可能に充ちてゐるとか言ふのなら、それは全く別問題ですさ。信じて下さい……私は五分間とそんなことを考へたことはない。人類の大多数は極端な不幸者で、全然自分の生活に満足してゐません。人生がその本質に於て美であると信じればこそ、彼等は生存を持續してゐるんです。自分達は運命の寵を享けてゐないが、生活が幸福に充たされる時も來よう位に思つてゐるんです。何時かはそんな事もありませうさ。要するに銘々が不幸に打ち克つて、社會の仇敵を征服する氣なんです。まア、何等の根據もない愚かな希望のために生きてゐるんです……生

涯苦しみに苦しんで、愚痴を滾して、流血や泥濘の中に沈みながらも、今日は明日はと言ひながら矢張り生きてゐて、結局は極樂といふ事になつて了ふ！」

「さう……そりや事實だ！」自分のために何事かを書き誌すやうに、騎兵少尉は突然煮え切らない聲で言つた。

ナウーモフは彼の嘆聲には注意も向けなくて、部屋隅から部屋隅へ歩を運びながら言葉を續けた。

「恐らく永生や樂園や神に關する幻想の鍵も、明日といふ果しない希望や、早晚來るべき社會改造の愚かな信念の中に隠れてゐるんでせう。早かれ晚かれ死ぬのだとなると、最後の瞬間に於ける自分の希望に逃道を造らなければならぬ。愈々最後の瞬間が來て、地上には一縷の望みもない……明日といふ日は冥府の生活になつて了ふ……そのうへ「日」ではない、永遠です！ 何うで幻想なのだから、思ひ切つた幻想だ！ 「日」が何だ！ 此度は永遠だ！ 社會の改造が何だ！ (要するに虚偽ではないか！) 此度は直接に神だ、樂園だ、永遠の音樂だ！」

ナウーモフは何事かを思ひ浮べたやうに立ち止つた。

「私はだ、いぶ脱線した。何か訊いたんですか？ さうですか！ 若しも生が苦痛であるとい

ふのが問題だつたら、明日といふ甘つたるい希望などは、私の慰藉にはなりませんよ……遺言状も書かなければ、月並な書置なども残さずに、落着きはらつて額を射ち貫くまでの事です。併し私には死ぬ事が出来ない。何故ならば、私は自分の生命を嫌悪してゐるのではなくて、人類の生を憎悪してゐるんです。此の仇敵が生存してゐる間は去る事が出来ない。最後の一息まで戦はなければならぬ。私は絶叫する、壁に頭を打ちつける、人を呼び寄せる、そして突き倒す……」

「突き倒す？」クラウゼは何故か訊き返した。彼は訝かしいほど冷静な顔をしてゐた。

ナウーモフは素早く彼の方を見て立ち止つた。彼の眼付は、騎兵少尉の胸底を突き徹すやうに鋭かつた。併しクラウゼは傲慢な冷静の色を變へなかつた。彼はナウーモフの言葉に毫も興味を覺えないで、何か自分の事を考へてゐるらしい。ナウーモフは長い間ちつと眼を据ゑてゐた。總て暫くすると微かに眼を瞬いて、氣味の悪い微笑を洩らした。彼はクラウゼとの談話の目的を隠す必要もないやうに、臆面もなく微笑つた。

「勿論ですさー」彼は挑むやうな口調で言つた。「私は自分の理想を信じてゐる。残忍に驚かないだけの決斷心を有つてゐる。苦痛に畏縮しながらも「美はしき生よ」と叫ぶ莫迦者を、たとへ一人でも冥府に赴かせるためならば、私の腕は決して頓へない。一人ばかりと言

はれるかも知れないが、私の足は前進する！」

「併し人を殺傷する権利などを、全體誰が貴方に與へたんです？」騎兵少尉は冷やかに訊いた。

「誰が？ 私自身がですさー」全世界をして「呪はしき生よ！」と叫ばしめるためには、これで十分だと信じてゐます。まだ世人のやうに愚かだつた時分には、社會改造の陰謀の中に、自分の信念を血と涙で抑へてゐました。此の理想は、死刑の宣告を待ちながら、要塞に閉ぢこめられてゐた時、初めて漠然と私の頭腦かみねんに浮んで來たのです。それも論理的な結論としてではなく、單に結論の豫感として現れたのです。總てが終つて、明日は絞殺されるんだと識つた時、私は自分が毫も死を怖れてゐないのに氣がついた……それまでは死が非常に怖ろしかつた。併し死が何だ、刑罰が何だ、恐怖が何だ——いづれも重大な問題ではない。そんなら何が重大なんだ？ 私は監房の中を彼方此方歩きながら考へた……私の腦髓が此の時ほど迅速に働いた事はなかつたでせう。私は自分の體内に何か特殊な作用が起つて、身體からだが地面を離れて、透明な軽いものになつて、五官はそれがために極端まで鋭敏さびになつたやうな氣がした。そして今まで何等の注意も拂はなかつた事に、視線を注いだり、耳を傾けたりし始めた。私の眼は有らゆる微細なる物を見て、今日まで自分の視覚から隠れてゐた物を見出しま

した。最初私の眼は窓闌の上に横はつてゐる干乾びた蠅の死骸に惑かされた。恐らく其處には空氣の出入する透間があつたのでせう……蠅の死骸は寝返りを打たうとして、打ち得ないやうに、韻律的に動いてゐました……前の年の落葉のやうに干乾びてゐても、生きた蠅のやうに動いてゐるんです。次には直ぐ隣りの要塞隊の屋根にゐる鴉を見ました……屋根にせよ、白い空にせよ、ほんの一部分しか見えないんですが、私は執拗く見詰めてゐた……滑稽な鳥だ！ 屋根は傾斜してゐるし、雪の中だし、雪は融けかけてゐるのに、大きくばかりあつて無様な鳥だ……飛んで來ては、雪の上に止つて、滑り落ちる……飛んで來ては、攀ち上らうとして、また滑り落ちる……此の大事業を知るのは神ばかりといふやうに、怖ろしく眞面目で、自信ありげなんです。此の時私は蠅の死骸や鴉の中に偉大なるものを見た……鴉を見て何を考へてゐたのだか今では覚えてゐませんが、私の思考は驚くほど深く鋭くなつて、私の生活を全く反對の方面へ向けてきました……私は鴉を見てゐたのですが、私の思想や計畫や推察や沈思は、非常な速度で私の頭腦を粉碎した。脳髓は暗い不明瞭な個所が一點もないほど透明になつて、一分間もあれば有らゆる端緒と結末は判明するやうな氣がした。それが過ぎると、激しい疲労と倦怠が襲うて來ました。その後私はこれ程の昂奮を覺えた事はなかつた。私は床について、不可解な作用で機械的に動いてゐる蠅の死骸や、何うでも攀ち上つ

て見せる氣でゐる愚かな鴉の夢を見ながら、ぐつぐつと寝込んで了つた。そして眼が覺めると、以前の物は悉く消滅して、新たに何物かが生れた事を、自分の全身に感じたのです。私はもう事業や犠牲や革命の成功や勞働階級の勝利などを考へなかつた。私は明日、自分が絞殺されるのだといふ事だけを識つて、これが何うなるといふ事には氣がつかなくなつた。私は此の不合理を知つた。そして世を振り捨て、たつた一人になつた……併し孤獨には憎惡を覺える、嫌惡を覺える……たゞ要塞を出て、街へ通ずる橋の上に立つた時の事は今でも憶えてゐます。私は周圍を見廻した……と、私はたゞ自由に生きてゐるやうな氣がするだけで、實際は死んで了つたのではないかと思つた。何故なれば、今朝私は石鹼の塗られた繩で絞殺されたのです……まるで幻覺のやうですが、私は首に巻かれた縊繩さへは、つきりと感じてゐた。私は大きく眼を見張つて、有らゆるものを見ながら立つてゐた……汽船は河を往復してゐるし、春の空は瑠璃色だし、春草は小島に青々としてゐるし、人間は相變らず白痴のやうな顔をして歩いたり、馬車を驅つたりしてゐるし……別に變つたこともありません……最も私を驚かしたのは、春や太陽や温暖や綠草に、歡喜の表情が見えた事です……彼等は歡喜のあまり微醉してゐるやうだ……私が氣息を引きとつたり、石鹼の塗られた繩輪で縊られたり、死の前の怖ろしい苦悶を経てきたやうな氣色は何處にも見えない……私の死は太陽の光

線の中に散つて、生の歡喜の中に融けて了つた……死んだのは私だけです。私は死んでも、生は過去のまゝに残つてゐるんです。私は思はず身震ひをした。此時の憎惡ばかりは到底表現する事が出来ません。私は人に跳びかゝらない許りだつた。自分の腕に噛みつかないばかりだつた。大地に轉じて、慟哭しないばかりだつた……私は人間を無視してゐる鐵面皮な呪はしい生との戰鬥に、自分の全力を獻げる事を、此處で初めて誓言したんです。」

「で、貴方は戰鬥の勝利を確信してゐるんですか？」クラウゼは冷やかに訊いた。

「いや……私は信じない。併し如何なる思想にせよ、一度人間の腦髓に浮んだら、その思想はもう永遠に消滅しない。一度この世に現れた以上は、最後まで達する譯です。」

クラウゼは彼の顔を見て、妙に眉毛を動かしてゐた。ナウーモフは其處に突立つて、身體を前後に揺りながら、ちつと口を噤んでゐた。狂人のやうに底光りのする彼の眼は蠟燭の炎を見詰めてゐるが、彼には何にも見えないらしい。思ひ出に掻き亂された彼の心は、疑ひもなく頭腦の内部で痙攣的に働いてゐるのだ。彼は急に笑ひ出した。クラウゼは訝かしげに彼の方を見た。

「クラウゼさん！此の理想が私の胸に浮んだ時、私を制したものがたつた一つありますよ……それはもう少し深遠だが、貴方が今お尋ねの……勝利の確信があるかといふ事です。生

の偉大に較べれば、自分如きは取るにも足らぬものだといふ自覺は、私を壓して、私の力を奪つた。私は自分といふものが、烈風に反抗して、吹き飛ばされまいとする砂粒のやうに思はれてならなかつた。烈風と砂粒では餘りに滑稽だ……私は自分のうちに力を見出さなければならなかつた。支柱を見出さなければならなかつた。宇宙や神や……有りと有らゆるものに反抗するために、自分の個性と偉大とを信じなければならなかつた。私は長い間これを見出し得ないで、自分は塵屑に過ぎないといふ自覺に苦しめられてゐました。併しそのうちに自分は塵屑でない、私が下らないのではなくて、私の個性が下らないのだといふ事に氣がついた。そして或る時こんな面白い考へが浮んで來ましたよ。」

クラウゼは眉毛を動かした。併し何にも言ひはしなかつた。

「その前に私はこんな議論を試みた。勿論、萬物は密接な結合状態にあらねばならぬ。若し一ヶ處でも隙間があつたら、それは既に空處である。すべては破壊して了ふ。その時には總てのものが無意義となる。併しすべてが無意義といふ筈はない。若し萬物が無意義なら、無意義といふものは全然なくて、其處にはたゞ調和があるばかりだ……宇宙にゆき渡つた調和があるばかりだ！従つて萬物は連絡して、いづれも從屬の状態にある。私の自由なる靈にせよ、私の意志にせよ、私の思想の幽處にせよ、みな離すべからざる連鎖の一環に過ぎないの

だ。此處に起つた衝撃は時間と空間の端まで反響がなければならぬ。何故なれば一環々々は鎖全體を兩端から引いてゐる……即ち私が呪詛する時、私の呪詛は宇宙の因果律から流れ出たのだ。また祝福する時とても同じ事です。私が額を射貫くとしても、それは不可離の連鎖が私を誘引するので、其處に立つてゐる私には、額を射貫かざるを得ないので。これは最初私を絶望に沈めた。何故なれば私は神の奴隸になつたのではなくて、超自然な自動人形に變形したのだ。此の時私の頭脳には面白い考へが浮んで、非常に私を慰めて呉れました。私は考へた——若しさうだとすると、もう烈風も砂粒も差別がない。私と宇宙、私と神、私と永遠——みんな同じ事だ！ 若し私が宇宙の因果律の離すべからざる連鎖に於ける一環であるとしたら、神や自然は私といふものを創造せざるを得なかつたのです。過失だの嬉戲だのとは言はれまじまい？ それこそ大變だ！ 有らゆる敬意は地に墮ちて了ふ。即ち私が省くべからざる物なら、私が宇宙なしにゐられないと同様に、宇宙も私なしにはゐられない。宇宙と私は、有らゆるその神祕と共に平等である。上下もない、大小もない、砂粒と烈風の差別もない。萬物は平等である。宇宙の法則も私の唾棄も同等である。若し私が唾棄せざるを得ないとしたら、宇宙の法則もまた私の唾棄なしにはゐられないのだ。可笑しな考へでせう？ 實際さうでせう？」

ナウーモフは嘲弄の色を浮べながら訊いた。

「いや、貴方は故意にさう言ふけれど、仲々面白い……」クラウゼは冷やかな聲で傲然と言つた。

ナウーモフは笑ひ出した。

「いや、莫迦らしいですさ！ 此處に何より怖ろしいのは、たとへ無意義であつても、その無意義を認めなければならぬ事です。人間の論理は、明白な莫迦らしさを承認しなければならぬのでせうか？ それでは理智も論理も矢張り無意義なんですな。」

「さうです。」騎兵少尉は言つた。

ナウーモフは黙然と蠟燭の火を見詰めてゐた。

「クラウゼさん！ 貴方も變人ですね。」ナウーモフは急に調子を變へて言つた。

クラウゼは身體を動かした。そして眉毛を釣り上げた。

「私には貴方がよく解らない……貴方は始終考へてゐながら、それを決して口に出しませんね。クラウゼさん！ 私は貴方が何だか不幸の人間のやうに思はれてならない……併し何故だか解りません。顔を見ただけでは、落著きのある冷靜な人間だが。」

「私は大きな頭と小さな胸を有つてゐる。」騎兵少尉クラウゼは突然に言つた。

「え？」ナウーモフは喫驚して訊いた。

六四

「大きな頭と小さな胸ですさ。」此の意味深い言葉を訊き返すナウーモフの言葉に應ずるやうに、騎兵少尉は落著きはらつて繰り返した。「貴方のやうな事を私は始終考へてゐた。ただそれを語りたくないんです……貴方は餘り口が軽すぎますね……私は話す事に興味が無い……嘗ては私もこれを憎みましたが、もう今では何うでもいゝ……無意義ですつて？ 無意義なら無意義でいゝ。有意義と美？ 何うでもいゝですさ。すべての物はそのままでいゝ……私にとつては同じ事だ。一度は私も生に苦しんで、人間の感情から起るすべての苦痛を……私には縁遠い事ですが、貴方はお解りでせう。そこで有らゆる感情を殺して、すべてを冷靜に見ようと決心しました。私は感情を殺して、冷靜を修養し始めた。併し初めは困難でしたよ。すべてが私を昂奮させました……けれども後には無關心になりました。私の頭は成長し始めましたが、胸は段々に狭ままつて行くんです……解つたでせう？ 今では大きな頭ばかりあつて、胸は全くありません。私は何にも感じません……幾らか気が晴れるだらうと思つたのですが、矢張り同じ事ですね……たゞ空虚からいになつただけで、なほさら不快なんです……私はもう死んで了つた筈なのに、まだ矢張り下らなく生きてゐます。」

ナウーモフは底光りのする、興味を起したやうな、貪るやうな眼で、彼の顔を見てゐた。

「クラウゼさん！ 何時かはほんたうに射る氣なんですか？」ナウーモフは残忍な色を浮べながら訊いた。

「そんな事になるでせう。」騎兵少尉は冷やかに答へた。

ナウーモフは彼の顔を見てゐた。そして顔の變化を見逃すまいとするやうに、視線を動かさなかつた。

クラウゼは、ナウーモフに見られてゐるのが不愉快であるらしい。彼は不安げに身體からだを動かして、足と足を重ねた。そしてナウーモフの顔を眞面まへに見詰めた。一分間ばかりは黙然と眉毛を動かしてゐるだけだったが、聽て彼の冷靜な傲慢な顔には、不意に狡猾な嘲弄的なものが閃いた。

「貴方の理想は無意義だ！」彼は間を置いて徐ろに言つた。「貴方は自分の理想を信じてゐない。矢鱈に自愛心ばかり強くて、たゞ自分以外の者が敢て此の理想を抱かないといふ事のために、世界を破滅に導かうとしてゐるんです。」

ナウーモフの顔には痙攣が走つた。クラウゼは矢張り落著きのある聲で言葉を續けた。

「貴方にさう言つてゐれば氣がすむんでせう……他人の斷行しない事をしてゐると思へば氣がすむんでせう……要するに口だけの事だ！」

「さう思ひますか？」ナウーモフは悪意のアイロニイを響かせながら訊いた。

「口ばかりだ……私はさう信じてゐる。若し實行しなければならぬ羽目になつたら、貴方は屹度逡巡して、此の思想を否定するに違ひない。」

「さう思ひますかね？」ナウーモフは瞬きながら繰り返した。

「さうですとも……では、私に自殺が出来るか何うか訊きませう。貴方の眼前で射れるでせうか？」

ナウーモフの顔は曇つた。彼はクラウゼが嘲弄してゐるのではあるまいかと思つた。憎悪は顔へながら燃え上つた。

「實際私は、長い間自殺の事ばかり考へてゐた。」クラウゼは冷やかに言葉を續けた。「今私は貴方に訊くんです……ほんたうに自殺した方がいゝんでせうか？ 私の眼の前で直ぐに答へられますか？ すぐー」

「答へられますとも！」ナウーモフは憎々しく答へた。「立派にお射んなさい！」

「さうですか……よろしい……」クラウゼは言つた。「直ぐに射ります……待つてゐて下さ……」

彼は落着きはらつて、騎兵洋袴ズボンのポケットに手を入れた。そして、片方の足を延ばしながら、

ら、黒い無恰好な連發短銃ピストルを取り出した。ナウーモフは微笑を浮べて、自分の席から動かなかつた。彼はこれが眞劍であるとは思はなかつた。そして、自分が愚かしい位置にある事を識つた。

「クラウゼさん！ 子供みたやうな！」彼は冷靜を装うて言つた。

クラウゼは忽ち眞蒼になつて、頬骨が二つの鋭角を形づくつたほど、激しく齒を喰ひしはつた。不意に起つた憤怒の情は、彼の冷たい眼に閃いた。

「冗談などはしない！」憎悪に燃えた眼をナウーモフの顔から放さずに、彼は嘎れ聲を洩らした。ナウーモフは騎兵少尉が發狂したのではあるまいかと思つた。

彼はクラウゼが冗談をしてゐるのでない事を、突然全身の五官に感じた。悪寒は彼の毛髪の下を走つた。併し彼は強ひて冷靜を装うて、自分の身體を動かさなかつた。

「射りたいならお射んなさい！」彼は挑むやうに言つた。

クラウゼは不可解な憤怒の色を浮べながら、なほ暫く彼の顔を見詰めてゐた。二人は眞面に眼と眼を見合せた。相互の緊張した凝視は、體内の有らゆるものが顫へるばかりの力で融け合つた。

急にクラウゼの眼は曇つた。眉毛は下つた。彼は連發短銃を握り締めた腕を下ろすと、自

分の席から立ち上つて、壁の方へ顔を反向けた。

六八

ナウーモフは矢張り顫へながら、眞蒼な顔をして、彼の一舉一動を鋭い眼で追うた。

『その方がいゝ！』彼は憎々しく言つた。『連發短銃は片付けて、お寝みなさい……もう夜も更けた！ さうです、誰にでも行ふよりは言ふが易いです！』

クラウゼは何とも答へなかつた。そして壁の方を向いたまゝ突立つてゐた。

ナウーモフは意地悪さうに唇を歪めながら待つてゐた。けれども、クラウゼが彼に何等の注意も拂つてゐないのを知ると、肩を縮めながら歸り支度をし始めた。

『もう時間です……左様なら！』彼は言つた。

ナウーモフは外套や帽子や上靴をつけて、扉口の方へ近づいた。そして扉を開けると、闕の上に立ち止つて、一言々に憎々しいほど力を入れながら徐ろに言つた。

『或は貴方が正しいのかも知れない。併し貴方は自殺します……聞いてゐるんですか？ 早かれ晩かれ貴方は短銃自殺を遂げる……貴方はそんな顔です！ 左様なら！ お寝みなさい！』

クラウゼは身動きをした。併し何とも答へなかつた。

ナウーモフは勝ち誇るやうに笑ひながら扉を閉ざした。

從卒が彼を入口階段に送り出して行く物音がする。新鮮な空氣の波は室内に流れ込んだ。蠟燭は揺めきながら燃え上つた。そして黄色い舌を再び力なく延ばし上げた。

七

入口階段の上に出るが早いのか、先刻の黒い物騒しい夜はナウーモフを迎へた。

風は周圍に荒れ狂うて、眼に見えぬ滴を彼の面に吹きつけた。ナウーモフは手探りに入口階段を下つて、暗闇の中に足を急がした。物狂ほしく頭を揺る樹木の幻影の他には何にも見えない。

彼の眼前には眉毛の斜めな白い長い顔が依然として浮き出してゐた。

『莫迦な奴だ！』ナウーモフは不可解な憎惡の中に斯う思つた。

彼の足は機械的に泥濘の中を動いた。風は八方から吹いて來た。けれどもナウーモフはそれに氣がつかなかつた。彼の頭脳は熱して、胸は不安に波うつてゐた。彼はクラウゼ自身さへ冗談を言つてゐるのだから眞面目なのか、あの時には解らなかつたのである事を、今となつて漸く知る事が出來た。それは人間の生命が懸つてゐる髪の毛一筋である。此の髪の毛を断ち切つて、クラウゼを發砲せしむるには、僅か一言か一動——例へばあの時ナウーモフ

が本氣にして、連發短銃を奪ひ取るために躍り掛りさへすれば、もうそれで十分だつたらう。
なほクラウゼが今夜あたり短銃自殺を遂げて了ふ事も、彼の胸には辯駁する餘地のないほど
判然として來た。

『彼奴の顔には死の烙印がある……生れながらの自殺者だ……大きな頭と小さな胸……或
は小さな頭と大きな胸かも知れない。』ナウーモフは斯う思つて、暗闇の中で氣味の悪い微
笑を洩らした。

彼は復讐的な憎惡なしにはクラウゼの事を考へられない事や、自分が彼の今夜の短銃自殺
を望んでゐる事に氣がついた。自分は敢て上げようと思はないのに、クラウゼは眞實の心が
隠れてゐる幕の端を、早くも上げて了つたのだ。さうだ！ その通りだ！ 自分の内部には
二人の人間がゐる。一人は狂信者のやうに自分の理想を信じて、自分の死と滅亡を希望して
ゐる。併し一人はそれを怖れて、憎惡に氣息を詰らしながら、自分の怯懦と絶望から、有ら
ゆる人々に復讐を加へてゐる。愚かなる騎兵少尉が、直ぐにも連發短銃を顛顛に向けようと
した時でさへ、自分は後退りしないばかりだつたではないか。

併しそれも一瞬間で、次の瞬間には襟を高く聳やかし、帽子を眼深くして、ナウーモフは
忙しげに足を運びだした。

彼はたゞ一つの事を望んでゐた。それは假令些細なものであるにせよ、自分の思想と勢力
の勝利だつた。そして若し出来る事なら、自分の熱狂的な思想や無限の自殺者の最初の生贄
として、騎兵少尉の手に連發短銃を與へたかつた。

クラウゼは早晩自殺を遂げる、そしてその罪は全く自分にある——斯う思ふとナウーモフ
の胸には不安な勝利の念が湧いて來た。彼は數百萬人の愚かなる不幸者を見た……如何な
る人物が自分達の間に生れたか、如何に怖るべき人物が闇の中を歩いてゐるか、彼等はそれ
すらまだ知らないのだ。ナウーモフは自分の身體が擴大されて、眠れる地上に陰影の如く延
び上るやうな氣がした。自分が偉大であるといふ感覺は、時々病的と思はれるまで鮮かにな
つた。そして驕傲な憎惡の情と共に物怖ろしくなつてきた。彼は闇を見詰めて、其處に崇高
な幸福な顔をしたものを見た。彼は挑戦と嘲弄の態度でそれに對した。

『貴方は實際私より偉大なのでせうか？』彼は臆面もなく、冷笑しながら訊いた。そして信
仰を有たない自分が神に言葉を掛けてゐる矛盾を感じた。

偉大なる智力が働く、新しい生命を孕む快感の中に美しい女は身を委せる、來るべき時代
の幸福のために數億の荒くれたる腕が働く、驚くべき書物が書かれる、家屋や銅像が建てら
れる……彼は何處かの高處から、夜の闇が群衆に雜沓してゐるのを見てゐるやうな氣がした

……血塗れな人生の車輪は、軋り喚いて地上を荒らしながら、有らゆる運動に向つて突進する。人生は沸騰してゐるのだ。恐らく永遠に斯うなのだらう。併し其處には生に反抗するナウーモフといふ人間がたつた一人闇の中を歩いてゐる。彼は怖ろしい思想を携へてゐる。此の思想ばかりは消滅すまい。また消滅する筈がない。若し美しい女達が彼の胸中を知つたら、自分の聰明な夫が抱擁しようとする時、聲をあげながら逃げ廻つて、夫を殺すために忽ち躍り掛るだらう。

『莫迦な！』ナウーモフは忌々しさうに考へた。『聞いたところで解るものか！ 誇大妄想狂ぐらゐに思つて、論駁したり嘲笑したりしながらも、彼等は來るべき時代まで俺の思想を傳へるのだらう……何時かは此の怖るべき思想も、蒼褪めたる馬の如く身長いつばいに立ち上るのだ！』

闇は眼前に擴がつてゐる。彼の思想の鼓翼は、時代の頭上を越えて遠く暗い未來まで達する。感激した顔や、振り上げた腕や、血液や、涙の蒼白い海が、濃霧の中に朦朧と見える……そして煙れる海の上には、無益な戦闘に苦しむ此の世界に救ひを齎らした偉大なる豫言者の姿が、龍卷のやうに嚴然と立つてゐる……これが彼だ！ ナウーモフだ！

これは殆んど狂氣に近い。若し闇の中でナウーモフの顔を見た人があつたら、恐怖のあま

り彼から顔を反向けつて了つたらう。氣味の悪い微笑に唇の歪められた蒼白い假面の上には、それほど熱狂的な感激や、狂人のやうな驕傲や、打ち克ち難い決意や憎惡の表情が光つてゐた。

街でこそ一流の旅館であるが、ナウーモフの部屋は居心地が悪かつた。廊下には石油洋燈の匂ひがした。門番はもう眠つてゐた。ナウーモフは蠟燭を點して、洋机についた。そして何か書き始めた。

八

ナウーモフの背後に扉の音がして、重々しい靴音が從卒の部屋に消えるまで、クラウゼは身動きもせず突立つてゐた。暫くすると彼は徐ろに室内を見廻した。それは臆病者を戦慄させるに十分な顔だつた。丁度斜めな眉毛を膠付けにした厚紙製の假面のやうで、室内を見廻してゐる生々した眼は、怖ろしい緊張を浮べながら、假面の透間から覗いてゐた。

恰も騎兵少尉クラウゼの假面を被つた未知の男が、主人の留守に秘そり入つて來て、善からぬ事を考へながら、此の異様な部屋の有らゆる微細な物までを、默然と探つてゐるやうに思はれる……雑色の毛氈がある。壁には武器が光つてゐる。部屋隅には神祕的なヴィオロ

ンセロの琴頸が見える。机の上には二本の蠟燭が點つてゐて、今しがた最後の骨牌が終つたやうに思はれる。

騎兵少尉のひよろ長い姿は部屋の中を動いた。周囲は怖ろしいほど靜まり返つてゐた、深い沈黙の底や、夜と孤獨の中や、窓外の單調な雨の私語の下では、何か物怖ろしい儀式が行してゐるらしい。

クラウゼは何かしてゐた。何か置きかへてゐた。眞黒な影を壁の上に伴うて、前後に音もなく身體を動かしてゐた。影法師は彼の動作を見まもつて一つ一つそれを繰り返してゐた。人間は何處かに生活して、笑つたり、話したり、歌つたり、相互に生々した顔を見合したりしてゐるに違ひない。けれども此處では深い沈黙の底で、胸の奥にでも潜んでゐるやうに、騎兵少尉クラウゼがたつた一人考へに沈んでゐるのだ。

此の時彼の事を思ひ起した人は、全世界に一人としてなかつた。併し彼は有らゆる人々の事を考へてゐた。

ある實驗を試みながら、ある眞理を發見する目的で、解剖用の標品を切り裂くやうに、クラウゼは個々の人間を冷酷に想ひ浮べて、彼等の顔をぢつと見詰めた。併し彼の胸に華やかな火花を起させるやうな物は何にもなかつた。胸の内部は氷の墓のやうに冷たくて、空虚であ

る。

これと同時にクラウゼは、自分の胸が實際小さくて、頭ばかり大きい事を判然と意識した。それは餘りに大きいので、空内を充たし、壁や天井を壓し、蠟燭を消し、氣息を喘ませ、部屋境を越えて……異様な頭は内部の光りに燃えながら、荒廢した眞暗な地面の上に立つてゐる。立つたまゝ見詰めてゐる。

死人のやうな物怖ろしい眼は徐ろに振り返る。それに見詰められたものは、皆な氣息を引きとつて、死灰になつて了ふ。

此の世に存在してゐるのは、騎兵少尉クラウゼの巨大な頭ばかりで、他には何ひとつない。此の頭が眼を閉ざしさへすれば、有らゆるものは消失して了ふだらう。

此の不可思議な悪夢は二三分間も續いた。クラウゼは部屋の眞中に突立つたまゝ、ぢつと口を噤んでゐた。聽て彼は靜かに身體を動かした。

窓外では雨が烈しく物音を立てゝゐる。騎兵少尉はヴィオロンセロを取つて、部屋の眞中に椅子を引き出した。そして其處に腰を掛けると、徐ろに彈奏し始めた。

ヴィオロンセロは暫く嚴かな單調な響きを立てゝゐた。從卒は臺所で眼を覺ましたが、また主人が氣紛れをやり出した位に思つただけだつた。雨は噤いてゐる。絶間ないその物音

と、單調なヴァイオリンセロの響きとの間には、何處となく共通に思はれる所があつた。

クラウゼは自分一人に見える一點から眼を放さずに、ちつと部屋隅を見詰めてゐた。斜めな眉毛は動かかなかつた。長い顔は假面のやうだつた。胸の中は空虚である。他の不可解な顔——死の面に部屋隅から見詰められてゐると思はれるほど、顔が不動で、眼が凝結してゐるのも、全くそれが爲めだらう。

ヴァイオリンセロは鳴る。雨は物音を立てる。二つの響きは間延びのした怖ろしい音調の中に融け合つた。此の嚴かな響きを聽いてゐると怖ろしくなる。

ヴァイオリンセロは止んだ。クラウゼはそれと同時に立ち上つて、樂器を部屋隅にきちんと置いた。廳で洋机の蠟燭を吹き消して、寢室の寢臺の傍に一本を點した。黒い影は眞暗な部屋から寢室に忍び込んで、彼の背後の寢臺の上に蟠つた。クラウゼは着物を脱ぎ始めた。

彼は長靴を脱ぎながら、暫くは身動きもせず、蠟燭の火を見詰めてゐた。黄色い炎は煌々燃えてゐたが、廳で揺れ始めて、オレンジ色の明るい環と變つた。クラウゼは部屋隅の釘に懸つてゐる灰色の長い外套に眼を移した。灰色の外套は動かかなかつた。けれども彼の眼が其處に集中されると、灰色の長いものは急に揺れ動いて、縮んだり擴がつたりし始めた……クラウゼは顔を反向け横になつた。そして一分間ばかりは寢轉んだまゝ、當惑したや

うに眉毛を動かしてゐた。廳で彼は蠟燭を消した。

闇は忽ち訪れて来て眉毛の斜めな長い顔は隠れて了つた。總てのものは見えなくなつた。雨の物音が闇の中に物凄く聞えてくる。丁度窓際へ突然近づいて来て、地下の祕密を執拗く耳もとで囁いてゐるやうだ。物怖ろしい影が室内を動く。みんな死人の影だ……彼等は氣遣はしげに闇の中を歩いて、何事かを行つては、集つたり、離れたり、騎兵少尉クラウゼの方へ近づいたり、彼に凭り掛つたり、彼から遠ざかつたりする。クラウゼの處から見える三方の部屋隅には、天井に達するばかりの眞黒な影が、身動きもせず突立つてゐた。

クラウゼは眼を見開いた。眼前の眞黒な闇の中には、見憶えのある顔が揺めいてゐる。彼はちつとそれを見詰めた。

彼等は生きてゐる、生活してゐる、苦しんだり楽しんだりしてゐる……彼等は生きて人間だ！併し生きた人間とは何を意味するのだ？彼等は太陽を眺めて、その明るい恵みに浴してゐる積りなのだ。思想を抱き、相互に愛し合つて、様々な事を行つてゐる積りなのだ……併しそれは彼等が時の中にあるがためだ。時の外には思想も感覺もない。彼等は永遠といふ事を理解してゐない。永遠とは空虚と闇黒の事だ！時は心臓の鼓動に過ぎない。心臓の鼓動を止めれば、時は直ちに消滅して、其處には永遠が訪れる。永遠が伴ふものは絶対の空

虚だ。時がなくなれば……何にもない。

騎兵少尉クラウゼの前の暗闇には、明るいものが光つてゐる。何かの影が朦朧と動いてゐる。誰かが部屋隅に突立つてゐる……併し實際は何にもないのだ。こんな謎めいたものが此の世にあり得る筈はない。みんな網膜の閃きに過ぎないのだ。何かの音や、私語や、悲しい音調に延びてゆく長い響きが聞える……併し何にも音はしてゐないのだ。それは騎兵少尉クラウゼ自身の鼓膜神経の顫動に過ぎない。これに反して、宇宙は絶間ない音響の嵐に充たされてゐるのだらう。想像もつかない力と響きを有する星群は空間を突き破つてゆく……併し騎兵少尉クラウゼにはそれが聞えない。此後とても聞えまい。何故なれば、定数以上や以下の震動を感じないのだ……彼の心臓は鼓動してゐる。此處に時がある。オルガニズムは脈搏によつてそれを計つてゐる……併しそれを止める事も出来る。

『その事は前にもう考へた！』

騎兵少尉クラウゼは悲しげに身動きした。

騎兵少尉クラウゼの巨大な頭脳は此處にある。その内部に悶えてゐるのは、巨大なる頭脳そのものの理性だ……彼の不幸や苦悶は此處にある。此の理性を奪つて見ろ！クラウゼは現實の世界を離れて、自分一人に見える幻想の世界へ飛び去つて了ふだらう。宇宙は有らゆ

るその偉大を以てしても、彼の心を奪ふ事は不可能である。併しクラウゼの理性は巨大なる頭脳の理性に過ぎない。これは巨大なる頭の脳髓容器の構造組織だ。時にはその容器が弛んだり、時には支持されたり、時には閉塞されたりする。併しこれは他の理性だ。全世界が現實とは思はれない。賢人と愚人の境界も、正氣の者と狂人の境界も消えて了ふ。騎兵少尉クラウゼは賢人であると同時に愚人であるらしい。これは誰にとつても不可解である。何故なればこんな事はあり得ないからだ。理性も痴愚もない。たゞ脳髓の構成組織ばかりだ。此の構成組織が、それを有する人間にとつては總ての法則である。若し世界が或る根據からクラウゼを白痴であるとするならば、クラウゼは彼等の脳髓容器が其の構造を異にするが爲めだと答へるだらう。彼等の容器に置かれたものが、彼等にとつて道理ならば、自分のみが有して、他人に缺けてゐる容器は何故不道理なのだ？ 即ち其處に眞理が存在すると言ふのか？ それならば彼等の脳髓容器には整然と置かれてあるが、自分には過不足があるといふだけの理由で、彼等の有らゆる論理や、彼等の整然たる論法や、自分を白痴とする實證は、論駁の餘地がないやうに見えるのだ。彼等に同意し、クラウゼを白痴の如くに見る者のあるのも、彼等の論理に論駁の餘地がないのではなく、聽者の脳髓容器が彼等と同様で、彼等の論法に共鳴を起すからだ。さうすれば彼等にも理性はない。それはナウーモフが言ふやう

に無意義なものだ。一分間でも一秒間でもよいから、それを眞實として見ろ！ 總ては塵埃のやうに吹き飛ばされて了ふ。少しでも疑點の存するものは、既に眞理ではなくて、一つの疑惑に過ぎない。併し誰に此の解答を求めたらいふのだ？

クラウゼは、再び身動きをした。思想は怖ろしい速度で彼の頭腦の内部に廻轉してゐた。それは恰かも腦髓ではなくて、赤熱された圓球のやうに思はれる。

再び見憶えのある顔が闇の中から現れて來た。そして、忿怒も同情もなしに騎兵少尉クラウゼの顔を冷然と見詰めてゐる。

彼等は生存してゐる積りだが、全く存在してはゐないのだ。永遠には量度がない。たゞ量度さるべきものがあるばかりだ。永遠や無極は時間や空間さへ浸蝕してゆく……此の眞黒な深淵の中には何物もない。怖ろしい謎はあつても、それは人間にとつて永久に不可解なものである。何故なれば人間が見たり聽いたり感じたり考へたりする總ては、彼等の機關が作用する結果に他ならぬ。どれほどの機關と能力があるだらう……犬には犬の機關がある。犬から見れば世界は別のものだ……樹木も薔薇色に見えるだらう。音響も走りゆく狼の如くに思はれるだらう。永遠と無極の他には何物もない。而かも人間が住むべく指定された場所はないのだ。

それ故に何も必要とする物はない。太陽も人間も理性も戀愛も要らない……總ては自身だ。總ては自分と一緒に現れたり消えたりする。

地球の運命に苦しむ事はない。防禦するにも破壊するにも當らない。破壊や創造は自分の世界を破壊したり創造したりするので、併し此の偉大な永遠の世界だけは別物である。

人間？ 人道？ それは何だ！

憎い人や戀しい人達の姿が眼前を通る……けれども騎兵少尉クラウゼはもう愛も憎悪も感じなかつた。あの少女の姿が……彼は誰よりも此の少女を愛して、彼の胸の一部は彼女に對する愛情のために引き裂かれた。愛の惱みに氣息を止めながら、春の花園に少女を待つてゐた事もあつた。彼女の一舉一動は涙の出るほど懐しかつた。彼女の着物の襷の一つ一つが純と美だつた……併し彼女は死んで了つて、愛情は跡方もなく消えた。彼女は新しい太陽を造らなかつた。世の中を照らさなかつた……彼女の足跡は騎兵少尉クラウゼの胸に残した小さな傷痕ばかりだつた。戀は何だ？ 戀に對しては感激がなければならぬ。併し一人の人間の胸に受けた小さな傷痕は、感激さへも喚び起さない。

騎兵少尉クラウゼが嫌惡してゐた人間もあつた。併し彼等が姿を隠すと、憎惡の情も空氣の中に消えて了つた。容易く忘れ得るものを、我々は何故憎み苦しめようとするのだ？

死！闇の中から眞黒な墓が現れて来る。これを假りに騎兵少尉クラウゼの墓とする……頭ばかり大きくて、餘りに胸の小さいのを苦にして、短銃自殺を遂げた騎兵少尉の墓とする……

葬籠の眞黒な羽毛が動く、棺桶がゆるやかに這ふ、騎兵中隊が隊伍を整へてゆく、喇叭が光る……嚴かな葬曲が響く、悲しげな顔をした人達が歩く……續いては塋穴だ。まだ墓石はない。アルブローフに殺された副官アウグーストフの葬儀當日のやうに……クラウゼ自身が號令を掛けた時のやうに、墓地の外れでは別離の一斉射撃が行はれる……クラウゼは狼狽して眉毛を動かした。

此處に騎兵少尉クラウゼは死んで了つた。もう永遠に太陽も見られない。生々した人聲も聞かれない。他人が自分を憐れんでゐることも分らない。併し自分自身は悲しいだらうか？ 決して決してそんな事はない。

太陽か？ 騎兵少尉クラウゼは二十七年の間太陽を眺めてゐて、もう太陽には厭々あきらとした。それでは生か？ 生は彼に苦痛を與へた。そして苦痛が終ると同時に、それは無意義なものとなつて了つた。それでは人間か？ 彼等はクラウゼのやうな脳髓の容器を有つてゐない。彼等は彼を理解しないし、彼も彼等を理解しない。全生涯が斯うだ……彼等は愛や理性や感

情や苦痛の中に、相互を理解しようとするやうに努めてゐた。併し彼には何も與へなかつた。何も説明しなかつた。苦痛や疑念に悩む彼を扶けなかつた。彼は苦しみながら、たつた一人で死ななければならぬのだ。彼の脳髓を粉碎すべき弾丸にしても、彼等の頭には觸れはしまい……彼の容器を破壊しても、彼等の容器は残して置くだらう。彼は生活してゐた。そしてたつて一人で死にかけてゐるのだ。

此處には苦痛がない。總てが無意義だ……新しい日が始まる、着物をきる、食事をする、酒を飲む、考へる、談話をする……何もかも無意義だ。總てに嫌惡を覺えた爲めではない。たゞ莫迦らしいのだ。

眞黒な風貫窓は間もなく閉く。闇も消えて了ふだらう。

クラウゼの手に連發短銃のある事を知つてゐる者があらうか？ 彼が其處にゐるのか居ないのか、闇の中では自分でさへ分らない。

冷たい物が顚顚に觸れた。クラウゼの頭脳には眞黒な銃口が浮んだ……顚顚の薄い皮膚が重い鋼鐵に壓せられて、皺になつてゐるやうな氣もする。もう一息だ、もう……

巨人の腕に似た暗い影が、怖ろしい速度で闇の中を動いた。そして騎兵少尉クラウゼの頭上に止つた。鈎形の怪しい指が上る……連發短銃を握り締めた衰れたクラウゼは顚顚に銃

口を壓しつけてゐた。彼の頭上には、全世界を握る巨人のやうな腕がある。貪慾に曲つた眞黒な指がある……闇と寒氣は下の方から襲うて來て、彼を此の世界から引き放さうとする。周圍は恐怖と空虚ばかりだ……彼は闇黒と空虚の中に、今にも融解して了ひさうだ。そしてほんたうに……これこそ死だ！

「オーッ……オーッ！」クラウゼは甲高い聲で荒々しく叫び出した。

從卒は蠟燭を手にして、重々しく靴を引き摺りながら、臺所から駈けつけて來た。蠟燭の黄色い光りは壁に揺めいて、臆病な強盜の一團のやうに部屋隅を歩いてゐた怪しい影も消えた。

「少尉殿！」

狂人のやうな顔をしたひよろ長い騎兵少尉クラウゼは、白い襯衣一枚のまゝ、部屋の眞中に突立つて、消滅げ返つた善良な從卒を見詰めてゐる。剃き出した眼玉の上には斜めた眉毛が釣り上つてゐた。

「少尉殿！ 少尉……！」

騎兵少尉は口を噤んだまゝ、從卒の顔を憎々しげに見詰めてゐた。彼の手には連發短銃があつた。そして其の手は痙攣するやうに引釣つてゐる。一分間ばかり、二人は眼と眼を見合

してゐた。蠟燭は兵卒の手に揺れ動いて、黄色い光は部屋隅から部屋隅へ朦り流れてゆく。兵卒は急に堪へられなくなつた。彼は踵を廻らして、逃げて行つた。

彼は主人に追ひかけられてゐるやうな氣がした。鈍い恐怖が、彼の暗い頭腦を抱きかゝへた。彼にはこれが自分の主人ではなくて、不可解な怖ろしい悪魔のやうに思はれてならなかつた。

彼は書齋に跳んで行つて、蠟燭を落さないばかりにしたがら、洋机に獅噛みついた。

「おゝ主よ！ 何事で御座います？ お救ひ下さい！」

騎兵少尉クラウゼの眞面目くさつた姿が、寢室の扉口から現はれた。白い襯衣一枚なので、彼の姿は何となく滑稽だつた。彼は冷やかに從卒の方を見て、當惑したやうに眉毛を動かした。

「着更へだ！」彼は落着きはらつて言つた。

宅地はもう灰色になつてゐた。秋の黎明は鎧扉の透間を覗いてゐる。

九

原野と寒氣と灰色の光……

雨は歇んだが、冷たい濕氣となつて、彼方の白い雲から擴がつて來るものがある。又降り出して來て、搖々した灰色の幕のやうに野原を蔽うては、晝も夜も果しなく降り續くのであらう。野原の中はがらんとして、寒氣と闇ばかりになる。そして誰の眼にも見えない、誰にとつても不必要な雨は、小聲で絶えず囁きながら、何時までも降り續くのだ。

渺茫たる灰色の原野の白い空の下に、小さな不揃ひな鎖状をなして、兵卒が連つてゐる。遠く前方には、標的が小さな環のやうに見える。黄色い火花は乾燥した響きを立て、連鎖の端から端へと走つていつた。反動と同時に引き裂くやうな發砲の響きが聞える。彈丸は歌ふやうにヒュウ／＼唸つて、彼方の標的に命中する。時々銅製の喇叭が後退を命令した。と、堡壘の上には小さな信號卒が現れて、眞赤な旗を振りながら、命中の點數を知らせる。

ひよろ長い騎兵少尉クラウゼは、騎兵外套の裾に纏れながら、濕つた野原を眞直ぐに進んだ。廣い野原の中では、銀灰色の軍服姿も何となく見窄らしかつた。秋の冷風は彼の耳にさわめいたり、外套の裾を翻したりした。

クラウゼはちつと眼前を見詰めてゐた。彼は何物かを見出さうとして、見出し得なかつたやうに、細い眉毛を動かした。

彼は射的場からかなり隔つた處へ去つた。兵卒の顔も、此處からは見分けられなかつた。

たゞ馬だけは、此の寂しい原野に捨てられた玩具のやうに思はれる。ツレーネフ——軍服で直ぐ分る——が忙しさに火線を往來してゐた。信號卒の旗は赤い一點のやうに動いてゐる。その先方には馬に跨つた番卒が朦朧と見えた。

騎兵少尉クラウゼの頭腦は昨夜の事で一杯だつた。

結論に達した思想——既に論駁の餘地はないと思はれた思想が、最後の瞬間になつて後退したのは怖るべき事だ。生は無意義である。死は怖るべきでない。而かも發砲と死との間に過ぎる一秒間の百分の一が征服し難いものに思はれる。本能的な恐怖は、何よりも強いものである。總てが骨牌で組んだ家のやうに崩れて了ふ……彼は喫驚した。

冷たい眼は判然としてゐる。腦髓は正確に働いてゐる。意志は専ら或る一事に向けられてゐる。併し眼にもとまらぬ最後の線を超える力がないのだ。

それでは何か過失があるのか！ 生は價值あるものなのか！ 無意義な不必要な生も、内部の『我』よりは高價に思はれる。それは自分を卑下し、小心に悲歎の聲を洩らして、自分にとつては呪はしい生に獅嚙みつくのだ。

併し、本能的な怯懦の爲めばかりとは言へまい。死の必然に對する確乎たる信念が缺けてゐるのだ。さうだ！ 出發點から考へ直して、自分の心から離れた最も重大なものを見出さ

なければならぬ。

クラウゼは餘程前に刈り取られて、もう腐敗しかけてゐる草を踏み分けながら、濕氣のある野原を大勝に歩いて行つた。風は彼の歩行を妨げた。外套は足に絡まつた。何處へか運ばれて行く空気が彼の耳もとで騒めいてゐる。

曠原の中に忘れられた墓のやうな粘土の小山には、焚火の跡が黒ずんでゐた。半焼けになつたプリヤン草の枝や莖は正しい圓を描いて、その内部には灰で白くなつた木片が残つてゐる。クラウゼは立ち止つて、ちつとそれを見詰めてゐた。暫くすると燃料の残物を長靴の爪先で掻き集めて、小さな薪の小山を積み上げた。そして火を點けた。

乾いた紙は喜ばしげに燃え上つた。藁屑はばち／＼音を立て始めた。乾ききつたプリヤン草の枝は燻り出した。暫くは消えたやうに見えたが、貪るやうな炎は太い枝の周圍に執拗く捻れて、或は上り、或は下り、風を受けては地面に身をすり寄せて、灰色の煙と黒い舌を吐きながら、焚火は喜ばしげに燃え上つた。

クラウゼは大勝に足を開いて、ちつと焚火を見詰めながら突立つてゐた。

貪るやうな炎は渦を巻く……炎に舐められた枝は縮み上る。炎は此等の枝を焼き盡さねばならぬのだらうか？ 若しその必要があるのだとすれば、炎の生が其處にあるからだ。

炎は何處から來たのだらう？ 枝は苦しいだらう。枝が燃えきれば、炎は消えて了ふ。何うして斯う忙しいのだらう？ 自然の法則に運命づけられてゐるのだから仕方がない。炎が生氣ある残忍なものであらうとも、枝にとつては同じ事だ。燃料さへ與へれば、貪慾な怖ろしい炎となつて燃え上る。それは全世界を焼き盡す事が出来る。焼き盡す事は出来るにしても、世界を征服する事は斷じて出来ない。何故なれば最後の木片が燃えきると、炎もそれと同時に消えて了ふのだ。勝利を得ながら滅亡して了ふのだ。焼ききつて了へば、空虚が残るだけだ。一方なしに一方が存在する事は出来ない。二つを引き放す事は出来ない。生も死も離るべからざる物である。死が勝利を得れば、死そのものは勝利の中に消滅する。何故なれば死の恐怖は、生を有する期間にのみ存在するものだ。

『勿論だ！』クラウゼは冷やかに笑ひながら、其處を去つた。

これで全部だ。死の恐怖さへなければ、其處にはもう死そのものもないだらう。全然價值の無いものなら、破壊する必要もあるまいが、死の恐怖は永遠に存在する。存在せざるを得ない。これを征服しなければならぬ。

何うすればよいのだ？ 恐怖が必勝的に玉座を占めてゐる闇の中にゐては不可ない。生氣ある人々や騒音や生を、自分の周圍に寄せ集める必要がある。世人は自分の生活に何物も與

へなかつた。併しその代りには自分の死を助力して呉れるのだ。

『さうだ！』クラウゼは獨言をいつた。

栗毛の大きな馬に跨つて、濕つた土に蹄を鳴らしながら、ツレーネフが彼の方へ近づいて來た。射撃はもう終つた。隊伍を整へた騎兵中隊の、道路の方へ徐々と出て行くのが見える。

『クラウゼ君！ 歸らないか！』ツレーネフは遠くから聲を掛けた。そして焚火と騎兵少尉の姿とを訝かしさうに見てゐた。『君は何をしてゐたんです？』

近頃彼は騎兵少尉に注目してゐた。クラウゼの様子は、此の二三日何うも變だつた。今朝も從卒がツレーネフの處に駈けつけて來て、昨夜の出來事を怖ろしさうに話した。ツレーネフは彼が發狂したのではあるまいかと思つた。

『此處で何をしてゐたんです？』彼は騎兵少尉の傍に馬を止めて、同じ言葉を繰り返した。そして兵卒の方に、クラウゼと一緒に行くといふ相圖をした。

『何もしちやみません。焚火を……』クラウゼは答へた。

『焚火を何にするんです？』

『さう……』騎兵少尉は狼狽したやうに肩を縮めた。

ツレーネフは頭を振つた。

『言はう言はうと思つてゐたんですが……何うも君は顔色がよくない。休暇をとつて、保養に旅行でもしたら何うです……行く氣があるなら、私からダヴィツイチ殿に話して見ますよ。』彼は灰色の長い顔と、不可解なほど透き徹つた眼を覗きながら言つた。

クラウゼは眞面目くさつた顔をして、頻りに頭を振りながら、彼の言葉を注意深く聽いた。聽て不意に敬禮をして、自分の乗馬の方へ退くと、ひらりと鞍に跳び乗つて、騎兵中隊の跡を疾走して行つた。

ツレーネフは狼狽して、彼の背後に身震ひをし始めた。

『ダヴィツイチ殿に話さなければならぬ。』彼は聯隊長の事を思つた。

クラウゼは勝ち誇つたやうに冷たい微笑を洩らしながら、愈々馬を疾走させて行つた。彼は總てを了解した。そして自分の突進すべき道を見出したのである。

十

我が家の入口階段の傍で馬から降りると、ツレーネフは氣遣はしげに窓の方を見た。歸宅の度毎に、妻がどんな機嫌で自分を出迎へるか、彼は一度としてそれを知つた事はなかつた。

彼は妻の冷酷な意地悪さうな顔や、不愉快な女性的復讐心を隠した透明な瞳に接するのを怖れた。そして彼女の心が鎮つてゐて、機嫌のよい時だけは、彼も快活な自由な氣持になる事が出来るのであつた。彼は自分といふものを犬のやうに思つた。犬は尻尾を垂らしながら、怯々と主人の方へ近づいて行くが、一度打擲されない事を識ると、忽ち狂ほしい感激に陥つて、駈け廻つたり、地面に身體をすり寄せたり、喜ばしげに唸つたりし始める。これは屈辱である。最も怖ろしい争論の時よりも、此の瞬間に於ける妻の方が、彼にとつては遙かに憎むべきものであつたらしい。

併し彼女に對する撫愛の欲求は、彼女なしには生きてゐられない程、彼の肉にも靈にも深く喰ひ入つてゐた。彼から見れば、彼女の撫愛は空氣のやうなものである。その滋味の中にありさへすれば彼の心は何時も生々としてゐた。彼は何時も妻を機嫌よくさせて、一分一秒の間斷もなしに、彼女との接近を樂まうと努めた。けれども夫の探るやうな眼付を見ると、彼女は夫が自分を怖れてゐるが如くに思ふのである。二人の間にあるのは愛情ではなくて、恐怖ばかりであると思ふのである。彼女は暴君のやうに思はれてゐる事を怒つて、何時も侮蔑の言葉を夫に吐き掛けてゐた。相互の緊張した睨合ひや、際限のない争論は斯うして起るのだ。愛情が濃くなれば濃くなる程、靈や肉體が密接する程、夫婦の關係は愈々重荷となつてきた。彼等は二人ながら斯うした束縛の中に氣息を喘ませてゐるのだ。

『奥さんは何處にゐる？』ツレーネフは從卒に訊いた。從卒は、彼の手から帽子と外套を受取つた。

『何か御用をしてお出でであります。』家内の出來事を残らず知つて、自分の主人に同情してゐる伶俐な小露西亞人は、慰めるやうな口調で答へた。

兵卒の口から慰めるやうな事を言はれるのが、ツレーネフは苦しいほど羞かしかつた。併し呼吸は矢張り樂になつた。彼は拍車を鳴らしながら、堂々と部屋へ入つて行つた。

昨夜二人はつまらぬ事から思はずも夫婦喧嘩をやつたのである。彼等は『つまらぬ事』のまま、で談話を打切るのが辛かつた。見苦しい怖ろしい芝居となつた。ツレーネフは妻を殺して、自分は壁に頭を打ちつけるか、さもなければ短銃で額を射貫きたかつた。

夜半になつてから、二人は例の通り和解した。喧嘩は何時も斯うして終るのだ。へとくになるまで相手を虐めなければ、彼等は決して和解しない。どれほど騒いだ所で、結局は和解になるのだから莫迦らしい。どれほど相手に喰つて掛つた所で、どれほど相手を侮辱した所で、どれほど相手に憎惡を起した所で、要するに和解しなければならぬのだ。さもなければ彼等は一つ寢臺に眠る事が出來ない。これは既に離別である。——斯う考へただけで

も、彼等は水のやうな冷寒を胸に覚えるのであつた。

九四

寛恕を乞うたのはツレーネフだつた。彼は何かを確信して、自分の方から謙つて出た。そして涙を流した。屈辱であらうが、不體裁であらうが、此の苦しみが終つて、自分の胸が靜まるなら、彼は何事でも敢行しようとした。彼の愛は妻よりも強かつた。それ故に一層離別を怖れて、自分の方から折れて出たのである。併し彼女は自分の威力を識つてゐた。此の自覺は最後まで夫を嘲笑して、執拗に残酷に復讐を加へるだけの力を與へた。

ツレーネフは幾度か妻の方へ近づいた。けれども彼女は夫を突き除けて、涙で濡れた枕の中に顔を隠して了つた。そして残忍な仇敵の前にでも曳き出されたやうに、毒々しい言葉を繰り返すのである。

「放つて置いて下さい……向うへ行つて下さい……何うしようつて言ふのですよ、莫迦な！」

ツレーネフは襯衣と騎兵洋袴だけで、部屋の中を往つたり來たりしてゐた。彼は拳を固めた。そして氣が狂ふのではあるまいかと思つた。顔は脹れ上つて、髯はもちやく垂れ下つてゐる。彼の姿は不恰好でもあつたし、哀れつぽくもあつた。

ツレーネフは時々怖ろしい憎惡に捉はれた。不貞寢してゐる妻の方へ近づく毎に、半裸體

の柔かい背のあたりを狂人のやうな眼で見て、彼は満身の力で打擲しようとする堪へ難い慾望にそゝられてゐた。頭腦の内部にはもう霧がこもつてゐた。拳は固められてゐた。もう一分も経てば、再び這ひ上る事の出來ないどん底へ跳び込んで了ふかも知れない……彼は頭を抱へて、唸り聲を揚げないばかりに退いた。

「斯うしてはゐられない。何の事だ！ 死んで了つた方がいゝ！ 別れて了つた方が優しだ！」

「御遠慮には及びませんよ！ 私もさう言はうと思つてゐた所です。貴方がもう少し張りのある人間だつたら、とうの昔、私を苦しめずに、出て行つて了つたでせうよ！」

彼女は何時も斯う言つた。そして此等の言葉は、ツレーネフを狂怒に導くのである。男を苦しめるために、故意にこんな言葉を吐き掛けてゐる事は分りきつてゐる。併し故意の言葉にしても堪へ難い程、二人は愛し愛されてゐるのだ。彼の胸はこれと同時に、愚かしい嫉妬の情で一杯になつて了つた。自分には戦慄なしに離別の事を考へられぬのに、最愛の妻は平然として離婚を口にしてゐる——それも最初はたゞ胸を衝撃するに止つたが、聽て暫くすると、二人は全く路傍の人であつて、彼女は自分を忘れ、自分を撫愛したやうに他人を撫愛するであらうと云ふ事が、忽焉として彼の頭腦に浮んで來た……見苦しい場面が現れて來た。

彼は他の男に抱擁されてゐる妻の肉體の一舉一動を眼前に見た。そして、心から氣息の根を止めてやらうと思つた。

ツレーネフは不可解な倦怠に捉はれた。彼は捨鉢になつた。嘔吐は何時まで経つても止むまい。自分は此の耐へ難い責苦のために發狂して了ふだらう。彼は疲勞のうちにも苦痛の快感を覺えて、妻が死んだらと思ひ出した……彼女が死にさへすれば、嫉妬の情も消えて、自分は微風のやうに自由な身となるのだ。勿論彼女に對しては、何時までも感謝の記憶を持たう。そしてもう永久に戀をすまい。どんなに呼吸が樂だらう。

併しそれは何時の事だらう？ 彼女は自分よりも若い……自分の方が先きに死ぬかも知れない……その時には何うなる？ 一人ぼつちになつたら、彼女はどんなに怖ろしいだらう。何を思ひ出すだらう。夫の生活を毒したといふ自覺にどれほど苦しむだらう。これは怖ろしい事だ。ツレーネフは自分の後に生き永らへてゐるより、彼女にとつては寧ろ死んだ方が優しではあるまいかと思つた。

まア彼女が死んだ事にする……あれほど自分が愛してゐた彼女の美しい温かい肉體は、冷たい屍となつて、眼前に横はつてゐる。もう抱き締める事も出来ない、懐しい温味に接する事も出来ない、蜜のやうな私語を聴く事も出来ない……ツレーネフは頭髮の逆立つやうな戦慄を覺えた。

早かれ晩かれさうなるのだ。何方かが先きに死んで了ふのだ……愚かな嘔吐や蠻行の中に、空しく晝や夜を過したといふ自覺は、どれほど怖ろしくなるだらう。その時になつては、もう取返しがつかない。一分間と雖も忽せにしては不可ない。生は短かい。而かも一度しか與へられない。それにも拘らず二人は争うて、相互に苦しめ合つてゐるのだ。生は去つて行くではないか！ 自分達二人は何をしてゐるのだ？

『ほんたうに彼女はこれを考へた事がないのだらうか？ 自分の身が哀れではないのだらうか？ 此の位の事は解つてもいゝ筈だ！』ツレーネフは絶望を覺えて、痙攣的に肩を縮めながら考へた。

彼は徐ろに近づいて、總てを説明してやりたかつた。そして彼女と和解したかつた。別に難かしい事ではない。莫迦に見えてもいゝ。自分は彼女を愛してゐるのではないか。意地が悪くても、虐められても、彼女は痛いほど可愛いのではないか。彼女には何うしてこれが解らないのだらう？

併しツレーネフには氣遣ひがあつた。若し妻の方へ近づいて行つても、再た毒舌を吐き掛けながら、突き飛ばされな限らない。さうでもしたら、彼の頭腦は全く逆上して了ふ

……けれども彼は矢張り近づいて行つて、寢臺の傍に跪いた。そして彼女の背の冷たい膚に唇を當てた。

九八

最早喧嘩も終つた、彼女は疲労して、苦しいほど和解を望んでゐる——此の瞬間に彼はこんな事を意識した。二人はよく理解し合つてゐる。彼女が返事もせず、素肌の肩を顫はした事だけで、ツレーネフは妻が最早自分を赦してゐる事に気がついたのである。

妻は彼を愛してゐた。如何なる屈辱も忍ぼうとしてゐた。たゞ女の片意地が、彼女を強情にさせたのだ。そして一分ばかり前までは狂人のやうであつた其の片意地も、今では涙の出るほど愛らしい感傷的なものとなつて了つた。ツレーネフは眼を燃やし、胸を痛むばかりに心を優しくして、妻の露な背に接吻を與へた。

『もう赦して呉れるだらう……老耄れの莫迦を！』

何うしてこんな言葉が浮んで來たのだか、彼は自分でも解らなかつた。怖ろしい芝居の最中には、何時も斯ういふ滑稽な文句が浮んで來て、思はずそれを口にして了ふやうな事があつた。さうなると有らゆる言譯も辯駁も徒らに憎惡を赤熱させるばかりだつた。

併し今は二つの露はな腕が彼の頸を抱き締めてゐる。ツレーネフは、愛と感激のあまり熱い涙を流してゐるのに氣がついた。彼は涙に燃えた、幾らか服れ上つた唇に物狂ほしく接吻

して、見事効を奏した滑稽文句に感謝しながら、再び繰り返して言つた。

『老耄れた莫迦を赦してお呉れ！』

『莫迦ね！ またそんな事を言つて！』彼女は囁いた。胸の中をさらけ出した二人は、悔悟の涙と恍惚とした抱愛の中に和解した。

疲労しきつた幸福な二人が、睦じく一つ寢臺に並んで横はつた時、彼女は自分が夫を愛してゐる事や、夫を苦しめた罪に惱んだ事や、毎夜良心に責められた事などを、暗闇に眼を据ゑながら呟いた。

『私は氣狂ひね。赦して頂戴！』彼女は言つた。

そして既に百度から言つたやうに、これが最後の喧嘩であるとか、今といふ今は萬事が終つたとか、自分は心を改めるとか、もう何をされても怒らないとか云ふ事を、繰り返して繰り返して囁いてゐた。

『幾度約束したか分らないぢやないか！』ツレーネフは悲しさうに言つた。

彼女は癡癡的に男の身體を抱き締めた。彼女は自分の言葉を信じてゐなかつた。けれども二人は心からこれを信じようと努めた。

『我々は幸福だ！』ツレーネフは言つた。彼は燃えるやうな優しさと、頼りない悲しさを覺

えながら、彼女の抱愛を受けてゐた。

『何うして私達は喧嘩ばかりしてゐるんでせう？ 何うしてでせう？ 貴方は男ですから、私よりも強いんです……貴方が堪へて下さらなければ不可ません。』彼女は絶望的に言つた。ツレーネフも絶望的に肩を縮めた。彼は何うしてこんな事になつたのだか解らなかつた。口論の中に過した一分一分を思ひ起す事が出来なかつた。客の居合はす際には、諾否を談話の上で定めるのに、彼等は何故二人きりになると、激昂せずには相手の言葉を聴いてゐられないのだらう？ 相互に倦怠してゐるのだらうか？ 單にそればかりではあるまい。二人は相互に離れては生活する事が出来ないのではないか。

彼等は苦しいほど當惑し、自分達さへ解らない怖ろしい戯曲の世界に迷ひ、愛情によつて幸福を與へる事に絶望しながら、相互に寄り添うて、默然と暗闇を見詰めてゐた。

翌朝ツレーネフが床を離れて、妻を起さぬように祕そりと身支度をしてゐた時、彼女はまだ温かい寢床の上に丸くなつて眠つてゐた。彼女は両手を頬に當て、枕の上に金髪を散らしてゐた。ツレーネフは彼女の顔を覗いた。自分を苦しめに苦しめた此の女が、彼にはどれほど愛らしく見えたらう。彼女の露はな腕、枕蓋に絡んだ生毛、赤兒のやうに組合せた小さな素足……すべてが限りなく愛らしい物に思はれる。彼は妻を起したかつた。睡眠のため

に温つとした柔かい身體を抱きかゝへて、彼女の胸や腕や足に、何時までも何時までも接吻してゐたかつた。併しツレーネフにはそれを敢行するだけの勇氣がない。彼は愛と優しさに眼を潤まして、微笑を浮べながら、物靜かに出て行つた。

教練の時も彼は妻の事ばかり思つてゐた。家庭で彼を待ち設けてゐるのは、果しない喧嘩ではなくて、愛撫や慰安であるかと思へば、彼の心は晴々としてきた。併し再た何か始まりはすまいかといふ懸念が、時々起らぬでもなかつた。彼は繃帯した傷口にでも觸れるのを怖れるやうに、努めてこれを考へまいとした。

妻は嬉しさうに微笑を浮べて彼を出迎へた。そして、肘のあたりまで露はにした薔薇色の腕を差し延べながら、彼の方に近づいて來た。

食事の時ツレーネフはクラウゼの事や、主計とつまらぬ衝突をやつた事や、第六中隊で兵卒が馬に蹴殺された事などを、自分の妻に話して聞かせた。彼は二人が間斷なしに争うてゐるのも、全く彼女が退屈してゐる爲めだと思つたので、出来るだけ快活に談話を續けようと努めた。二人は總べて些細な出来事でも重大視してゐた。何故なれば、長い結婚生活は彼等の心を奥底まで憔悴させて、二人は最早話すべき材料を有たなかつたのである。彼女はさも興味を起したやうに聴いてゐた。時には自分を慰めて呉れる骨折を感謝するやうに、露はな

腕を洋机の向うから差し延べながら、晴々とした愛らしい眼をして、夫の腕を撫で擦つてゐた。ツレーネフは身體を屈めて、香氣ある彼女の滑かな腕に接吻を與へた。彼は妻の愛撫を餘りに歡喜してゐるのが幾らか羞しかった。

程なく彼女は街の噂をし始めた。

彼女は夫が自分を重荷にし、自分に厭きて、他の女を求めてゐるやうに思つてゐた。それ故に談話は何時の間にか女のことになつて了ふ。彼女は有らゆる女を戀仇のやうに憎んだ。そして街の風聞を繰り返しながら、嫉妬深さうに悪口を並べてゐた。これは何時もツレーネフを激昂させるのである。最初は口論になるのを怖れて、怯々と胸を煮やしてゐたが、漸く彼女がすべてに無關心な様子を見ると、彼は急に氣を大きくして、彼女の不徳を責め始めた。急に彼女の眼は曇つた。彼女は唇を噛みしめて、たゞ口論にならぬ事を願ひながら、なほ暫くは我慢してゐた。けれども矢張り口論となつて了つた。そしてツレーネフが憎惡を浮べた彼女の眼付に氣がついた時には、聲は一言毎に激して、口論は早くも雪崩のやうに襲うて來た。最早彼女を抑へる事は出來ない。

併しツレーネフはさも同感のやうに、微笑を浮べながら聽いてゐた。

彼女は、ミハイロフと一緒に街を去つたジーネチカの事や、リーザ・ツレグロワナの事を

悪様に言つた。

「知つてゐますよ……あの女優は浮氣者です……だけれどあの娘には驚いたわね……何が可哀さうなんだか譯が解らない。淫奔娘なんです。まだ十七とか八とか云ふのにね！」
ツレーネフはリーザを憐れんで、ジーネチカを愛してゐながらも、矢張り同感したやうに點頭いてゐた。彼はジーネチカを浮氣者とは思はなかつた。

「あの娘は腹が大きいんだつてね。」彼は妻を満足させるために、顔を赤らめながら、こんな事まで言つた。

食事が済むと、二人は花園を散歩しに出た。樹の葉はもう黄ばんで、四邊は明る過ぎるほどがらんとしてゐた。彼等の娘は水溜りに影を映しながら、雨に濡れた小道を駆け歩いてゐたが、二人は矢張りつまらぬ事を喋り續けてゐた。彼等は心地よかつた。安らかだつた。そして樂しかつた。

併し夕方になると、話題はもう盡きてしまつた。一人が話し出すことは、他の一人にはもう解りきつてゐるのだ。二人は平生のやうに退屈になつた。ツレーネフは、誰か來て呉れ、ばい、がと思つた。けれども彼はこれを顔に現すまいとして、努めて安靜と快活を裝うてゐた。妻はこれを察してか、頻りに俱樂部へ行く事を勧めた。ツレーネフは強ひて無關心な

顔をしながら答へた。

『行つて何うするんだい？ つまらない……年中同じ事ばかりやつて！ もう眞平だ！』

彼は倶楽部へ行きたくない事を信じたかつた。けれども電燈に照らされた倶楽部の器具や、連中の晴々した顔や、賑やかな聲は、何時いつになく自由な興味ある物として、彼の眼前に現れて来た。妻は疑はしさうに彼の顔を見た。彼女も夫は自分の傍そばにゐるのを喜んで、何處へも外出したがつて居ない事を信じたかつた。彼女は夫が倶楽部好きである事を思ひ出した。今日に限つて出掛けないと言ふのは、全く自分の爲めなのだ。とりもなほさず夫の樂しみを自分が奪つたのだ。彼女は夫に接吻して、頻りに倶楽部へ行く事を勧め始めた。

此のいきさつは暫く続いた。女は頻りに倶楽部行を勧めるが、その實、夫の外出や酒宴や骨牌には堪へられない。男も行きたくないと言ふものを、殆んど病的に近い外出の熱望に惱まされてゐるのだ。二人は心にもない事を口にしながらかつてゐた。そしてアルブローゾフの馬車が此の家に着いた時分には、早くも激昂になりかけてゐた。

ツレーネフは跳び上つて、喜ばしげに彼を出迎へた。併しその喜びも直様妻のために妨げられて了つた。

アルブローゾフは水色の外套を纏ひ、磨きたての長靴を穿いて、大勝に足を踏みしめながら、

部屋の中に入つて来た。よほど醜態してゐるやうだが、彼の動作には少しも亂れた處がなかつた。たゞ暗い眼ばかりは血走つてゐる。彼は大聲で愉快さうに叫んだ。

『今晚は！ 貴方を迎へに来た！ 倶楽部へ行かないか？ 連中は皆な来る筈だ……セリ・シュカ・ミハイロフも歸つて来た……行く？』

ツレーネフは恐る／＼妻の顔を見た。アルブローゾフは此の眼付を見て、無遠慮に笑ひ出した。併し何とも言ひはしなかつた。ツレーネフは彼の冷笑に氣がついて、羞かしさうに顔を赤くした。彼の胸は再び惱ましくなつた。妻が氣難かしいばかりに、自分自身の胸を決する事も出来ないで、何時も惡黨連の嘲笑の的になつてゐるが、彼とても勇敢な軍人である。大海を淺瀬のやうに怖れなかつた時代もある。

『何だか氣が進まないんですが……』彼は間が悪さうに言つて、説得するやうに腕をひろげた。

『氣が進まない？ 行かうよ、さア！』

『私はほんたうに……』

『さア、行かうつたらさ！』アルブローゾフは彼と腕を組んで、醜漢らしく強情につき纏うた。『僕は顔が揃つた所で飲りたいんだ……連中が一人缺けると云ふもんだ。行かう！』そして

故意か偶然か、彼はこんな事を言ひ加へた。「奥さんは出して呉れるさ……僕が願ひする……奥さんは善い方なもの！」

「私は止めやしませんよ！」彼女は苦笑ひしながら言つた。

ツレーネフは顔を赤らめた。

「さうぢやない……私はたゞ氣が進まないんです。變な事を……譯が解らない。」

アルブゾフは血走つた眼に嘲弄の色を浮べながら、無遠慮に彼の眼を見てゐた。

「嘘……矢張り奥さんが怖いのだ！」彼は斯う言つて、笑ひ轉げた。

「何故厭なんですよ？」妻は冷靜を装うて言つた。「被往つたらいゝぢやありませんか。」

ツレーネフは素早く妻の方を見た。

「行つて被往いよ！」妻は彼の顔を見詰めながら、勵ますやうに言つた。

ツレーネフは彼女の表情を讀まうとした。併し透明を偽つてゐる彼女の眼からは、何物も掴み得る事が出来ない。

「あの眼なら出掛けてもいゝだらう……併したゞ……」彼は躊躇ふやうに延び上つた。

「では行かう！」アルブゾフは叫んだ。「早く支度をし給へ！ 僕は待つてゐる。」

ツレーネフは肩を縮めて、頼りなささうな微笑を洩らしながら、愚圖々々と支度しに出て

行つた。

アルブゾフは食堂に残つた。ツレーネフは着物を着ながら、彼の無遠慮な聲と、妻の眞面目くさつた低い答とを耳にした。彼はその聲によつて、妻の心に不満のある事を識つた。彼の胸は詰つた。併し自分の小心を蔑みながら、矢張り身支度を續けてゐる程、外出の希望は激しかつたのである。

彼はアルブゾフを先きに出して、妻に一言挨拶するため止つた。彼は妻の不機嫌を氣遣うて、接吻しながら、彼女の眼を恐るゝ覗いた。強ひて微笑こそ浮べてゐるが、彼女の眼には不快の色が溢れてゐる。彼は腹立たしくなつた。倶楽部へ行きたいのは罪惡なのであらうか？

「私が行つては厭なのだらう？」彼は怯々と訊いた。

「なアゼ？」彼女は誠意のない聲で遮つた。「だつて貴方は行きたいんでせう？」

「でも一人では退屈ぢやないかい？」

彼女も矢張り腹立たしくなつた。彼女は勿論退屈である。夫は問ふ所なくして、勿論家に止まるべきである。此の不誠實は何事だ？

「いゝえ、あたし本を讀んで、それから寝みます……行つて被往いよ！」

「私は家にゐてもいふんだらう？」彼はだらしなく訊いた。

「行つて被^い往^つい、い」彼女は殆んど叫ぶやうに言つたが、急に微笑を浮べながら、こんな事を言ひ加へた。「面白く行つて被^い往^ついね！」

ツレーネフは漸く決心した。併し彼の気分はもう傷けられて了つた。彼は繫鎖に慣れた動物のやうに、扉口の處でもう一度振り返つて見た。妻は沈んだ顔を明るくして、態^{わざ}とらしい微笑を浮べながら、芝居で演るやうに手を振りなどした。ツレーネフは重い足を引き摺りながら出て行つた。實際此の時には、彼ももう外出したくはなかつた。彼は家にたつた一人でゐる妻が可哀さうだつた。そして後の喧嘩^{いさか}が怖ろしかつた。併しアルプソフは自分を待つてゐる。もう拒^こるにも拒^これない。ツレーネフは馬車に乗つた。

十一

灰色に濁つた花園は、畫室の大窓の外の濕^{しめ}つばい霧の中に薄れてゆく。蒼白い秋の悲しみは黄昏の微光の中に漂うて、弱々しく室内に揺めいてゐる。

今朝^{けさ}停車場から家に着くと、ミハイロフは終日眠つた。彼は故知らぬ心の哀傷を覺えて、重い頭を抱きながら、夕暮近くに眼を覺ました。

僅か一晝夜前まで彼は大都會にゐた。併し霧深い街や、馬車の幌を上げた馭者の列や、電燈の冷たい光や、知人の顔とは、數萬里も隔つた處にゐるやうな氣がする。

これと同時に自分の部屋も、他人の冷たい畫室のやうに思はれた。彼は太陽が煌々^{きら}輝いて、花園の樹葉が初秋の黄に染つた頃、此の畫室を去つたのである。併し花園も今は濡れてゐる。雨に打たれた落葉は小道に踊つて、畫室のなかは凝結したやうな薄闇に閉ざされてゐる。何處も此處も埃の細い網ばかりだ。知らぬ空家にでも入つたやうに不氣味である。油繪やスケッチは壁の上から懶げ^{ものご}に見てゐた。剝製の梟は自分の主人を忘れたやうに、硝子製の黄色い眼を見開いてゐた。

ミハイロフは自分の思想の鈍い流れに耳を傾けながら、爲す事もなく、室内を歩き廻つてゐた。總てが失敗である。有らゆるものが不必要に思はれる。取返しのかぬ失策を演じたやうな氣がする。

「何のために歸つて來たのだ？」彼は暗い腹立ちを覺えて、自分の胸に問うた。

秋に街へ來たのは初めての事である。これまででは金色の夏か、さもなければ楽しい緑の春ばかりだつた。何うして歸る氣になつたのだか自分にも解らない。哀傷の情が彼を追うたのだ。有らゆる人に對し、自分に對する憎惡^{にくしみ}の心が彼を追うたのだ。彼は惡意に歸つて來た

やうなものである。

「いつそ退屈なら、もつと退屈になるがいゝ！ 莫迦らしいなら、もつと莫迦らしくなるがいゝ！」

出發までの二日間、彼はジェーネチカと一緒にいた。彼女は一月ばかりマスクワにゐて、何處か西比利亞の方へ去つたのである。

別離の光景は今でも記憶に残つてゐる。ジェーネチカは列車の薄暗い通路に立つて、暗い處でさへ光つてゐる眞黒な眼で、ミハイロフの顔を見てゐた。人を人とも思はぬ彼女の晴やかな眼にも、深く秘められた柔しい悲しみの情が見える。

「では行つて被^{いらつしや}往い！」ミハイロフは無意識に言つた。

彼はジェーネチカのす^{らり}とした姿や、眉毛と眼の眞黒な美しい顔を見てゐた。そして疲勞以外に、何も感じないのが不思議で堪らなかつた。彼は一刻も早く彼女が此處を去る事さへ希望してゐた。彼女はあれほど自分に接近してゐたのではないか。兎に角自分の生活に喰ひ入つて、自分の心を動揺させたのではないか。

實際彼女がミハイロフを愛してゐると言つた事はなかつた。彼がその事を訊いても、ジェーネチカはたゞ朦朧^{ぼんやり}と笑ふだけだつた。

「まア！ 貴方は何うだつていゝんぢやありませんか、セルゲイ・ニコラーエヴィッチ！」

何うでもいゝには違ひないが、彼は「愛してゐます」と言はれないのが、何故か矢張り不愉快だつた。彼女の笑聲や、眞實の返答を避けてゐる眼色の中には、何かを物語つてゐるものがあつた。彼女の傲慢な胸の底には何物かが潜んでゐる。併し彼女はそれを言ひ出さうとしなかつた。ミハイロフは彼女がたゞ悩み苦しんでゐる事だけを識つた。

「では行つて被^{いらつしや}往い！」ミハイロフは繰り返して言つた。

「えゝ……もう時間でせう。」エヴゲニヤ・サモイロヴナは答へた。「では……左様なら！ 忘れないで下さい！ もうお目には掛りますまい！」

「何故です？」

彼は二人が路傍の人となる永遠の別離を記念するには、餘りに不快であるから、斯う訊いたまでの事である。エヴゲニヤ・サモイロヴナは何物かを見出さうとするやうに、ちつと彼の顔を見詰めた。薔薇色の唇は顫へた。けれども彼女は笑ひ出した。

「ねえ、セルゲイ・ニコラーエヴィッチ！ 何のために再會するの？ もう此の上は退屈になるばかりだわ。さうでせう？ さうぢやなくつて？」

ミハイロフは無様に肩を縮めた。

「お互に幸福な夢だつたと思ひませうよ。」若い女は、鈴のやうな聲で言ひ續けた。「貴方にとつたら、それが何です？ 屹度可愛い女が澤山出来てよ。」

見も知らぬ「可愛い女」の群が、ミハイロフの眼前を霧のやうに過ぎた。彼等は何處からともなく現れて来ては、自分に愛撫を捧げるのだ……彼は何故か退屈になつた。彼等は數限りなく現れて来るのだらうか？ そして今までの女のやうに、生の濃霧の中に夢の如く消えて了ふのだらうか？ 何のためだ？ 過去の女が忘れられ、ジューネチカも聽ては忘れられるやうに、彼等は忘れられるために姿を隠すのではあるまいか？ 單にそれだけの事か？

彼は急にジューネチカと別れるのが厭になつた。彼女は矢張り可愛い。彼女は莫迦かも知れない。淺薄かも知れない。併し二人の間には離れ難いものがある。何故これを断ち切つて、新たに戀を求めぬのだ？ 彼女がミハイロフと關係した理由を知る者はあるまい。彼女はたゞ歡樂の友として、報酬も求めなければ、責任も求めずに、幾度か心地よい時を與へたのである。感謝の優しい情は胸を焼く。ミハイロフはジューネチカの手を執つて、彼女の滑らかな冷たい膚に、手袋の上から接吻した。彼女は男を見下した。晴々とした黒い眼には惱ましさうな色が閃いた。併しミハイロフはそれに氣がつかなかつた。

「矢張り……」ミハイロフは言つた。彼は何事かに驚いて、それを言ひ終へなかつた。

ジューネチカはそれを待ち設けるやうに、彼の顔を見てゐた。聽て溜息を吐いて、彼女は笑ひ出した。

「もういゝわ！」彼女は不得要領に言つた。

人々は間斷なしに通路の傍を通つて、二人の會話を妨げた。時々乗客だの、無恰好な鞆や荷物を持つた赤帽だのが、二人に道を空けて貰ふ事を乞うた。彼等はジューネチカを突き退けたり、壁に押しつけたりした。けれども彼女は此處を去らなかつた。二人は口を噤んだまま、顔を見合して居なければならぬので、何となく間も抜けてゐたし、不體裁でもあつた。

二度目の鈴が激しく鳴つた。胸は一入重苦しくなる。伸びに伸びてゐた彼等の縁も、遂に糸のやうに断れて、二人は刻一刻と相互に離れて行くやうな氣がする。

間もなく二人は別れて、もう永久に會はないのだ。彼女は遠い田舎の街へ行つて、喝采されたり、寶石や花環を貰つたりする。彼女は其處で他の男と關係する事だらう。今では想像もつかない未知の男は、ミハイロフのやうに彼女と親密になつて、彼女を接吻したり、裸體にしたりする。併し自分は濡れた馬車にたつた一人乗つて、群衆が忙しげに往來するマスクワの街に行くのだ。

ミハイロフは莫迦らしくなつた。彼は再びジューネチカの手に接吻した。どんな事があらうとも、此の瞬間の彼にとつては、彼女ほど懐しい女はなかつたのである。

「矢張り貴方に別れるのは辛い！」嘘か眞實かは自分にも能く分らないが、彼は強ひてこんな事を言つた。人間の感情は二重にも三重にもなるものである。

「ほんたう？」エツゲニヤ・サモイロフナは訊いた。彼女の眞黒な眼には、再び怪しい温かいものが閃いた。

「無論です……矢張り私は貴方を愛してゐます。」ミハイロフは斯う言つて、飛んだ所に使つた「矢張り」と云ふ言葉に笑ひ出した。

ジューネチカは頭を振つた。

ミハイロフは、今日までの出来事を思ひ起した。そして彼女が實際自分の生活を充實させた事も、燃えるやうな感情を喚び起させた事もあつたのに氣がついた。單に情慾ばかりではない。今にしてもさうだ。若し彼女の身に危険が迫つたとしたら、自分は死に向つて突進する事を躊躇しないだらう。

「矢張り貴方を愛してゐます。」恰かも此の言葉に固著したやうに、彼は執拗く繰り返して言つた。

「そんな事はないわ。」ジューネチカは遮つた。彼女の黒い眼は眞面目になつて來た。「私を愛してゐるやうな氣がした事もありませうさ。だけれど、眞實に私を愛してゐるんぢやなくつてよ。貴方は女でさへあれば、誰だつて好きなんだわ。」

此等の言葉の中には、ミハイロフの胸を突き刺すやうなものがあつた。彼は驚き敬ふやうにジューネチカの顔を見た。彼女はジューネチカといふ輕薄な女優よりも、遙かに高尚な敏感な他の女のやうに思はれる。自分は彼女のほんたうの顔を見たのであらうか？平生は下らなく見える顔の奥に、何となく神祕的なものが隠れてゐる。

「それもさうでせうさ……」ミハイロフは徐ろに言つた。「今まで何故それを言はなかつたんです？」

不思議にも彼女は須臾にして男の思つてゐる事を了解した。彼女は片方の眼を撃めて、冷笑を洩らしながら答へた。

「セルゲイ・ニコラーエヴィチ！言つた所で仕様がないわ。貴方は……もう何うだつていいぢやありませんか。」

彼女は暫く口を噤んでゐたが、聽て濟まなさうに笑ひながら、優しきと深みのゆる聲で言つた。

『私達女は矢張り不幸ね。私達ぢやさう無造作にはゆかないわ……だけれどそんな事を言はうと云ふのぢやなくつてよ。』彼女は周章て、自分の言葉を切つた。『あたし訊くわ……私達は別れてしまへば、多分もう永久に會へないでせうね……今となつたら何でも言へるわ……貴方は幸福なの？ 幸福だつた事もあるの？ 私でも他の女でも同じ事？』彼女は自身を冷笑しながら言ひ加へた。

ミハイロフは彼女の方へ視線を上げた。

『幸福だつたことなんかあるもんですか。』彼は胸底から眞實を絞り出したやうな聲で答へた。そして不吉な悪寒を胸のあたりに感じた。

エヴゲニヤ・サモイロヴナは長い間黙然と見てゐた。彼女の晴やかな美しい顔には暗い影が走つた。

『さうでせうとも……私だつて知つてゐるわ。』彼女は鋭い色を浮べながら言つた。『セルダイ・ニコラーエヴィチ！ 貴方は不幸者ですよ。もう貴方は……』

三度目の鈴が激しく鳴つて、群衆は列車の方へ流れ寄つた。ミハイロフは彼女の手に接吻しようとした。その時ジェーネチカは男から離れて、通路の壁にびつたりと寄り添うた。そして自分の位置を譲らぬために、婀娜やかな體軀を屈めながら笑つた。ミハイロフは最後の

言葉を聞き落して、群衆の頭ごしに彼女の方を見た。肥大な士官が階段に昇つて、リラ色の大きな帽子を被つた婦人に聲を掛けてゐる。

『お父さんにお傳へ下さい。降誕祭までには、二日でも三日でも屹度ゆきますから。』接吻してゐる者もある。叫んでゐる者もある。

——手紙を下さい！ 皆さんに宜しく！ 私を忘れないで！ 御無事で——

群衆は氣のつかぬ間に、ミハイロフを段々と車から遠ざけていつた。彼とジェーネチカの間には、最早冷たい、餘所々々しい、そして敵意でも有りさうなものが生じてゐた。最後の優しみを浮べた黒い眼は、彼の方を遠くから見えてゐる。唇は以前のまゝ微笑を浮べてゐるが、その眼は何處となく悲しげで、言葉では言ひ盡せなかつた——もう永久に言ひ得ない事までを物語つてゐた。言葉を取り交す事は出来ない。ミハイロフは無様に笑ひながら點頭いてゐた。彼女の出發が一刻も遅れる事を欲すると同時に、彼は堪へ難い愚かしい首肯の狀態が一刻も早く終る事を希望してゐた。

汽車は眼にも止まらぬほど注意深く揺れて、恰かも這ひ行くやうに動き出したが、徐々にその速力は増してきた。周囲は騒がしくなつた。帽子やハンケチが揺れ出した。

眉毛や眼の黒い彼女の晴やかな顔は、段々と隔つて行く。今方まで肥大な婦人と大聲で話

してゐた軍人の無恰好な姿が、ミハイロフの傍に現れた。

「お父さんに言つて下さい……忘れないで！」

ジーネチカは軍人の頭ごしにミハイロフを見ようとして延び上つた。彼女は矢張り微笑を洩らしてゐた。けれども涙の溢れた彼女の眼や、苦しさに顫へた唇は、ミハイロフにはもう見えなかつた。

彼女の顔はもう一度階段の柱の向うに見えた。白いハンケチが動く。けれども彼女のハンケチであるか何うかは、もう分らない。窓や昇降口は幾筋かの垂直な線のやうに見える。列車の尾燈が光る。停車場の柱がすべてを永久に隠して了ふ。白い煙が棧橋の下に消える。列車の響きが段々に低くなる。程なくそれも聞えなくなる。

「行つて了つた！」

胸は引き裂かれるやうだ。ミハイロフは暫く佇んでゐたが、聽て出口の方へ行つた。前方にも後方にも両側にも、見送人が話しながら歩いてゐる。彼は自分が全く孤獨で、誰にとつても不必要な人間である事を沁々と感じた。此の感觸は彼が雨に濡れた廣場に出た時、殆んど病的と思はれるばかり激しくなつた。廣場は電燈の光に浸されて、辻馬車の眞黒な幌で蔽はれてゐた。電車の響きや馭者の聲も何となく餘所々々しい。

ミハイロフは馭者を呼んで、自分の宿に馬車を走らした。

十二

彼は無意味に自分の足下を見たり、自分の胸底に進行してゐる怪しい作用に耳を傾けたりしながら、夜の更けるまで部屋のなかを歩き廻つてゐた。

大旅館は沈黙してゐた。啞のやうな壁の向うには、騒々しい敷石道の物音がする……ミハイロフにとつては用のない人達が、何處へか絶間なく馬車を走らしてゐるのだ。

彼は蒼褪めた人間の海を想ひ浮べた。彼等の顔は、水平線上の朧ろげな蜃氣樓の中に溢れてゐる。彼等は無数だ！ 生活してゐる、繪畫や書物を書いてゐる、女に迷うてゐる、家屋を充たしてゐる、それぞれ戀をしたり惱んだりしてゐる……そして、んでに自分の戀なり苦痛なり生活なりが、最も重大な最も有意義なものと思つてゐるのだ。

ミハイロフは當惑したやうに肩を縮めた。

彼は何となく不安だつた。そして、一刻も早く何事かを爲なければならぬやうな気がしてゐた。彼は時間の無意義なる経過を、病的と思はれるまで痛切に感じ、最早永久に歸らぬ貴重なるものが、刻一刻と去りつゝあるのを意識した。併し彼の靈や肉體はこれと同時に優

柔不斷となつた。何處へ行くのも厭だ。仕事をするのも厭だ。人に會ふのも厭だ。話すのも厭だ。有らゆるものが厭はしく思はれる。自分は何うしたのか、自分には何が必要であるのか、こんな哀傷の情が何處から來たのか、ミハイロフには少しも解らなかつた。

彼は製作に掛らうとした。併し製作の代りに彼が描き上げたのは、晴やかな顔をした、眉毛や眼の黒い女の水彩畫だつた。彼は胸の内部で歎き悲しむものに耳を澄ましながら、ちつと其の繪を見詰めてゐた。

『何の事だ？』彼は怒りに近いものを覺えて、斯う自分の胸に訊いた。『ジーネチカに別れたのが、それほど悲しいのか？』

ミハイロフは肩を聳やかして、洋机の上に作品を投げ出した。

『あんな女郎が珍しいのか？ あんな代物なら何處にでも轉がつてゐる。』彼は毒づきでもするやうに、故意に野鄙な言葉を並べた。

夜の静寂に圍繞まれた大旅館のがらんとした一室では、自分の聲の響きさへ異様な不愉快なものに思はれた。物怖ろしくさへあつた。彼は洋机の處から立ち上つて、安樂椅子の上に横はつた。そして兩手を頸に置いたまゝ眼を閉ざした。

忽ち彼の眼前にはジーネチカの顔が現れた。彼女は何かを秘めたやうな、何かを詰

欠

欠

ない——彼の胸にはたゞ個々の瞬間や、或る女の肩や、他の女の肩や、また他の女の曲線が浮んで来た。顔も言葉も名前もない裸體女の姿が、過去の闇から現れて来て、沼澤の上の幻影のやうに、濃霧の中で揺めいてゐる。

それは堪へ難い哀傷の情を起させた。恰かも行詰つた道路に立ち止つて、何處へ来たのか、何のために来たののかも解らずに、呆然と四邊を見廻してゐるやうな氣持である。

「経験や印象の推移、歡樂の連鎖——これが人の一生なのだ！」何人かと胸の奥で争ひながら、ミハイロフは心ならずも、絶望的に斯う思つた。「併し何うしてこんな哀傷がある？ 病的な嫌悪がある？ それともこれは過失だつたのか？ さうすれば全生涯の過失だ！」水のやうな恐怖の悪寒が彼の胸を走つた。

「全生涯の過失ではない。自分はそればかりで生活しては來なかつた……そんなら藝術は何うだつた？」

「藝術！」ミハイロフは繰り返して言つた。併し彼の心はそれに答へなかつた。胸の内部分は死んだやうに空虚である。

「自分は藝術を愛してゐないのか？ 愛してはゐる……併し際限なく繪を描いたり、本を書いたり、肖像を捏ねたりしてゐては、人間も何時かは厭々して了ふ……」突然彼はナウーモ

フの豫言者のやうな聲を耳にした。彼の胸は狂技師の言葉に反響を起した。

ミハイロフの眼前には一つの廣間が展開された。彼は思はずも戦慄した。

彼の心は展覧會の廣間に誘はれていつた。今朝彼は其處にゐた。そして其處には彼の出品『白鳥の湖』が懸けられてあつた。

數百人の入場者が混雑してゐるにも拘らず、場内の空氣は不活潑で不愉快だつた。彼等は入場したり、退場したり、感激したり、嘲笑したりする。併し孰れにしても同じ事だ。彼等には彼等の生活もあるし仕事もある。不朽の藝術品と比較すれば、取るにも足らぬ事であらうが、彼等の身にとつたら、遙かにこれが重大な問題なのだ。

下では様々な頭が渦巻のやうに廻る。上からは美麗なる作品が彼等を見下ろす。繪畫は雜色をした一筋の帶のやうに見える。一人の職工が命令を受けて、一日に描きなぐつたものではなく、數十人の畫家が重大な事業を爲遂げる氣で、一筆毎に苦しんだのかと思ふと不思議である。

一人は牧場の印象を、一人は白鳥の浮んだ湖の印象を、或は日の出や落日やノヴゴロドの群衆を、それぞれ印象を與へるやうに彩色するのだから、無限の價値があるのだらう。それとても明日は荒廢した公園の印象を得、明後日は初雪の印象を得、續いては射撃兵の列や、

裸體女や、花束の印象を得るといふ條件なのだ。

此の世の起源から、人類は有らゆる周圍の物を描いて、殆んど眞に近いものを製作するにいたつた。彼等は何千年経つても、矢張り永遠の兒童のやうに、彼等の力に餘る自然を寫してゐるのだらう。

單純な頭腦で信じさへすれば、こんな生活も送れよう。木偶とても信仰する事が出来る。彼等は信じてゐた。今も信じてゐる。そして未來とても此の通りだらう。何故なれば、空虚の中に目覺めて、總てが空であり、氣の迷ひであるのを知るのは、あまりに怖ろしいことである。

『併し存在してゐる以上は既に事實ではないか！』ミハイロフは斯う思つた。『さうだ、事實には違ひない。併しとうに土となつた數千の人々が、畫布や粘土や紙に残した、忘れられた生活や經驗の蒼白い足跡ばかりが事實なのだ。後生の人々は、摩滅した碑銘のやうな此等の蒼白い足跡によつて、彼等が幾度か臆測した——人生は無意義であるとか、人類は「永遠」の風に撈られてゐる塵屑であるとかいふ事を、最後のページに於て究むるために、人類の歴史を讀んでゐるのだ。さうだ、彼等も早かれ晩かれ卷尾に達する。死人のやうな空虚を胸の内^{なか}部に覺えて、彼等は平然と「完」の一字を附するだらう。』

ミハイロフは苦しい不安を覚えて、何を爲るともなく立ち上つた。そして神経といふ神経が糸のやうに張りつめて、今にも断れさうな哀傷のうちに、周囲を哀れげに見廻しながら、數分間は部屋の真中に突立つてゐた。聽て思ひ切つたやうに寢臺に身を投げ捨てると、彼は電氣を消して了つた。

間もなく窓外は明るくなつた。朝は近づいた。黎明は濕つぽい霧となつて、病人の吐息のやうに、汗ばんだ窓の硝子に觸れてゐた。

ミハイロフは、徒らに眠りつかうと苛つた。時々彼は苦しい夢心地に意識を失つてゐたらしい。けれども彼は自分の眼が始終開いてゐて、心は秋の雲のやうに頭腦の内部に執拗く擴つてゐる積りだつた。

新しい日が来る、新しい會見がある、新しい思想や感情が起る……彼はなほ生き永らへて、黒髪は白髪となり、眼は霞み、手は顫へ……一輪車に縛められた囚人のやうな老畫家は、何時までも何時までも製作を續けるのだ。その晩年は退屈に過ぎるだらう。女は一人々々離れて行く、月夜は灰色の冷たいものとなる、晴天の日も薄暗いものとなる、貪慾な肉體も不快な重荷となる、藝術も厭ふべき慣習となる……遂には最後の病魔や苦痛や死が訪れて来る。そして彼にとつては全く不必要な葬儀の説教のもとに、萬事は終つて了ふのだ。

退屈である。人の一生は、不可避の怖ろしい最後を準備するために與へられたやうなものだ。

若し新しい日も來ないで、繪畫や女や苦痛や快感が、自分にとつて不要なものだつたら、どんなにいゝだらう——ミハイロフは夢心地の中に、初めてこんな事を考へた。彼には安靜が心地よい懐しいものに思はれてならなかつた。

十三

翌日彼は故郷へ歸つた。

ミハイロフは何のために乗車したのだから、自分にも解らなかつた。そして終始同じ悲しみに捉はれてゐた。

彼は寝たり、起きたり、昇降口に出たり、食堂車で酒を飲んだり、時には一時間餘りも呆然と窓外を眺めてゐた。

雨に濡れた野原は、窓外を元氣なく走つてゐた。腐敗した馬糞のやうな樹木が地面に沈んでゐる。頂垂れた林や、顫へた小川が見える。濡れた鳥が何處へか飛んでゆく。雨の暗い幕に閉ざされた此の陰鬱な果しない灰色の野原を見てゐると、苛々した考へが頭腦に浮んで來

る。

二二八

「ほんたうに此處には人間が住んでゐるのだらうか？ 彼等は何を考へてゐるだらう？ 長い日を何してゐるのだらう？ 彼等は何のために生きてゐるのだ？」

有らゆるものが陰鬱である。灰色である。蒼鬱めてゐる。雨は何時までも歇まない。大空も、地面も、森林も、村落も、飛んでゆく鳥も、荒れ果てた中間驛に立つて、呆然と汽車を見送る灰色の農夫も——總てのものが無限の悲しみを覺えて、涙を流してゐるやうに思はれる。

不眠のためにミハイロフの頭脳は濁つてゐた。時々彼は全く何事も考へずに、たゞ最後の怖ろしい事件が爲遂げられて行く事ばかりを意識してゐた。

家に著いてから、苦しい夢を見ながら、終日眠ると、ミハイロフは悉り元氣を恢復した。彼は埃だらけな畫室から視線を反らして、雨に濡れた窓外の花園を見た。そして怖ろしさに問うた。

「何の爲めに自分は此處へ來たのだ？ これはもう最後なのか？」

彼は急に狼狽して、恰かも道を迷うた男のやうに、周圍をきよろ／＼見廻しながら、長いあひだ部屋の中を歩き廻つてゐた。

夕闇は濃くなつた。ミハイロフは無意識に洋燈を點した。窓の外は急に黒くなつた。平條の縁は光つて、剝製の梟は翼を擴げた眞黒な猛鳥の姿を天井に浮べた。

洋燈の下では幾分か氣も軽くなつた。ミハイロフは茶を飲み干すと、道具を片付けて、俱樂部へ出掛ける事にした。彼は誰かに會つて見たかつた。そして老醫師アルノリヂイの事さへ不満なしに思ひ出した。

此の時リーザがやつて來た。

彼女は雨にぐつしより濡れて、胸騒ぎに氣息を詰らしながら、駈け込むやうに入つて來た。亂れた髪には灰色の被衣が掛けてあつた。彼女は狼狽したやうな、申譯のないやうな顔をしてゐた。恰かも自分の大膽に驚いて、男が自分を出迎へた態度には氣がつかないやうだ。けれども彼女の眼は歡喜に燃えてゐた。

ミハイロフは帽子を手にしたまゝ、畫室の眞中に突立つて、數秒間は當惑したやうに彼女の顔を見詰めてゐた。今方まで、彼は一度としてリーザの事を思ひ出さなかつた。彼は既に二人の關係が斷れて、リーザは永遠に自分の生活から離れて了つた事と思つてゐた。彼女は愛と歡喜に燃えた探るやうな眼をして、突然自分の傍に現れて來たのだ。其の怯々した姿には、堪へ難い發作の衝動が見える。

彼女は部屋のなかへ入るでもなく、扉口のところに足を止めて、申譯のなささうな微笑を洩らした。

ミハイロフは従順な、哀願するやうな彼女の眼を見て狼狽した。急に彼はこれが簡単な事件ではなくて、自分の眼前には、更に経験しなければならぬ惱ましいものが横はつてゐる事を意識したのである。

「あゝ……貴方でしたか！」彼は気がなささうに言つて、何を話す積りか、何を爲る積りかは、まだ自分にさへ解らずに、彼女の方へ足を動かした。

男の動作をリーザが何う思つたかは解らない。けれども、彼女の顔は突然説明し難い愛情と、限らない感激とに明るくなつた。彼女は灰色の被衣を床に投げ捨て、ミハイロフに躍り掛ると、男の頸に両腕を絡めて、男の視線を避けながら、ちつと身動きもせずにあつた。

一分間ばかりは二人ながら部屋の真中に立つてゐた。ミハイロフは、彼女の婀娜やかな温かい肉體が、雨に濕つた冷たい上着の中で、顫へながら自分に寄り添つてゐるのを感じた。そして此の上着と灰色の被衣の他、彼女は何も纏うてゐない事に気がついた。宅地は冷々として、雨は斜めに降りしきつてゐる。けれども其處には優しい温かいものが揺めいてゐた。ミハイロフは逃げようとする彼女の顔を頸の處に引き寄せて、明るい涙で一杯になつた眼を

見た。そして彼女の唇に接吻した。

リーザは身震ひした。

暫く彼女は身を退けるやうにして、ミハイロフの顔を見詰めたが、急にまた獅噛みついて、恰かも堰を解かれたやうに、彼の唇に接吻した。と、纏てまた顔を退けて、自分の幸福を信じ得ぬやうに、再びまた男の眼を見詰めた。そして彼の顔や額や髪や眼や——有らゆるものに接吻し始めた。彼女は何をしてゐるのか自分にも解らないらしい。

そして彼女は急に泣き出した。

「何うしたんですよ？」ミハイロフは震へ聲で訊いた。彼は鋭いものを胸に感じながら、まだ濕氣の残つてゐる彼女の金髪を撫で始めた。

「あたしこんなに憔悴しました！」彼女は哀れぼつく言つて、再び泣き出した。

彼はちつと口を噤んで、俯向きになつた頭を見下ろしながら、彼女の髪を撫で續けてゐた。併し一時的な優しさの衝動も消えて了つて、たゞ憐憫の情と、苦しい罪の自覚が残つてゐるばかりである。彼は父親のやうな心で、彼女の頭を撫でてゐるのに気がついた。

剝製の梟は黄色い意地悪さうな眼で、部屋隅から彼の方を見てゐる。ミハイロフは何故か此の不愉快な物怖ろしい猛鳥の瞳に視線を向けた。

不意にリーザは顔を上げて、泣きながら微笑を洩らした。

『私も莫迦ですわね！ 私の戀しい戀しい……』

彼女は毎日毎夜こんな言葉を繰り返しながら、男の事を思つてゐたのだらう。

そして再び男を突き放したり、改めて接吻したり、身を退けたり、愛情と幸福に狂つた眼を光らせてたりしてゐた。彼女は何うしていゝか解らないらしい。或は苦痛となり、或は幸福となつて、絶えず若々しい肉體の内部に溢れてゐる愛情を、彼女は何う男に傳へたらいいか解らないらしい。

ミハイロフは間が悪くなつた。苦しいほど體裁が悪くなつた。

『私の運命の人！』彼女は熱情をこめて言つた。そして此の月並な言葉はいたく彼の胸を抉つたのである。

『まア、後でいゝですよ……』彼は言つた。『それよりもお掛けなさい。立つてゐる事はなしです。』

併しリーザは言葉も耳には入らぬやうに、自分の腕から男を放さなかつた。そして感激したやうな眼を据ゑてゐた。此の時彼女は總てを忘れた。悲痛も嫉妬も街中の噂も屈辱も絶望も——有らゆるものを忘れて了つた。そしてたゞ若い神のやうに美しい自分の戀人を見

欠

欠

やうに した。彼は今日までこれ程の感情に捉はれた事はなかつたやうな気がした。

リーザは晴やかな眼を開いて、喜ばしげに周囲を見廻した。聽て暫くすると彼女は聲をあげて、火照つた顔を男の膝に隠して了つた。

ミハイロフは 覺えた。そして平生のやうに彼女の方を見てゐた。今自分の眼前にあるものは、飽き／＼するほど自分が眼にして來たものばかりだ。彼女が聲をあげて、顔を隠して了ふ事は、初めから分りきつてゐる。彼は急に退屈になつた。吐氣がするほど厭になつて來た。

『またか！』こんな苦しさが彼の頭腦を掠めて行つた。ミハイロフは彼女を突き退けて、巻煙草でも啜へながら、何處へか行つて了ひたかつた。

『まア、お掛けなさい……貴方には話さなければならぬ事がある。』彼は漸く斯う言つて、堪へ難いやうに彼女の肩を持ちあげた。

『私は貴方を愛してゐます！』リーザは狂女のやうに言つて、男の言葉には返事をしなかつた。

ミハイロフは絶望したやうに口を噤んでゐた。

『何とか言つて下さい！』リーザは早口に言つた。彼女は、矢張り男の顔を眞面に見る事が

出来なかつた。彼女は自分の氣持と融合する事が出来ないで、矢張り胸に起つた新しい感情を味つてゐた。

これは明るい感激である。の中に再生した力の、波のやうに清い流れである。處女の羞恥である。靈や肉體の原子の一つ一つが幸福であると同時に、彼女には自分が吐氣のするほど不氣味な汚らはしいものに思はれてならなかつた。

『私はとうから言はう言はうと思つてゐたんですが……幾ら私を愛したところで、それは徒ですよ！』ミハイロフは言つた。

『貴方は私の運命の人です！』男の言はうとする事を、此の一言で挫くやうに、リーザは繰り返して言つた。

ミハイロフは肩を縮めた。

『徒ぢやありませんわ、徒ぢやありませんわ！』リーザは子供らしく早口に言つて、男の手を掴んだ。そして喜ばしげに彼の眼を見上げた。

『何を仰有るんです？』彼女は可笑しいほど眞面目くさつて訊いた。彼女は、明かに安靜を装うてゐる。『何故です？ なぜ徒なんです？ 貴方は美しい私の戀人ぢやありませんか！』

ミハイロフは愈々重苦しい氣持に壓せられた。彼は何等の感興も起らない愛情の前で、途

方に暮れた。

『貴方は才能のある、美しい……私の運命の人です！』

此等の言葉は、ミハイロフを狂氣に赴かせるのであつた。彼にはこれが堪へ難いほど下卑たものに思はれた。そして胸の内部に残酷な決意の生じたのを識つた。

『一度に片付けて了ふ必要がある！』彼は唇を噛み締めながら、こんな事を考へた。

『私は貴方が考へてゐるやうな人間ぢやありませんよ！』ミハイロフは片方の眼を撃めて、微笑を洩らしながら言つた。『貴方がとるべき最良の手段は、一刻も早く私を思ひきることです！』

リーザは急に蒼くなつて、怖ろしさうに彼の方を見た。晴々とした彼女の眼には底知れぬものが閃いた。

『そんな事が出来るもんですか！』彼女は呆れ返つたやうに遮つて言つた。

ミハイロフは何と言つたらいいか解らなかつた。

リーザは大きく見開いた暗い眼で、長いあひだ彼の顔を見詰めてゐた。彼女の視線をうけた時、ミハイロフが機械的に顔を反向けたところから見ると、彼女の顔色は愈々眞蒼になつたらしい。

「貴方はもう、私を愛しては被居らないんでせう？」リーザはゆるやかに言つた。彼女にはその可能さへ信する事が出来なかつた。

「私は誰も愛してゐません！」ミハイロフは暗い聲で答へた。

沈黙が訪れて来た。リーザの唇は、何かを問はうとして、言ひ出し兼ねたやうに顫へた。「リーザさん！」ミハイロフは苦しうに言つた。彼は、リーザの異様な眼光に堪へられなかつた。「どれほど苦しいか貴方が知つて呉れさへすれば！」

「貴方は他の女を愛して被居るんでせう？」リーザは矢張りゆるやかに問うた。

彼女は譯が解らなかつた。一度男に身を委せた以上、自分自身よりも、自分の生命よりも、地上の有らゆる物よりも男を愛してゐる以上、今方のやうな事があつた以上、男が自分を愛さざるを得ないのは當然の事である。さもない時は何うなるのだ？

「もう貴方に言つた筈です……私は誰も愛してゐません！」ミハイロフは病的に繰り返して立ち上つた。

彼女は腰を下したまゝ、初めて彼の顔を見て、腑に落ちぬほど惨い懐しい表情を解し兼ねたやうに、ちつと男の顔を見上げてゐた。

「リーザさん！」ミハイロフは冷静を装つて、彼女の方も見ずに言つた。「私は餘りに多く

の女と關係して来た。貴方のやうな戀をするには、餘りに氣が弛み過ぎてゐます……私から見れば、貴方は單に女として好ましいだけです……貴方が傍にゐれば、私は自由にしたくなる……併し愛する事は出来ません……私は愛する術を知らない！」

リーザは口を噤んだまゝ、身動きもせず彼の顔を見詰めてゐた。

「貴方の愛に報いるやうな男をお捜しなさい……貴方はこれほど優しい美しい愛らしい女ですもの……貴方を愛するなら、眞實な健全な愛でなければならぬ……もう私には不可能な事です。私にとつては、貴方は多くの女の一人に過ぎません……貴方は多くの女の一人になる事を承諾して呉れますか？」

リーザは身震ひして、顔を殴打されでもしたやうに辟易いだ。彼女は遂に何かを了解したらしい。何故なれば、彼女の唇は顫へてきた。

「そんなら、女優と一緒に被居つたといふ話もほんたうなんですか？」彼女は努めて遅口に言つた。

ミハイロフは無意識に視線を反らして了つた。彼女と比べれば、彼は自分といふものが、取るにも足らぬ哀れな人間に思はれてならなかつた。

「それだつて貴方に對して罪を犯した事にはなりません……」彼は返事もせず、狼狽へな

がら言譯し始めた。「貴方を愛してゐるとは一度も言はなかつた筈です！」

彼は自分が「愛してゐる」と言つた時も、それは自分の真心から發した言葉ではないので、今では全然記憶にさへ残つてゐないのである事を識つた。

「私と一緒に？」リーザは耳を傾けずに言葉を續けた。

ミハイロフは肩を縮めた。

リーザは徐ろに立ち上つて、途方に暮れた女のやうに、身のまはりの物を捜し出した。彼女の肩は顫へてゐた。生氣のない眼は、氷で閉ざされた深淵のやうに怖ろしく坐つてゐる。其處では有らゆるものが死んでゐた。

ミハイロフは機械的に彼女の動作を追つて、彼女の手には灰色の被衣を渡した。そして手渡ししながら、彼は自分の行爲に戦慄を覺えた。

彼女はそれを見詰めてゐた。そして痙攣的にそれを引摺むと、狂人のやうな眼でミハイロフを見詰めたまゝ、自分の頬に被衣を押し當てゝ了つた。聽て頭を抱へながら、彼女は部屋から駆け出て行つた。

「リーザ！」ミハイロフは狼狽へながら聲をあげて、彼女のあとを二三歩追つた。併し彼女は振り返らなかつた。

彼は暫く部屋の真中に突立つて、開放しになつてゐる黒い扉を見詰めてゐた。

彼は自分に對する堪へ難い嫌惡の情を覺えた。恰かも總てが粉々になつて、下へ／＼と落ちて行くやうな氣持である。胸の内部には憐憫も哀傷もない。たゞ無關心な疲勞と嫌惡の痙攣ばかりである。併しミハイロフもまだ此の時は、聽て來るべき怖ろしい事柄を自覺しなかつたのである。

剝製の梟は黄色い眼玉を、彼の方に剝き出してゐた。

十四

馬車の轟きや、鈴の響きや、洋劍の音は、ミハイロフを正氣にかへらせた。

一群の人々が聲高に話しながら、足音高く入口階段を昇つて來る。數秒すると、肩幅の廣いアルブゾフの姿が、扉の眞黒な角の中に現れた。彼は鈕を外した無袖外套の下に眞赤な襦袢を着、磨き上げた、そして泥のあがつた長靴を穿いて、帽子を威勢よく阿彌陀に被つてゐた。

「わたし、わたし！」アルブゾフは足を踏みしめて、部屋のなかに入りながら言つた。「ようー、セルゲイ！一人か？君を迎へに來たんだ……行かう！」

「何處へ？」ミハイロフは無意識に訊いた。彼はまだ夢から覺めきつてゐなかつた。

長い騎兵外套を纏うた身長の高いクラウゼや、髯だらけなツレーネフや、肥大なイワーノフ中尉や、一番後方には齡若い士官や、怯々したルイスコフの一團が、アルブーゾフの後方から騒々しく入つて來た。

「俱樂部さ！ 大いに飲まう！ 皆なで一緒に飲むんだ！」アルブーゾフは両手を振りながら言つた。「僕はねえ、セルゲイ、もう三週間から飲み通しだ！ どうにも身持ちが直らないや！ (なほ何を世に爲すべきか) つて云ふのはほんたうだね……誰でも藝術家や女蕩になれるもんぢやないさ。時に女優先生は何うしたい？」

「もう酔つてゐるんだね！」ミハイロフは片方の眼を擧めながら笑つた。「つまらない事を言ふなよ！」

「つまらない事だつて？ さうかも知れない！」アルブーゾフは言つた。「女優もつまらない、他の女もつまらない。セルゲイ！ 僕は斯う言ふね。どんなもんだい？」

彼は蒼褪めてゐた。彼の顔には大きな汗の滴が流れてゐた。

「さう、さう……」ミハイロフは體よく逃げるために、心苦しくも同意した。

彼にはアルブーゾフが此の上もなく不愉快な男に思はれた。

「マスクワからお歸りですか？」馬鹿丁寧なクラウゼが不意に出て來た。「彼處の天候は何うです？」

ミハイロフは喫驚して、彼の顔を見詰めた。彼は騎兵少尉も矢張り銘酩してゐるのだらうと思つた。併し連中を一層注目すると、酒氣のないものはナウーモフ以外に一人としてゐない。序であるが、ミハイロフにとつては、ナウーモフの來訪も、重苦しい事を思ひ起させられるやうで、何故か不愉快で堪らなかつた。

アルブーゾフは大聲をあげて、頻りに両手を振つてゐた。クラウゼは默然と眉毛を動かしてゐた。ツレーネフは若い騎士のやうに口髭を捻つて、理由もなく笑ひ轉げてゐた。氣紛れなアルブーゾフに引張り込まれたルイスコフは、まだ連中に親しみきれないで、自分の動作に窮しながら、背後の方に小さくなつてゐた。

酒でも飲んだら、氣持よくなれるかも知れない、總てを忘却するために、酒で頭腦を亂したい——こんな考へがミハイロフの頭腦を掠めていつた。不可解な透明な眼をしたリーザの顔は、依然として彼の顔前に浮んでゐる。

「そんなら……行くでしょう！」彼は言つた。

「こいつは大出來だ！」黄色い眼玉をした剝製の梟が氣遣はしげに身震ひをした程、アルブ

ゾフは大声で唸つた。

アルブゾフは剝製の鼻に視線を向けた。彼は額の廣い、黒い眼の血走つた頭を下げて、大股に足を開いたまゝ、黙然とそれを見まもつてゐた。聽て暫くすると厭はしさうに顔を擧めた。

「何だつてこんな厭らしいものを置いたんだい？ それより熊を一匹届けてやらう。」

「さうしたら何處に飼つて置くんだい？」

「熊の方がいゝよ。」

「何處から捕へて来る？」

「家に一匹ゐるんだよ。」

「お宅に生きた熊が……」イワーノフ中尉は、思案顔に言つた。「部屋のなかには飼へませんなー！」

アルブゾフは狼狽したやうに彼の顔を見た。恰かも室内に熊の飼へぬ事を、今初めて覺つたやうである。

「そりやほんたうだ……モデルを片つばしから踏み潰して了ふぜ！ それも莫迦らしいな。殺して、皮を剥いでから、送る事にしよう。」

「殺しちや、熊が可哀さうですね。」ツレーネフは何故か笑ひながら言つた。

アルブゾフは暗い眼で彼の方を見た。彼の眼光には異様なものが見えた。彼は總ての人に疑惑の眼を向けてゐるらしい。

「可哀さうだ？ 莫迦らしい！ 憐れむべきものがあるものか！ 僕は射ち殺してやる！ 彼は荒々しく遮つた。「誰でも殺してやる！ 熊が何だ！ 莫迦らしい！ セルゲイの爲めなら、憐れむべきものは何にもない！ 僕は此の男を愛してゐるんよだ！ セリョージャー！ 熊が欲しいかい？」

「よせよ！」ミハイロフは元氣なく答へた。

彼は初めて顔を合せた時のやうに、アルブゾフが心にも無い事を口にしてゐるやうな氣がした。呂律の廻らぬ彼の警句には、悪意を含んだ絶望的なものがあつた。

「そんなら捕へるか？」

「諸君！ 出掛けませう！」イワーノフ中尉が言つた。

「まア、いゝよ……欲しくないのかい？ 要らないのかい？ 欲しいんなら、自分で捕へるんだよ。セリョージャー！ さうぢやないか！ え？」

ミハイロフは、素早くアルブゾフの方を見た。そして彼の暗い醉眼に露出した憎惡の燃

えてゐるのを識つた。彼は顔を反向けずにはゐられなかつた。

「君はだ、ぶ酔つてゐるねー」彼は元氣なく繰り返して、傲然と自分の美しい顔を振りあげた。「要塞に監禁されはしなかつたのかい？」

「保証金を出した。」アルブローゾフは沈んだ聲で答へた。

クラウゼやツレーネフや其他の連中はもう室外に出てゐた。ミハイロフは著更へをする時、燈火を消して、畫室の扉を閉ざした。そして彼等の跡を追うた。

最初、闇の中では何にも見えなかつた。聽て暫くすると、透間洩る光りが、花園の樹木の間に白つぼく見えて來た。三臺の馬車の影繪は黒かつた。暫く馳せ廻つたり、冗談半分に口喧嘩をしたりしてゐたが、一同は聽てそれぞれの席についた。馬車は車輪や鈴をけたたましく鳴らして、泥濘を飛ばし、犬を驚かしながら、道路を走つて行つた。

「全速力！」アルブローゾフが眞先きの三頭馬車で荒々しく叫んだ。

イワーノフ中尉は「サラヴェイ・ラズボーイニク」の曲を口笛に吹いてゐた。

其の物音も遠く消え失せて了つた時、亂れた髪に灰色の被衣を掛けた女の姿が、ミハイロフの花園にある林檎の古木の蔭から現れて來た。

畫室を跳び出すと、リーザは入口階段の上に足をとどめた。彼女には行くべき道がなかつ

た。愛情や撫愛の中に開花させようとして、彼女の健康な若々しい肉體と共に、殆んど本質的に力強く生長した總てのものは、泥濘の中に投げ捨てられ、踏み躪られて了つたのだ。甘い悲しい幻を描いてゐた頃の月夜や、園を駈け廻つたり、太陽の溫暖を肩や胸に覺えたりする事の楽しかつた麗らかな日や、有らゆる草花や、花園や、白雲と共に、全世界は穢らしい雑巾のやうに、突然皺だらけな物となつて了つた。

門の方へ近づいて來る馬車の響きや鈴の音がする。それが靜まると、周圍も内部も怖ろしいほど森然としてきた。そして、酒氣を帯びた人々の聲は彼女を正氣にかへらせた。彼女は何處へ隠れたらいか、入口階段の上でおろ／＼してゐた。彼女はミハイロフの部屋にゐた事を覺られても怖くはなかつた——今となつては、どんな事を言はれても、どんな事を思はれても構はない。けれども他人に見られる位なら、いつそ死んで了ひたい程、自分自身が不幸な、不面目な、踏みつけられたものに思はれてならない。

彼女は殆んど無意識に部屋へ駈け戻らうとした。併し急に總てを思ひ起して、先刻のやうに頭を抱へながら、園の方へ駈けて行つた。

小門を入つて來た眞黒な人々には、最早彼女の姿が見えたらう。リーザは遠くはなれた花園の隅に駈けつけた。

其處は森の中のやうに暗かつた。周囲の樹木は眞黒な茂みのやうに黙然と融け合つて、物怖ろしい闇は、底のないやうな眼で、灌木の蔭からリーザを見まもつてゐる。

雨は歇んで、黒雲は彼方の高處に切斷された。空は微光も見えないほど眞暗だが、秋の星群は煌々と樹枝の間に閃いてきた。リーザの眞上には大きな星が謎のやうに搖めいてゐる。

リーザは小枝に肩を觸れた。闇の中で冷たい滴は彼女の全身を濡らして、雨に濕つた薄い上著は彼女の肩に粘りついた。彼女は全身が寒氣に顫へてゐるのも知らなかつた。そして濕つぽい茂みの中で身を掻き消さうとするやうに、樹木に寄り添つたまゝ、ちつと闇の中に立つてゐた。

アルプーゾフの連中が笑聲をあげながら、入口階段の上に現れて、門の外へ出て、馬車の席を決めてゐるのが聞える。リーザはアルプーゾフの聲を耳にした。

『セルゲイ！ 僕の隣りだ！』

ミハイロフの名を聞くと、彼女は物怖ろしさに全身を縮めた。

往來ではけたたましく、鈴が鳴つてゐたが、それも忽ち静まつて、地面の低く震動する響きばかりが聞える。そして其の物音も次第々々に低くなつた。四邊は森として來た。靜寂は八方から訪れて、物怖ろしい沈黙といふ前兆で、眞暗な花園に警告を與へる。黒雲の上の達

し難い高處には、冷たい星群が煌々と瞬いてゐた。

リーザは幽霊のやうに音もなく花園を出て、宅地の眞中に失心したやうに足をとどめた。

『何處へ行かう？』彼女は考へるといふよりも、寧ろ此の一事を意識したのである。

家へ？ 何の爲めに？ 其處には侮辱が自分を待つてゐる。自分は生活を破産したものだ。家庭の一汚點に過ぎない。自分は何處へ行つても不必要なのだ。誰にとつても不必要なのだ。

リーザはゆるやかに入口階段の傍を通つた。彼女も一時間ばかり前には、歡喜に胸を躍らしながら、此處を駆け昇つて行つたのだ。彼女は思はずも階段の方を見た。

堅く閉された扉は闇の中に白く見えてゐた。家は黒い物の塊のやうに、重苦しく立つてゐる。暗い窓には一點の灯も見えない。

リーザは立ち止つて、家から追ひ出されて來た者のやうに、周囲を見廻した。そして突然入口階段に身を投げ捨てると、酩酊した連中が踏み荒した泥だらけな階段に顔を押し當て、了つた。

蒼白い星の光りは、階段に泣きぐづれた彼女の哀れな姿を照らしてゐた。彼女は身動きもせず横はつてゐる。そして自分が戀を失つて了つた事と、自分には行き處のない事との他

には、何も意識してゐなかつた。

一五〇

それとてもリーザは深く考へなかつた。併し、全身には發狂でもしさうな氣持が漲つてゐる。彼女から見れば、此の大きな愛は、全世界を充たしてゐたのだ、照らしてゐたのだ。自分の小さな身體からだにこんな感情の存在してゐる事が怖ろしくなつて、自分の胸には到底これを支へる事が出来ないと思はれた程、リーザは自分の愛を大きなものと思つてゐた。その大きな愛——此の世界よりも大きな——星の世界へ昇りつゝあるものが、突然誰にとつても不要なものとなつて了つたのだ。悲しみと驚きのあまり、彼女は泣く事さへ出来ないで、肩や腕を粘氣ねばりけのある冷たい泥濘どろみに汚しながら、呆然と死人のやうに横はつてゐた。

毛のもじや／＼生えた柔かい温かいものが、彼女の足を掠めた。そして生温かい犬の鼻が彼女の耳に觸れた。闇の中で尻尾を振りながら、飼犬がリーザの顔を見詰めてゐる。滑稽おどろけた鼻面では現し得ない事を語つてゐる黒い賢しい眼には、悲しい愛撫の情が光つてゐた。

リーザは毛の房々とした頸を抱き締めて、濡れた犬臭い匂ひのする肌に自分の顔をすり寄せた。

犬は喜ばしげに身を揺ぶつて、身體からだを藻掻き始めた。そして熱い氣息いきを耳のあたりに吹き掛けてゐたが、急に彼女の鼻を舐つた。

リーザは無意識に身を引いた。彼女は周囲を見廻して、眞暗な花園や、天空の星群や、階段の上で見知らぬ犬を抱き締めてゐる、誰にとつても不必要な、小さな、哀れな自分自身を見た。

我が身に對する憐憫の情は彼女の胸を傷めた。彼女は遂に總てを了解した。萬事は既に終つたのだ。自分はもうミハイロフに會ふ事も出来まい。リーザは胸を引き裂かれるやうな氣がした。併し自分は男を咎めない。自分の胸には悲しい忍従の心がある。さうだ、自分は今でも男を愛してゐるのではないか。此の上にも愛するのではないか。自分は死んで了はなければならぬ。何故なれば、自分は彼なしに生きてゐる事が出来ない。それは勿論の事だ！ 父は自分が何處にゐるのか、屹度もう知つてゐる。死んだ方が優しだ！ 自分の愛は男にとつて不要なのだ。自分を愛して呉れないと言つても、それは男の罪でない。併しあの人は何故自分を愛撫したり、接吻したりしたのだらう？ 自分が女だからであらうか？ そんな事が出来ようか？ 自分は單に女性であるばかりではない。單にあの人の所謂肉體ばかりを有つてゐるのではない。今でこそ冷たい悲しい空虚くうこなものとなつて了つたが、自分の胸には小さな太陽のやうに明るいものがあつた。あの人は、自分が可哀さうではないのだらうか？ 自分はあの人を愛してゐるのではないか。

これほど大きな美しい言葉が力無く響いて、何物をも指示しないのかと思ふと、彼女は不思議で堪らなかつた。さうだ、自分は男を愛してゐるのだが、男には自分の愛が不要なのだ。單に不要なのだ。『不要』といふ一言のために、有らゆる美なるものや、大なるものは、愚かな哀れな空虚なものとなつて了ふ。

自分が戀しさに涙を流して、毎日毎夜男の事を思つたり、幸福に氣息を詰らしながら、男の顔や愛撫を思ひ出したりしてゐた時、男は自分にした通りに、他の女を接吻したり、愛撫したりしてゐたのだ。リーザはエヴゲニヤ・サモイロヴナの事を思ひ出した。そして、きらびやかな赤い衣裳をつけた、美しい顔をした、彼女の婀娜やかな、生氣ある、敏捷な、すらりとした姿を、まさしくと眼の前に見た。彼女の胸は痛ましくせまつた。どれほど彼女の方が自分より美しいか知れない。彼女の愛撫の後では、どんなに自分が物足らなかつたらう。併しリーザは、自分の肉體が非常な満足をも男に與へたといふ一つの誇りを感じてゐた。抱擁されながら、男に快感を與へたと思つて、それを喜んでゐる自分は、どんなに哀れだらう。どんなに滑稽だらう。

堪へ難い屈辱の心がリーザの胸を壓した。彼女は何人にも不必要な自分の身體を、煌く星にさへも隠すやうに、入口階段の上に身を縮めてゐた。

不圖彼女は最後の舞臺を思ひ出した。

リーザは愛撫を哀願するやうな眼をした自分の肉感的の火照つた顔を眼のあたりに見た。その眼の潤んでゐる事は、彼女はその時自分にも分つた。どんなに自分は男の愛撫を欲してゐたらう。下等動物のやうに身を獻げながら、どれほど男の抱愛に胸を焦がしたらう。全體自分はあの時何うしてゐたのだらう？ 何うしてあんな事が出来たのだらう。男は自分を望んでゐなかつたのではないか！ 自分を喜びもしなかつたのではないか！ 自分は男に挑んだのだ。そして男はたゞ憐憫から自分を抱擁したのだ。

我が身に對する嫌惡の情はリーザの胸を傷めた。腕も足も肩も——全身が嘔氣のするほど穢らしく思はれる。彼女は射貫かれた者のやうに身を藻掻いて、立ち上つたが、そのまゝ階段の上に倒れて了つた。そして再び立ち上ると、遽しく宅地から駆け出して行つた。

十五

俱樂部では酩酊した連中が大騒ぎだつた。

組打ちでも始まつて、皿の轉げ落ちるやうな物音が酒場の方から聞える。常連はアルプーゾフの酒筵と聞いて、大抵俱樂部を出て行つて了つた。見苦しい芝居は今にも始まりさうで

ある。肥大なボーイ頭は何事もなし得ずに、酒場のあたりをうろくしてゐた。

ある者は彼に冷罵を浴びせながら出て行つた。中學校長の妻は昂奮して言つた。

『富豪なら何をしてもいゝんですか。あの様つたらありやしない！』

善良なボーイは當惑したやうに手を擴げた。

『私には何うにも仕様が御座いませんな。會議の時には是非問題にいたします……』

『會議！』校長の妻は蔑むやうに言つた。『アルブーゾフに何とか言へないのかい？ あゝ』

して置いたら、今に私達の顔まで殴るよ！』

『殴る殴らないより、ほんたうに芥子を塗りつけますぜ！』ボーイ頭に聞えぬやうに、露西

亞語の若い教師が言つた。

校長の妻は毒々しく笑つて、傲然と頭を振り上げながら出て行つた。ボーイ頭は酒場に跳んで行つて、其處らにうろくしてゐるボーイ達を叱り飛ばした。

アルブーゾフは何時もなく泥酔してゐた。彼は大聲をあげて、幾本となく酒壺を倒しては、新規に新規にとシャンパンを取りよせた。彼の顔は死人のやうに蒼褪めてゐて、眼は殆んど狂人のやうだつた。

二人の軍人が連中に加つた。一人はもう髪も白い鞭出の騎兵大尉で、いま一人はアルブーゾフに惚れ込んでゐる顔の綺麗な騎兵士官だつた。彼は、アルブーゾフの財産と放埒と不屈に心を奪はれてゐた。小さな大學生のチーシュも圖書室から入つて來た。

此の夜はナウーモフも酒を飲んだ。併し彼は酔ふまいと思つてちびり／＼と飲つてゐた。富豪アルブーゾフや將校連の一座にある事を誇りに思つてゐるルイスコフは、素晴らしい料理に眼を眩ましながら、洋机の隅に腰掛けてゐた。そして、杯や料理を手にする段になると、決つてチーシュの方を見向くのであつた。

ミハイロフは幾度か杯を干して、眞蒼な顔をしてゐた。彼の頭腦は澄み渡つてゐた。有らゆる動作や言葉や響きは腦髓に彫み込まれるやうだつた。それと同時に酔も廻つて來たが、彼は判然とそれを意識してゐた。そして熱病患者のやうに底光りのする眼で、一同を物珍らしげに見廻してゐた。何處か腦髓の隅には、長い尾を有つた灰色の臆病な小動物に似たものが動いてゐる。厭はしい記憶の一片らしい。彼はそれを捕へようとして、捕へることが出来なかつた。

チーシュも隅の方に腰掛けて、苦しさうに一同の顔を見てゐた。彼はツレグロフ家に於ける出來事が、もう一同に知れ渡つてゐるのか何うか知らなかつた。そして諷刺の出来るのを怖れて、狩立てられた獸のやうに、始終怯々としてゐた。何故か彼にはアルブーゾフが、最も侮

蔑的な嘲弄的な口調で、あの事件を言ひ出しはすまいかと思はれた。それ故に絶えず出よう出ようとしてゐたのであるが、遂にそれを果す事は出来なかつた。朦りと蠟燭の點つた裸壁の小さな部屋を思ひ出すと、苦しい孤獨の哀傷と共に、殆んど恐怖に近い感情が湧いて来る。ツレーネフは誰よりも飲んで、よく騒いでゐた。家は穏やかだし、妻は自分から外出を勧めたのだし——彼は愉快で堪らなかつた。ツレーネフは妻が愛想よく自分を迎へる事と思つた。彼は再び妻を戀するやうになつた。そして誰にでもよいから、妻が美人である事や、自分が妻を愛してゐる事を、話して見たくて堪らなかつた。

彼は始終クラウゼに付き纏うてゐた。

ひよろ長いクラウゼは餘り杯を手にしなかつた。彼は厚紙のやうに白い顔をして、ちつと黙り込んでゐた。斜めな眉毛はメフ・ストのやうな顔に鋭く動いてゐる。彼は何か緊張した考へに捉はれてゐるらしい。

『クラウゼ君！ 飲めよ！』ツレーネフは酒を注ぎながら言つた。『君は大莫迦だが、僕の親友さ！ 怒つちや不可ない！ ほんたうに莫迦だなア！ だが僕は君を愛してゐるよ、君は何時もしづんでゐるなア！ もつと愉快に飲まうよ！ こんな處で考へたつて……碌な考へは出やしない！ 君は聽いてゐないのか……』

彼はナウーモフの方に指を突き出した

『此の人は法螺ばかり吹いてゐる。君はよく法螺を吹くね。さうぢやないか！』彼は酒の上の親しみで、暗い顔をした技師に『君』といふ調子の言葉を掛けた。

ナウーモフは冷やかに笑つてゐて、何とも言はなかつた。

ツレーネフはミハイロフの方を向いて、不思議さうな顔をしながら、聞えよがしに言つた。『頭腦のある男だが……年中法螺ばかり吹いてゐる。あれはたゞ片意地に言ふんですよ。こんな人間は生涯恵まれさうもない。生を撲滅するつて……眞平だ！ 何のためにさ？ 人生は覺醒ある悪戯なりか！』

ツレーネフは夢中になつて腕を振つた。

『併し眞理もあるね……兎に角若者さ。僕は此の男を愛する……ナウーモフ君！ 君の事を言つてゐるんですよ。え？』

ナウーモフの微笑にはもう憎悪が含まれてゐた。けれども彼は口を噤んでゐる。

『誰が法螺を吹いてゐる？ 法螺を吹いてゐるのは君ぢやないか！』言葉のはしを洋机ごしに聞いて、不意にアルブゾフが口を出した。『みんな眞實の事さ！ 人生は塵屑に過ぎない。思想も哲學もあるもんか！ 人生そのものが塵屑なんだ！ 何うでもなれ！ セリョー』

ジャー 君は何う思ふ？」

一五八

ミハイロフは輝きのある眼で彼の方を見た。そして何か言はうとしたが、單に手を振つただけで、彼は何とも答へなかつた。彼の美しい顔は小兒のやうに晴々としてゐた。彼は總てが氣に入つた。總てが興味あるやうに思はれた。

「いや、貴方こそ嘘を言つてゐる！」ツレーネフは洋机を拳で叩いた。「人生には矢張り美はしいものがある。」

「何がさ？」アルブーゾフは皮肉に訊いた。

「何がとは何さ？ 少くないなア……女や戀や友人や自然や……幾らでもある！」

「莫迦な！」アルブーゾフは暗い聲で憎々しく言つた。「幸福なる戀は退屈だ！ 不幸なる戀は苦痛だ！ 書いて置くがいゝ！ 友人……友人は暗黒の日が来るまでの友さ！ 一緒に酒を飲む事は出来ても、心の中が何うかは分らない。分るもんか！ 心の中も分らないで、何が友情だ？ 君は友人のつもりでゐても、向うでは君の生活を害はうとする……セリョージャー！ 君は何う思ふ？」アルブーゾフは不意に威嚇するやうな聲で言つた。ミハイロフは思はず周圍を見廻した。

併しアルブーゾフは、もう彼の方を見てゐなかつた。何故か彼は謹聽してゐるルイスコフ

の方を見ながら言葉を續けた。

「他人が立つてゐたら、其奴を突き退けなければ、もう其處へは行かれない……どんなもんかい！ 友人だ！ 親友だ！ 君の事を僕が何う思つてゐるか解るかい？ クラウゼの考へてゐる事が解るかい？ 解るものか！ ひよろ長い獨逸人！ 顔ぢやなくつて、假面だなア……鼻つきが氣に喰はないや……あゝ……戀だと言ふのかい？ おい！ 兄弟！」

アルブーゾフは腕を振りながら言つて。

「此處に火酒がある！ 問題は酒だ！ 酒や葡萄酒ではない。僕は自分の血を吸つて、悲しみを忘れる。生が楽しくて自暴酒を飲む奴があるもんか！ 自分は幸福だからと言つて、頭腦を悪酔させる奴があるもんか！ 人間は自暴自棄になつた時、初めて杯に親しむんだ！」ツレーネフは物狂ほしく腕を突き出した。

「君が何と言つても、人生には美はしいものがある！ キリール・チミートリエヴィチーねえ、さうぢやないか？」

チーシユは氣難かしさうに點頭いて置いた。彼は胸が不快で寂しくて重苦しくて、別に適當な考へも浮んで來なかつた。そして皿の上の肉刺で滑々した菌をとると、それを口に入れて、顔を擧げた。

「僕の言ふのは眞實だらう？」泥酔したツレーネフは、沈黙の同意に満足してゐられなかつた。

一六〇

「勿論、眞實ですさ……」小さな大學生は確答を與へた。
アルブーゾフは憎々しく笑ひ出した。

「誰に罪があるかと言へば、それは人間自身が……」ツレーネフは言葉を續けた。

「何ういふ人間がさ？」アルブーゾフは瞬きながら遮つた。「殴る奴がかい？ 殴られる奴がかい？ キリール・デミートリエヴィチー 君は何方だと思ふね？」

チーシュは全身の血汐が顔に迸るやうな気がした。彼は狼狽して、周囲を見廻した。
「莫迦な事を！」彼は言つた。

「何だと？」アルブーゾフは斯う訊き返して立ち上つた。彼の血走つた黒い眼は、猛火のやうに燃えて來た。恰かも彼は鎖から脱れる口實を喜んでゐるやうである。
チーシュは彼を尻目に見て、眞蒼になつた。

「貴方はちつと言葉が過ぎやしませんか？」彼は立ち上りながら雛鳥のやうな聲で言つた。
「言葉が過ぎる？ 貴様は……」アルブーゾフは大聲をあげた。けれどもミハイロフは彼の腕を引摺んで了つた。

「ザーハル！ 何をする！」彼は叫んだ。

「放せ！」アルブーゾフは物狂ほしく躍り上つた。「君の知つた事ぢやない！」

「よせつたら……さもないければ僕は歸るよ！ 羞かしくもないのか？」ミハイロフは言ひ續けた。

アルブーゾフは忽ち彼の方を振り向いて、暫くはちつと彼の眼を見詰めてゐた。
「まア、掛けよう！ 飲まないか！」

アルブーゾフは默然として、彼の眼から凝視を反らした。ミハイロフも口を噤んで、腕を引摺んだまゝ、アルブーゾフの眼を見詰め出した。その腕は愈々激しく顫へてゐたが、敢て振り放さうとはしてゐなかつた。何故かミハイロフは、若し此の腕を放したら、アルブーゾフが自分を張り倒しはすまいかと思つた。彼は眞蒼な顔をして、一層緊りと引摺んでゐた。急に腕の顫へは止つて、ミハイロフの指の中にぐんにやりとなつた。アルブーゾフは無意識に腕を振りほどいて、彼の方を見もせずと言つた。

「もうこんな事を言ふのは止して呉れないか……僕は好かない……」
そして俱樂部中に聞えるやうな聲で言つた。

「まア、飲まう！ いぢぢやないか！ キリール・デミートリエヴィチー 飲まう！ 僕はこ

んなに……酔つばらつてるんだよ！ さア！ 握手をしよう！」

チーシュは手を出さなかつた。けれども一同は彼を取巻いて、説得し始めた。アルブーゾフは人の善ささうな微笑を浮べながら、自分から彼の方へやつて来た。

「さア、もういゝ……何でもないぢやないか……仲直りをしようよ！」

「怒り給ふな！ キリール・チミートリエヴィチ！ よく見給へな！ 多寡が泥酔漢ぢやないか！」

チーシュは辛つとの事で腕を差し延べた。併し顔を上げはしなかつた。

「これは嬉しい！」アルブーゾフは斯う言つて、緊りとチーシュの手を握つた。そして直ぐに彼の事は忘れて了つた。暫くの間彼は口を喋んで、變に考へ込みながら酒を飲んでゐた。

ツレーネフはチーシュの傍に腰を下ろして、親しげに彼の肩を抱いた。

「君は餘り深い意味にとるから不可ない……狂犬は誰にでも跳び掛るもんだよ！」アルブーゾフは急に笑ひ出した。

「その狂犬といふのは僕の事かい？ 大尉殿！ 大出来だ！ 細君に宜しく！」

ツレーネフは彼の顔を見た。そしてチーシュの方を向きながら、人が善ささうに言つた。

「あれだ……どんな人間だか分るだらう？ 誰にでも喰つて掛るのさ……併し僕は此の男が

好きだよ！」

「大尉殿！ 僕はまた君が大嫌ひだ！」アルブーゾフは遮つた。

彼は何物かに激引されてゐる。明かに彼は口論を求めてゐるのだ。

「あの通りさ！」ツレーネフはチーシュ一人に小聲で言つた。「僕の言つた通りだらう？ 先生は僕を認めてゐないんだ……莫迦だよ！」

アルブーゾフは馬鹿に温順しい顔をして頭を掻いた。

「いゝよ……誰でも君のやうな伶俐者になれる譯のもんぢやないさ！」
そして急に身體を揺ぶつた。

「諸君よ諸君！ 諸君は未來の大文豪が我等と共にある事を御存知でありますか？ 人は見掛けによらぬものであります！」

ルイスコフは色を失つた。アルブーゾフは彼の顔を見て、意地悪さうに笑つた。

會計官の顔は黄から赤に變つた。彼は喉を詰らしながら呟いた。

「ザーハル・マキシムヴィチ！ 誰にも言はない約束ぢや……！」

アルブーゾフは喫驚したやうな顔をした。

「何うして君の事を言つてゐるんだと思ふんだ？ 大文豪といふのは僕の事かも知れないぢ

やないか。そんなら君は大文豪なのかい？ 僕は知らなかつた！ 自分で名乗るからにや、君の事にして置かう。諸君！ 私は未來のトルストイを諸君に紹介する光榮を有します。諸君よ！ 彼は一會計官に過ぎずと思ふ事なかれ！』

ルイスコフは兎のやうに狼狽し出した。

『いえ、私は……私だと……反對に……貴方の事なんですか？』

アルブーゾフは耳も借さなかつた。

『諸君！ 我が大文豪の近作を朗讀いたしませうか？ 如何です？』

『こいつは聽物だ！』肥大なイワーノフ中尉が言つた。彼は酒筵の初めから、此の會計官が氣に喰はなかつた。

『朗讀して下さい！ ザーハル・マキシムヴィッチ！』美しい騎兵士官が言つた。

アルブーゾフは物々しく懐中ポケットに手を入れて、水色の薄い手帳を取り出した。チーシュは直ぐにそれと氣がついた。

『さア、諸君……聽き給へ！ 「戀」アレクサンドル・ルイスコフ作……』

『ザーハル・マキシムヴィッチ！ どうか……何ですよ……お願いですから……何故私を嘲弄なさるんです？』

『嘲弄するもんか……僕は評判にしたいんだよ！』

『ねえ、お願いですから！』ルイスコフは立ち上つて、腕を手帳の方に延しながら言つた。彼の蒼秘めた顔は斑点だらけで、額には汗が溜つてゐた。

『不可いひないつたら！ 書いた物は書いた物だ！』

ルイスコフは手帳を掴まうともせず、たゞ力なく指先を動かしてゐた。アルブーゾフはさも彼の手に氣がつかぬやうに、手帳持つ手を彼の手から遠ざけなかつた。

『では、諸君！ 謹聽し給へ！ アレクサンドルは公園の並木路を行つた……栗色の柔かい髪が額に捻れた彼の蒼白い顔は……』

『ザーハル・マキシムヴィッチ！』ルイスコフは必死になつて、手帳を引掴んだ。『私はいやです！』

『い……や……か……い？』アルブーゾフは一字々に發音した。『朗讀させては呉れないのかい？ 残念だな！ 僕は讀みたたくつて堪らないんだが。』

『不可いひません！』ルイスコフは哀れた微笑を浮べながら言つた。

『不可いひない？ 勝手にしやがれ！』アルブーゾフは物狂ほしく叫んで、手帳をルイスコフの顔に叩きつけた。

ルイスコフは蹠^{よろの}踏^のきながら、扇のやうに彼の顎に當つた手帳を引摺んで、胸の中に揉み込んで了つた。彼は「何をしやがる！」とでも言ひたさうに、周圍^{あたり}を見廻してゐた。

ルイスコフの顔は、彼が冷罵を浴せ兼ねたほど哀れだつた。言葉を掛け兼ねたほど哀れだつた。一同が氣まづい思をしたほど哀れだつた。イワーノフ中尉さへ顔を反^そ向^せけて了つた。たゞアルブゾフ一人は暗い眼を据ゑてゐた。彼の眼には悪意の火花が閃いてゐた。

「君が作家といふ柄かよ！」彼はある快感を覺えて、不得要領に言つた。「おい！ 技師先生！ 君の健康のために、君の思想のために祝杯を上げよう。ちつと君は狂人^{きやうご}じみてゐるなア！ 君の理想も狂人じみてゐるよ。飲み給へ！」

ナウーモフは杯を上げた。

アルブゾフは新規の生費を捜すやうな眼で、洋机^{ライブル}の周圍を見廻してゐた。

「クラウゼ！」彼は叫んだ。「獨逸人！ 君は遠からず自殺するのるか？」

「間もなく……」騎兵少尉は冷やかに答へた。

これは一同が瞬きをしたほど思ひがけない返答であつた。

「また始つた！」アルブゾフは面喰ひながら叫んだ。「間もなくとは何だい？ 此處でやる氣なのか？」

「此處で直ぐに……」クラウゼは矢張り冷やかな聲で繰り返した。

此の時一同は彼の顔が不快と思はれるまで蒼褪めて、鋭^とつた顎が痙攣に引釣つてゐるのを識つた。

「冗談を言ふ！」不意にアルブゾフが顫へ聲で叫んだ。

「私は冗談を口にした事がない！」クラウゼは低い聲で答へた。

忽ち彼は身長^{せいち}いっばいに立ち上つた。厭^{いと}ふべきメフ^{メフ}・ストの顔には、斜めな眉毛が黒々としてゐる。

一同は此の時初めて、クラウゼが盛装してゐるのに氣がついた。(後になつてこそ深い意味のあつた事を思ひ出したのであるが、此の時には一同もこれを氣に止めはしなかつた) 彼は新調のきらびやかな制服を着て、銀色の制帽を被つて、磨きあげた靴を穿^はいてゐた。深く考へないにしても、彼等は此等の目立たぬ詳細によつて、彼が冗談を口にしてゐるのでない事だけは覺らざるを得なかつた。

汚れた皿や杯や酒壺が亂れて、赤酒が血のやうに流れた洋机^{ライブル}の周圍には、怪しい動搖が漂うて來た。誰かが聲をあげたやうだつた。チーシュとミハイロフは思はず席から立ち上つた。ナウーモフは何か言はうとしたが、クラウゼが水のやうに嚴然と彼の方を見たので、遂に一

言も口にする事が出来なかつた。アルプーゾフは一笑に附さうとした。

『おい！ 獨逸人！』

クラウゼは品位のある冷たい眼で彼の方を見た。不思議な事には、眉毛の斜めな彼の顔に凝視されると、誰しも黙然と自分の席に竦すくんで了ふ。水のやうに冷たいものが彼の方から流れて来て、有らゆる人を其の場に凝結させて了ふのである。

『直ぐにやります。』幾らか低い聲ではあるが、クラウゼは落著きはらつて言つた。『腑に落ちないかも知れない……場所もあらうに……併しこれには理由があるのです。私は怖ろしくも可笑しくもない時の来るのを待つてゐた……その必要があつたのです。こつそり死んで死ねない事もなかつたでせう。併し一言いつて置きたい……私は自分の死を悲劇と思はれたくないのです……私が生きてゐられないと言つても、それはあの人……』

クラウゼはナウーモフの方を向いた。

『人道や流血の河は私の知る所でない……生きてゐられる人は、生きてゐるがい……併し私は生きてゐられない。私は單に面白くないから、生きてゐたくないのです。それだけの話だ。悲劇でもない、恐怖でもない、狂氣でもない、單に面白くないのです。自然、美——小さなものだ。私を倦怠させる。戀も小さなものだ……人道も愚である。創世の祕密は不可

解ですが、それも一度判明すれば、矢張り興味の無いものとなつて了ふ。總てが既知の事實と同様に愚です。永遠のなかでは大小の區別がない。不思議と言へば、憐レナ寸ツナとても不思議です。併し我々はその祕密を知つてゐるので、憐寸に興味を起さない。何が發見された所で同じ事だ。神の本體も、知つて見ればつまらないものでせう。神が何うの斯うのと頭腦を憐レナ寸ツナには當りません。一言いつて置きたいのは、あの人のやうに説教ばかりしてゐるのでない事です……』クラウゼは再びナウーモフの方を指した。『私には興味が無いが……他人は強ツナちさうでないかも知れない……もう一言私は別離の挨拶を告げたい……もうお目にかゝる事もありますまい。若し顔を合せるやうな事があつても、矢張り退屈でせう。何故と言つて、不死ほど退屈なものはありません。またより以上の生活も望みますまい。』

途切れがちな彼の言葉が終つた頃、一同はもう自分の席から立ち上つてゐた。彼の言葉を信じてゐた者はなかつたが、また信じてゐた者もなかつた。怖ろしい前兆を湛へた底光りのする腫や蒼白い斑點の連鎖——洋机を取巻いてゐる人々の顔は異様だつた。總ては怖ろしい緊張の中に凝結して、騎兵少尉の聲は靜寂の中に冷然と響いてゐる。

突然甲高い叫聲が響いた。若い士官が眼を圓くして、兩手で洋机を掴みながら、一息に叫んだ。

「射る、射る、射る……」

一七〇

周囲は動揺して、物騒がしくなつた。椅子は轉げた。誰だか腕を延ばして、クラウゼに跳び掛つた者がある。死人のやうな騎兵少尉の顔は振り返つて、驚愕したやうに、權威を有つ者が命令するやうに、斜めな眉毛は殆んど氣のつかぬほど動いた。彼に跳び掛つた男も腕を延したまゝ立ち竦んでゐた。一同には此の時クラウゼが後退りして、或る空間が彼を圍繞したやうに思はれた。臆ろげな彼の顔は、其處——餘程隔つた處から、彼等の方を見てゐる。騎兵少尉は手ばやく騎兵洋袴の懐中から連發短銃を取り出して、忽ち銃腔を自分の口に當てた。

彼等は踉蹌いて、無意識に眼を閉ざしながらも、發砲の瞬間をそれと知らなかつた。それは自覺が與らぬほど、唐突なあつけないものだつた。そして騎兵少尉のひよろ長い身體が、椅子を突きつけて、項を壁に打ちつけながら、どつと床に倒れた時、彼等は初めて夢から覺めたやうに、甲高い恐怖の叫聲をあげて、彼の方へ躍りかゝつて行つたのである。

十六

倶楽部の燈火は悉り消されてあつた。方々から駈けつけて來た士官達の姿が、薄闇の中を

うろ／＼してゐる。白髪の聯隊長も程なくやつて來た。彼は誰にも挨拶しないで、帽子や外套を着けたまゝ、屍の方へと忙しげに行つた。

酒場の後方には暗黄色の燭臺がたつた一つ點つて、取り散らされた廣い部屋を朦りと照らしてゐる。皿や杯や酒壺が以前のまゝに並んで、火酒や葡萄酒が居酒屋のやうに滾れた洋机は、最早隅の方に片付けられて、塵屑や吸殻で蔽はれた床の、綺麗に掃き清められた處には、騎兵少尉クラウゼの屍が横はつてゐる。

最早ひよろ長い身體は、酒場から持つて來た洋机掛で蔽はれてゐた。その下には磨きあげた長靴の底が、離れ／＼に突き出てゐる。頭のあたりには薄黒い汚點が濡れて、死人の横顔が印されてある。

一人の士官が進み出て、洋机掛の端を上げた。聯隊長は思はず身震ひをした。眉毛の斜めを見馴れた長い顔を期待してゐた所に、彼は血液と灰白色の物との、嘔吐を催すやうな搗雜物を見たのである。血液は床に流れて、頭の周囲には眞黒な水溜りが出來てゐた。倒れる時に項の當つた處には、幾つかの肉片が粘り付いて、その一つ一つから、眞黒な血の絲が流れてゐる。

聯隊長は、脱帽して十字を切つた。鈎鼻の彼の美しい顔は、突然痛みを覺えたやうに顰

だ。肩は顛へて來た。

『怖ろしい！』彼は誰に言ふともなく言つた。『實に意外だ！』

肥大な中隊長は頼りなさうに手を振つた。

『思ふに……これは……單にアブノーマルなのでありますな。譯が解らない……少しも譯が解らない！』

聯隊長は堪へられないやうに肩を締めながら其處を去つた。彼は扉口の處で、もう一度白い長い屍の方を見た。併しクラウゼの顔はもう洋机掛で蔽はれてゐた。

『怖ろしい！』聯隊長は繰り返して言つた。そして出て行つた。

部屋々は勿論、玄關にさへも、眼の色の變つた、顔色の蒼褪めた士官達が集つてゐた。クラウゼの様子がたゞならぬ噂は、聯隊中に擴まつてゐたが、誰一人として其の原因を知る者はなかつた。彼等は今となつて、此の怖ろしい最後を前徴してゐた有らゆる詳細を理解する事が出來たのである。彼等はこれを豫感しなかつたのを不思議に思つた。そして軍人社會の娛樂から遠く離れてゐた彼の孤獨生活や、毎夜のヴィオリンセロの彈奏や、彼が多讀であつた事や、最近は腑に落ちない點が多くて、不可解な行動——教練の最中に焚火をして、一時間餘りも炎を見詰めてゐた事などを話し合つた。

聯隊に於ける他の同僚からすれば、クラウゼとかなり親交のあつた、色の黒い、小さな、捷敏な士官は、好奇の色を浮べた彼の口もとを見てゐる將校達に言つた。

『昨日の三時頃寄つて見たんだが、彼奴はまだ着物を着てゐなかつた。寢臺に腰を掛けて、靴を持つてゐるんだ……僕は何を見てゐるんだつて訊いてやつたよ……と、彼奴は何にも見えないから問題だとか言つてたぜ。暫くすると笑ひ出して、靴を投げ出して、横になつて、厭だ厭だと言ふんだ。何が厭なんだつて訊いたら、何もかも厭だなんて言つたつて。實際彼奴の顔と言つたら、何もかも厭さうだつたぜ……ほんたうに……僕は何だか様子が訝しいと思つたよ。』

『實際厭だつたのだらうさ！』陰鬱な顔をした年輩の將校が唐突に言つた。『何時も同じ事ばかりだもの……教練、作業、骨牌、火酒……厭になるのは當然だ！戦争でもあればなア……さうでもなければ、額を射貫いて、始末をつけたくもなるさ……立派なもんだ！』

彼等は一言も聞き洩らすまいとして、好奇心に驅られながら彼の方を見た。總てが怖ろしい。總てが訝かしい。隣室には謎の屍が横はつてゐる。骨牌を戯つてゐる者も、酒を飲んでゐる者もなく、部屋といふ部屋は驚愕にうたれた人々で一杯である。一時間ばかり前までは、彼等の生活も平生のまゝで、總ては平常と少しも變りがなかつた。不意に鳴り響いた砲

聲は、彼等を軌道から突き退けたのである。彼等が爲し得た事は當惑と狼狽ばかりで、何うしたらいいか、何と言つたらいいか、一人としてそれを知つた者はなかつた。恰かも蒼腿の亡霊が、眠れる人々の真中に突然現れたやうなものだ。彼等はたゞ氣遣はしげにうろくしてゐた。クラウゼといふ名も消え失せて了つたやうに思はれる。彼の事を話すにも「彼」といふ人代名詞を用ゐて、殆んど囁くやうに此の言葉を發音してゐた。而かもその私語には敬意に近いものさへ加つてゐた。

老将校の言葉は彼等の胸を痛めた。此の時彼等の眼前には、意義も光輝もない自分達の生活の灰色の縞が閃いたのである。或る者は全く顔色を失つて了つた。併し多くはたゞ何事かを驚いただけだつた。そして侮辱されたやうな顔をしながら、彼の傍を離れて了つた。

「併し僕に言はせれば、あれは小心に過ぎないんだなア」陸軍大學に憧憬されてゐるキザな中尉が言つた。彼は聯隊の同僚より餘程見識が高い積りでゐた。

「何が小心だ？」年輩の將校は暗い聲で遮つた。

「さうさ、額を射貫く位の事なら……誰にだつて出来る！ 容易い事だ！ 人間は苦悶しなければ不可ない、向上しなければ不可ない。徒らに失心すべきでない！」

「容易い？」年輩の將校は皮肉に瞬きをした。「そんなら射つて見るがいゝ！」彼は斯う言

ひながら退いた。

中尉は彼の後姿を蔑むやうに見て、頭腦に浮んで來たまゝの事を言つた。

「併し露西亞の軍人にとつては……恥づべき事だ！」

年輩の將校は腕を振りながら、クラウゼの横つてゐる部屋へ足を運んだ。彼は何事かを會得したさうに、暫く長い白い身體を見詰めてゐたが、聽て溜息を洩らして、小さな十字架で秘かに十字を切ると、急ぎ足に俱樂部を出て行つて了つた。

彼に續いて、他の連中も歸り出した。將校達の高い聲は、なほ暫くの間、眠つた街の静寂を破つてゐた。

俱樂部は空虚になつた。洋燈はまだ何處かにたつた一つ點つてゐて、陰鬱な薄闇は、閉鎖された廣間や客間の内部を、冷やかに支配して了つた。

酒場の後方の小さな部屋には、ミハイロフとアルブゾフとナウーモフの三人だけが残つた。

ボーイは彼等のために小机を出して、蠟燭に火を點した。ミハイロフは兩肘をついて、光つた眼を蠟燭の炎に向けてゐた。アルブゾフは部屋の中を行つたり來たりしてゐた。ナウーモフは陰に坐つてゐるので、彼の表情は判然と見えなかつた。

彼は胸を壓しつけられるやうな気がした。一人として、平生の自分にかへつた者はなかつた。そして時にはこれが現實ではなくて、總てが不可解な怖ろしい悪夢のやうにも思はれた。

鼓膜には依然として發砲の響きが残つてゐる。眼前には眉毛の斜めな、眼光の怖ろしい、白い長い顔が浮き出てゐる。それには最後の瞬間に起つたものがある。痛ましく胸を突くものがある。何人にも不可解なものがある。

心は意義も秩序もなしに混亂する。時には氣息も吐けないと思はれるほど重苦しくなる。一人として口を利かうとする者はなかつた。

最後に俱樂部を出て行く將校連の聲が玄關に消えて、不安や物音や動搖の後の物凄しい靜寂が、人氣のない部屋を惡寒のやうに襲つた時、アルブーゾフは身震ひをして、眼に見えぬ重荷を投げ上げでもするやうに腕を振つた。そして氣息も吐かずと言つた。

「片がついた……何うも思ひあたらない……時が時、場所が場所だからなア……僕は最後まで冗談だと思つてゐたよ……眞劍だつたんだなア！ 哀れな男だ！ 併しそれが何だ！ 要するに我々も結局は彼處に行くんぢやないか……早晩死んで了ふのさ！ 雜作ないもんだ！ 畜生！」

「それは勿論だ！」催眠状態に陥ちかけたやうな眼を、蠟燭の炎から離さずに、ミハイロフは吃り聲で言つた。「併し兎に角怖ろしい……思ひがけなかつた！」

アルブーゾフは重い頭を俯向かしながら、部屋の中を歩いてゐた。暫くすると彼は足を止めて、急ぎ込んだ聲で言つた。

「ちよツ！ 諸君！ 憂さばらしに飲まうぢやないか。何うだい？ 胸がむか／＼する！」彼は頸を振つた。そして襯衣の襟を掴みながら、力まかせにそれを引き裂いて、牡牛のやうな頸を露はにした。

「飲まう！」

ミハイロフは飲んだ所で同じ事だと言ひたさうに肩を小さく縮めた。

アルブーゾフは酒場の方へ出て行つた。そして直ぐに歸つて來た。寢惚けた顔のボーイが、二本の酒壘と杯を持って來た。

アルブーゾフは眞蒼な、そして妙に引釣つた顔をしてゐた。

「寢てゐたな！」アルブーゾフは片方の眼を擧めて、笑ひながら言つた。彼は顫へた手で各の杯に葡萄酒を注ぎ始めた。

ミハイロフは素早く顔を上げて、ちよつと見たが、再び蠟燭の方へ視線を向けた。

「おい！」アルブーゾフは叫んだ。「セリ。ージャー！ 取つて呉れ！」

ミハイロフは無意識に杯を取つた。

「技師！ 君は？ 飲み給へ！」アルブーゾフは叫んだ。「何だつてそんな處に隠れてゐるんだい？ 良心が責めるのかい？」

彼は笑ひながら言つた。併し何故かナウーモフの方を見なかつた。ミハイロフは素早く技師の方を見たが、直ぐに顔を反^{そむ}けて了つた。

ナウーモフは部屋隅から立ち上つて、洋机^{ダイブ}の方へやつて來た。明るい處で見ると、彼の顔は眞蒼であるが、眼ばかりは嚴^つと坐つてゐる。

「貰はう！」彼は鋭い聲で言つた。

アルブーゾフは杯を出した。技師はそれを受けたが、唇を觸れようとはしなかつた。彼は杯を手にしたまゝ、愚弄するやうにアルブーゾフの顔を見た。

「君は……クラウゼの死の罪が私にあると言ひたいんだらう？」彼は訊いた。彼は殴打のやうな返答を期待して疑はなかつた。

アルブーゾフはむつとしたやうに、黒い血走つた眼を据えた。

「そりや君さ！」彼は荒々しく答へた。

療聲の影がナウーモフの顔を走つた。彼は暫く口を噤んでゐた。ミハイロフは頭を起して、彼の顔を見上げた。

「私は、敢て此の光榮を辭さうとするのではない。」技師は強ひて笑ひながら言つた。「けれども遺憾ながら、私には無關係な事だ！」

「さうかね？」アルブーゾフは皮肉に頭を振つた。

「さうさ！」ナウーモフはきつぱりと言葉を續けた。「生を欲してゐる者に自殺を強ひる事は出来ない……如何なる思想も辯舌もその効がない。それこそ鐵に釘だ！ 若しクラウゼが以前からあゝいふ考へを持つてゐなかつたら……」

「君！」アルブーゾフは遮つた。「序^{ついで}に斯う言つてもいゝだらう！ あゝいふ考へを有つては有つてゐたが……」

「だが、最後の一滴を注入したのは私だといふのか？ 或はさうかも知れない！ 寧ろその方だらう！」技師は慘^{せつ}く言つた。「それにしても、私は別に驚かない！」

「お聞きなさい！」ミハイロフが突然に言つた。「それはさうとして……貴方の主義や思想は暫く措きませう……普通の人間になつた積りで、一度だけ言つて下さい……貴方は怖ろしくないんですか？ 氣の毒でないんですか？ 自分の言葉を信じてゐるんですか？ 理窟ば

かりでなく、心から信じてゐるんですか？」

ナウーモフは素早く彼の方を見た。

「怖ろしくもない、氣の毒でもない……私は信じてゐます！」彼は鋭い聲で刈り込むやうに言つた。

ミハイロフは頼りなさうに項垂れた。アルブーゾフは足を止めて技師の顔を見詰めた。突然ナウーモフは杯を洋机の上に置いた。葡萄酒はこぼれた。彼はヒステリカルな顔をして、口早に言ひ出した。

「まア、貴方こそお聞きなさい……自分の生活を見て御覽なさい……準備なしに、怖れず……貴方はほんたうに幸福ですか？ 生れなければよかつたと思つたことは一度もありませんか？ もう一度経験したいと思ふ時が、貴方の全生涯に一分間でもありますか？ 楽しい時があつたのなら、それはどんな瞬間ですか？ それが繰り返されるのなら、全生涯が初めから繰り返されてもいいのですか？ え？」

彼は洋机に凭りかゝつて、ちつとミハイロフの顔を見詰めてゐた。彼の眼は光つてゐた。

ミハイロフは再び顔を上げた。そして彼の視線に射られた。恰かも眼前の眞黒な鏡に、複雑な自分の全生涯が映つたやうである。それは曇日の霞んだ遠方へ去り行くもののやうで、

始めもなければ終りもない。太陽の光りに似たものも彼の眼前に閃きは閃いた。併しそれはどんなに小さなものだつたらう……

「いゝや！」此の病的な悪夢から脱れようとして、彼は頭を振りながら言つた。

アルブーゾフは愉快さうに笑ひ出した。

ナウーモフの顔には熱病患者のやうな生氣が現れた。彼の顔は恰かも暗い光りで、内部から照らされてゐるやうである。

『では私から何を望むのです？ 貴方にとつて生命が何だ？ 不幸なるクラウゼにとつて生命が何だ？ 氣息を喘いで死んで行く數億の欺かれたる人々にとつて生命が何だ？ 何の爲めです？ 私は退屈な長たらしい歴史を知つてゐる……石器時代から現今まで戦鬪ばかりだ！ 國民が亡びる、文化が亡びる、藝術が亡びる、街が亡びる……それにも拘らず、我々は先へ先へと前進し、氣息を喘ぎ、呪詛の聲をあげ、呪はれたる死人の如く嚙り合ひ、自分の血と涙を全世界に充たさうとする。時には豫言者を擔ぎ上げる、時には十字架にかける、時には信仰する、時には呪詛する、時には香を焚く、時には足蹴にして……氷上の魚の如く苦悶する……要するに何の爲めです？』

ナウーモフの鋭い聲は、嚴然と響いた。彼は恰かも怖ろしい裁判の訊問でもしてゐるやう

である。

「光輝ある未來を確信するからですか？　どんな未來です？　滑稽ぢやないか！　あり得べき事ですか？　苦痛は生活の原動者であつて、一個の人間の原動者ではない。動くものの總て、我々が爲し得る事の總て、有らゆる科學、哲學、宗教、藝術……ヴァヴィロンの宮殿の如き大建築……みんな腐肉から流れ出る膿汁のやうに、苦痛が我々の體內から絞り出したのだ。若し人間が一分間でも自分を満足に幸福に思つたら、それこそ總てが同じ瞬間に破滅して了ふ。手を動かさうとする者はない。神祕や問題を究めようとする者がない。不満に對する哀傷と苦痛によつて、總てのものは運動する。苦痛がなければ生もない……これが生活なんです！　全體これは何の爲めだ……言へますか？」

ナウーモフは心から返答を待つやうに、暫く口を噤んでゐた。彼は底光りのする眼を、一人の顔から一人の顔へと動かしさへした。答へる者はなかつた。ミハイロフはちつと炎を見詰めてゐた。アルブーゾフは大股に足を開いて、額の廣い頭を俯向けたまゝ、ナウーモフの顔から眼をはなさなかつた。

「誰にも言へますまい！」技師は再び口を開いた。「若し答へる人があるなら、それは嘘を吐くに過ぎない。如何に確信しようとしても、解らないのだから仕方がない。理解すること

が出来ないのだから仕方がない。雲を掴むやうな理想や、超自然な言葉や、遠近の神を信ずるのも、途方に暮れたあまりだ！　怯懦のあまりだ！　此等は見掛け倒しの武庫に過ぎない！　佛蘭西軍と戦つた時に、支那人が使つたといふ紙張りの籠と同じ事だ！　生は霰弾のやうに、支那人や紙張りの籠を粉碎して了つた。併しこれほど見事な怖ろしい籠を、何うして敵が怖れないのだから……彼等はたゞ驚いてゐる。憐れむべき野蠻人だ！　彼等の貧しい頭腦では、紙張りの案山子に過ぎないとは思へないんです！　神を見た者はない、天國を眼にする事は出来ない、靈魂の不滅も考へられない……何うします？　案山子を投げ捨て、了ひますか？　所がそれどころではない！　今度は黄金時代だ、労働者の勝利だ、社會主義の天下だ！　今度は紙張りの異つた怪物を携へて、戰場に臨むんです！　眞理の眼を眞面に見て、赤裸々の事實を手にしたまゝ、たつた一人で眼覺めたら、全體哀れな額を何に凭せかけるんです！」

ナウーモフの聲は心から憎々しく響いた。

「彼等には解らないんだ……社會主義とか労働階級とかいふのも、限りない未來の一瞬時に過ぎない。黄金時代も三日とは續きません。誰だつて死ぬまでには——同じ絶望の來るまでには退屈する。何故なれば黄金時代にも矢張り不可解な未來がある……同じ難問題が

ある。まア、黄金時代は可能としますさ……併しそれから先きは何うなるんです？ その次は何うです？ 再び「何の爲めだ」になる。要するに何の爲めなんです？」

ナウーモフは餘りの緊張に氣息を詰らした。彼は拳を固めて、徐ろに話し出した。

『此の問題は永久に人間を苦しめます。若しこれが止んだら、若し總てを會得したら……アルツイパーシェフの小説に「大知識に就いて」といふのがある……半空想的な頗る皮肉な作品です……或る男が總てを知りたい爲めに、悪魔に靈を賣つて了つた。そして總てを會得した。翌日になると、彼は溝に頭を突込んで、そのまゝ其處に死んで了つたといふんです……アルツイパーシェフは何を知つたんだとも、何の爲めに知らうとしたんだとも言つてゐない。併しそれでいゝんです。さうなければならぬ。若し最後まで、最後の一語まで知つて了つたら、その時襲うて来る恐怖は、極めて無意義なものだ！ その時になつたら、何の爲めに生きてゐようも、何うして生きてゐようもない！ 残つてゐる問題は、見も聴きも感じもしないでゐられるのなら、溝の中でもいゝから、行き當りばつたり、頭を突込んで了ひたいといふ事だけです！』

ナウーモフは唇を噛み締めながら、再び口を噤んで了つた。彼は周圍を見廻した。

『それが誤りであるとしてもいゝ！』彼は再び口を開いた。もう彼の聲は平生のまゝだつ

た。『天國が臨り、上帝が我々の眼前に現れて、總てを我々が理解する時、今まで思ひもよらなかつた思想や、人間の貧しい知識では想像もつかなかつた目的が発見されたり、有らゆる事柄が證明されたりして、全然目的がないとは言へ、實際の幸福が訪れて来るにしてもいい！ その時になつて、幸福が何になる？ 私は何處までも「人間」の理性でそれを拒絶するばかりだ！ 私は「人間」として痴愚の中に苦しんでゐる。私は何處までも「人間」として其處を脱したくない。現世では苦痛と痴愚の悪臭の中で、野犬のやうに氣息を喘いでゐるのに、冥府では私の「靈魂」が黎明の星の如く光る……それが何です？ 況んや不死が全然證明されないとしたら、何かが何時かは何處かで輝くと言つて、それが私にとつて何です？ 何が輝くのだから私には想像もつかない！ それこそ呪はれたものだ！ イワン・イワーノヴィチといふ者が、水色の法衣を着けて、四千億世記に棕櫚の枝を振り廻すのが何です？ 彼が水色の法衣を着て、棕櫚を振りながら歩くのに、私は泥濘の中で直ぐ犬のやうに死ぬんですか？ 私はそれを望まない！ 單にイワン・イワーノヴィチのために、生きてゐて苦しむ事を望まないばかりか、そんなものは何うなつてもいゝんです！ 棕櫚や幸福を持ち腐れにして死んでもいゝ！ 若し彼に對して何を希望するかと言ふなら、それは彼が全然生れて來ないといふ事だけです。』

ナウーモフは憎々しく笑つた。

一八六

「神祕の判明に私が惹かれますか？　もう遅い！　神も計算を誤つた！　神が神祕を明かして、我々を招く時には……苦痛と絶望の中に倒れ、神祕を見るために、神の榮光を浴するために、闇の中で火花を扱めてゐる我々を招く時分には、我々も神から顔を反向けしてひますさ！　我々は神に別辭を告げないで、放して呉れと闇に言はう。他のものを見ないで、それを愛したからです。眞暗な世界を充たしてゐた涙や血を忘れる事が出来なからです。罪なき肩に荷せられた無意義な苦痛に酬いたくないからです。救す事が出来ますか？　忘れる事が出来ますか？　我々は貨物のために總てを救し、總てを忘れる飼犬ではありませんまい？　私——ナウーモフが生存してゐる間は、此處にナウーモフとしてゐる。私は死後の幸福を拒絶する。貴方がたは憎悪以外に、私から何を望むのです？　クラウゼを殺したと言ふんですか？　貴方がたを殺しますさ。若し出来るなら、全世界の人間を殺して了ふ……その時に私も自分の憎悪の緩和以外に、何處か永遠の霧の中にゐて、苦痛の杯を酌むべき自分の順番を待つてゐる數十億の不幸な人々に、大恩恵を施す事になるのを知るでせう！」

ナウーモフの聲は跡絶えた。彼は口を噤んで了つた。彼は聽者の眼前に描出した堪へ難い痛みに、快感を感じるほど悶えてゐるらしい。彼の顔を見てゐると物怖ろしかつた。彼の胸は怖ろしい憎悪の力で、苦しいほど昂ぶつてゐた。擴がつてゐた。全世界を潤すためにも、彼は斯うまで自分の憎悪を注ぐ事は出来ないだらう。

彼はコップを掴んで、喉を詰らせながら、赤い葡萄酒を飲んでゐた。

「言つた言つた！　おい！　呪はれた技師！　君も自殺しさうだなア！　何うでもするがいや！　併しもう歸らう！　此處にゐても始まらない！　さもないと僕は誰かをやつつけさうだぜ！　自殺するかも知れない……歸らうよ！」

彼は帽子を掴んで、扉口の方へ行つた。けれども扉口まで来ると、彼は急に足を止めて、氣味の悪い微笑を浮かべながら振り返つた。

「友達を訪ねてやらないか？　彼處で何うしてゐるか見に行かうよ！」

ミハイロフは機械的に立ち上つた。彼の頭腦は、蒼褪めた恐怖の幻影で霧のやうに充たされてゐた。もう酒の酔も全く醒めて了つたが、彼は眞蒼な顔をして、泥酔漢のやうに踰躑いてゐる。

彼等は酒場に入つた。ナウーモフは矢張り眼を光らして、唇を引締めながら、二人の跡に續いた。

蒼白い黎明はもう窓を見詰めてゐる。人氣のない部屋の内部は冷えくとして、何となく不快だつた。骨牌机の上には白墨や骨牌が散らばつてゐる。撞球臺の青い羅紗の上には白い球が凝結して、椅子は今方が客が立つたやうに亂雑である。床には巻煙草の吸殻が散らかつて、乾いた泥の足跡が残つてゐた。

クラウゼの屍は白い洋机掛で蔽はれたまゝ、床の上に横はつてゐた。蒼白い黎明の光りの中では、夜の間に延びでもしたやうに、それが一入長く一入細く思はれる。

アルブーゾフとミハイロフとナウーモフは、眞白な洋机掛を見詰めながら、暫く其處に佇んでゐた。屍の角ばつた部分は、白い洋机掛を突き上げてゐる。

クラウゼは、身動きもせず横はつてゐた。恰かも白い屍衣の下に身を隠してゐるやうである。これがクラウゼその人ではなく、彼の屍に過ぎないとは思はれない。死人の眼は白い織物の下に光つて、生きた人々を黙然と追うてゐるやうな氣がする。

彼が始終穢れた冷たい床に横はつてゐて、指一本動かさなかつたのかと思ふと不思議である。何故かミハイロフの頭脳には奇妙な考へが浮んで來た。彼は起き上りはすまいか？ 頭

を打碎かれたひよろ長い屍は、扉口の方へ歩いて行きはすまいか？ そして彼等の方を白い眼で透き見しはすまいか？

彼は無意識に周圍を見廻して、扉口の處まで飛び散つた黒い血の痕を見た。恐怖の悪寒は彼の背筋を走つた。彼は神経質に笑つて、さつさと部屋から出て行つて了つた。

ナウーモフは彼に注意も向けなかつた。彼の笑聲を耳にしなかつたのだらう。アルブーゾフは不眠のために赤くなつた眼で、彼を扉口の處まで見送つた。

『さア……僕等も行かうよ！』彼は言つた。

ナウーモフは振り返つた。彼の疲れた眼はアルブーゾフを悲しげに見た。アルブーゾフは彼の顔に氣がつかかなかつた。技師はちつと見詰めてゐた。彼の喰ひ縛つた唇の周圍には、優しい悲しみの情が浮んだ。彼の荒んだ考へは此の時急に消え失せて、優しい美しい人間の悲しみばかりとなつたらしい。

『何うした？』アルブーゾフは顫へ聲で訊いた。『何とも仕様がな！』これが君の理想なのか！クラウゼこそ氣の毒だ！立派な男だつたがなア……行かう！』

宅地で馬車の座席に腰を下ろした時、アルブーゾフは蒼褪めた顔を、ミハイロフの方に向けた。ミハイロフは出口の處で挨拶を言つてゐた。

「セリョージャー！ 何だい？」彼は最後の最も重大な事を聴かうとするやうに尋ねた。ミハイロフは苦しうに手を振つて、大通りの板敷道を急いで行つた。三頭馬車は彼を追ひこして、町角を曲つた。そして車輪の響きも遠く静まつて了つた。街はもう目覚めてゐた。女達は籠や壺を持つて市場の方へ行つた。教會堂の入口には黒衣の老婆が佇んでゐた。薪を積んだ荷馬車が行く。灰色の犬が馬車の跡を追うて行く。百姓達は眠さうな眼で、ミハイロフの方を見てゐた。四邊はもう朝である。

十八

棺の翼はゆるやかに揺れて、遠く群衆の上に見えてゐた。聯隊長を初め數多の將校が、無秩序な一團をなして、棺の後方に續いた。二人の兵卒は喪服を著せられた故人の乗馬をひいて行つた。此の眞黒な馬衣は、故人の乗馬を謎めいた物怖ろしい恰好にさせた。尖つた耳はその下から突き出てゐた。圓らな優しい眼は訝かしげに見てゐた。奇怪な服装をした此の馬ばかりは、故人と親しみの深かつた唯一の友のやうに思はれる。これを見てゐると、何となく物悲しくなる。

白馬に跨つた喇叭卒が銅製の喇叭を光らして行く。その後方には騎兵銃の林が揺れ、馬の頭が一樣に動いて、地面を震動させながら騎兵中隊が進む。

葬儀は何時にたく嚴かで悲しかつた。街中の人々が道々に堵をなしてゐた。ゆるやかに揺れて行く柩を何時までも見送つてゐた人々の蒼白い顔には、驚愕したやうな、緊張したやうな、一種異様な色が浮んでゐた。葬曲は街の端から端まで響き渡つた。喇叭の響きは男性的な悲哀の中に、自分の將校の最後の怖ろしい道を葬うて行つた。

葬曲が止むと、低い合唱が聞えて、遠く道路の先方へ延びて行つた。そして合唱の止んだ頃には、墓地の鐘の音も愈々近く聞えて來た。

深い溝や石崖の向うにある十字架や、石碑や、黄ばんだ樹木や、歪んだ黄色い十字架のある白い門が見えた。柩は最後の動搖を終へて止つた。

僧侶の眞黒な法衣や、妙に裾の長い讚美歌うたひの著物は、廣く開かれた門の中へ流れて行く。會葬者は彼等のあとから、漏斗の中へでもあけられたやうに、先きを争うて流れ込んで行つた。

葬樂も止んだ。鐘の音も止んだ。そして訪れて來た静寂の中に、葬龕から柩を下してゐる將校達の低い聲と、忙しげな足音ばかりが聞える。何うすべきものか、一人として知つた男

はなかつた。そして氣の利かぬ騒ぎばかりやつてゐた。將校達は方々から駈け集つて來た。餘りの努力に顔を赤くしてゐる者もあつた。背を屈めてゐる者もあつた。棺は彼等の頭上に重々しく揺れ動いて、急に下へ卸された。將校達は彼方此方踰躍よつときながら、群衆が退いて開けた並木路を進んだ。並木路は鐵柵や石碑に圍まれてゐた。そして其處には黄色い樹葉が散つてゐた。花輪を手にした若い騎兵士官が彼等に追ひついて、歩きながらそれを棺に掛けようとした。誰だか煩うるささうに彼を叱した。けれども花輪は棺に掛けられて了つた。間の悪さに顔を赤らめた騎兵士官は後方へ退いた。花輪のリボンリボンは地面を引き摺つて、棺を運んで行く將校連の足下に垂れたが、彼の顔には満足の色が浮んだ。

教會堂の斜めな階段で、棺は波を打ちながら、暗い扉の中に入った。

小さな教會堂の内部はがらんとしてゐた。石壘の上を行く足音と、棺を圍繞とりまいてゐる金屬製の燭臺の音が判然と聞える。

總ては沈黙してゐた。嚴かな靜寂が訪れて來た。そして唐突たしなに老人らしいものの聲が低く響いた。

『主や爾は崇讃おほほめらる！』

會葬者は動搖したが、直ぐに靜まつて了つた。聯隊長は偉大なる言葉の重みを背負うたや

うに、白髮の頭を恭々まごまごしく垂れて、もう式の終るまでは顔を上げなかつた。

反響しやすい教會堂の内部を、氣紛れな波で充たすやうに、合唱が高く高く響いた。そしてそれがまだ靜まらない中に、太い聲が雷のやうに容赦なく響く。

『主に祈らん！』

『あ……あ……』圓天井の下で顫へ聲がした。

『主あはれめよ！』合唱は怯々おそした聲で答へた。

『う……お……うい！』微かに響いて、隅の方に消える。

『爾の手我を造り、我を設けり。我れ爾の戒めを守らん……』老人らしい聲が構はず落著きはらつて讀み上げた。

『主よ、爾の僕卑を憐れみ給へ……』合唱が消えながら言つた。

併し老人らしい聲は構はず先きを讀んで行く。

『爾を怖るゝ者は我を見て、我が爾の言葉を頼むを喜ばん……』

『爾の僕卑を憐れめよ……』

將校連は頭垂れたまゝ、默然と聽いてゐた。重なり合つた會葬者は溜息を吐いた。香爐の細い煙は暗青色の霧のやうに蠟燭を包んでゆく。黄色い炎は燃え上つて、煙の中に消えて了

つた。棺の蓋は開かれた。白いモスリンの下には、脛を固く結んで、冷たい額に巻かれた白布の動かぬ、誰にも親しみのない、誰にとつても不可解な怖ろしい横顔が現れた。

「狭苦しき道を通り行けるうち、十字架を首木の如く負ひ……」老人の聲は不明瞭に読み上げる。「爾のために供へし譽れと榮冠を樂めよ……」

「主や爾は崇讃めらるゝ」合唱が答へた。

「我を我が出でし地にかへし……」

氣息が苦しかつた。異様な言葉は悲しみの情を咬る。香の甘い匂ひは頭腦を眩ませる。白い冷たい光りは窓に降り注いで、蒼白く圓天井の上に融けてゆく。怖ろしい上帝は……柔らかな聲は判然と読み上げる。

「誠に物みな空し。生命は陰影なり、夢なり。凡そ地に生れし者は徒らに急がはし。聖書に言へる如く、全地を得るも、常に墓に入らん……故にハリスト神や、世を去りし爾の僕卑を安んぜしめ給へ……」

「變だ！」側の方で蠟燭の炎を見詰めてゐた若い騎兵士官は考へた。——棺に花輪を掛けようとした例の騎兵士官である。「若し萬物が空なのなら、我々は何のために生きてゐるんだ？ 全地を得るも墓に入らん？ 解らない……たゞそんな氣がするんだ！」

「人々みな行かん。たゞ墓の上の歎きに歌ひて言ふべし、アリルイヤ……」

「ハリストや、爾の僕卑の靈を諸聖人と共に……」

「いづれの生命の歡喜も悲哀を交へざらんや。いづれの榮か變りなく地に止まらんや。みな陰影よりも果敢なく、みな夢よりも空し。瞬く中に死はみなこれを奪ふ……」

聲は言ふに言はれぬほど物悲しく纏れて、集つたり擴がつたりしながら、唸るやうに消えた。若い騎兵士官は悲しみに捉はれて、泣きたくなつた。

「我れ死を思ひて泣く。神に象りて造られし美麗の見苦しくおもなく姿をうしなひて、柩に伏すを見て涙に堪へず……」

「怖ろしい事だ！」若い騎兵士官は斯う思つた。彼は堪へられなくなつて、鼻を吸つてゐるのに氣がついた。

聲は何時までも續いた。合唱が消えながらそれに答へた。時々何かの歡喜を約束するやうな長い高い歌になつたかと思ふと、聽てまた無關心な聲が頼りなげに悲しく響いてきた。立つてゐるのが苦しくなつた。そして何時まで経つても切りがないやうに思はれた。

「何て長いんだらう！」若い騎兵士官は惱ましさうにこんな事を考へた。「死人は横はつてゐて、何にも聽いてはゐない……我々は悲しいが、死人にとつてはもう何でもないんだ……」